

# 扇 城 跡

— 宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1992・3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター





扇城跡航空写真



OUGI

扇

城

跡

1992・3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



# 序

高知県中村市は、四万十川の河口に近く幡多地方の中心都市として栄えています。日本最後の清流といわれる四万十川を含め、多くの自然を残しており、豊かな水量は人々の生活を育んでいます。歴史を振り返ってみますと、土佐の小京都と称されるように一条氏の時代を思わせるような静かで穏やかな町並みを残しています。

市内には縄文時代の中村貝塚、弥生時代の入田遺跡、古墳時代の具同中山遺跡群等の著名な遺跡が所在しており、中世では中村市の中心となる中村城跡、さらに周辺には今回調査が行われた扇城跡をはじめとする多数の中世城跡が立地しています。

このような中村市においても近年開発の波は押し寄せており、自然との調和が問題となっているところです。市内に所在する埋蔵文化財についても開発との調和の中で保護・保存を進めていかなければなりません。扇城跡は記録保存として発掘調査が実施されました。その結果、城跡の姿も規模の大きな城としてその構造が解明され、歴史に新たな資料として1ページを加えることができました。発掘調査の結果をまとめた本報告書が、今後の中世城跡研究の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、今回の発掘調査を実施するにあたり、御援助、御協力をいただいた関係者の皆様及び地元の方々に厚くお礼を申し上げます。

1992年3月

財団法人 高知県文化財団埋蔵文化財センター

所長 小橋一民



# 例 言

1. 本書は、自由ヶ丘団地宅地造成工事に供う「扇城跡」緊急発掘調査の報告書である。
2. 調査は、株式会社日本綜合物産の委託を受け、高知県教育委員会の指尊のもとに財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 扇城跡は高知県中村市共同字ミノコシ8588-1他に所在する。発掘調査は平成3年5月14日から10月16日まで実施し、引続き平成4年3月31日まで整理作業、報告書作成を行った。調査面積は6,455㎡である。
4. 発掘調査は次の体制で行った。

統括—(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター所長小橋一民  
総務—同事業課長山崎浩・同主事三浦康寛  
調査担当—同調査第2係長森田尚宏・同調査補助員吉成承三
5. 本書の執筆・編集は主に森田が行い、吉成がこれを補佐した。
6. 城跡の全体測量は公共座標第Ⅳ系により、航空測量を行った。なお、航空測量は委託によりアジア航測(株)が実施した。また、各郭については、中心線を基準とした任意のグリッドを展開した。
7. 検出遺構、出土遺物は遺跡全体の通し番号とした。また、遺物の挿図、写真図版は同一番号である。
8. 調査にあたっては、委託者である(株)日本綜合物産から多大な御援助をいただいた。また地元関係各位及び中村市教育委員会には御協力いただき、報告書作成では埋蔵文化財センター諸氏の助言をいただいた。記して感謝する次第である。
9. 出土遺物等の資料は、高知県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。また遺物の注記は調査略号91-4NOである。

## 報告書要約

- 1 遺跡名 扇城跡 遺跡番号 070055 遺跡地図 No.22-51 (幡多ブロック)
- 2 所在地 高知県中村市具同字ミノコシ8588-1他
- 3 立地 四方十川と中筋川の間位置する独立丘陵上 標高55m
- 4 種類 戦国時代 山城跡
- 5 調査主体 (財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター
- 6 調査経緯 宅地造成工事
- 7 調査期間 平成3年5月14日～10月16日
- 8 調査面積 6,455㎡
- 9 検出遺構 曲輪5郭、堀切6条、掘立柱建物跡14棟、柵列8列、土坑10基、溝跡1条、段状遺構2基、通路遺構1条、ピット416個(掘立柱建物跡、柵列を含む)
- 10 出土遺物 土師質土器、青磁、白磁、染付、瀬戸、備前、東播磨系、瓦質土器、羽口、土錘、刀子、呼子、飾金具、鉄釘、砥石、渡来銭
- 11 内容要約 扇城跡は中村市街の西方に位置する戦国時代の山城跡であり、尾根続きの南方と西方に栗本城跡、ナリカド城跡が位置する。調査前の状況では、4条の堀切と6郭の曲輪が観察された。調査の結果、5郭の曲輪と6条の堀切が検出され、各曲輪では掘立柱建物跡、柵列、土坑、段状遺構等が、堀切から斜面郭では通路遺構等が存在する規模の大きい城跡であることが判明した。出土遺物は青磁が最も多く時期的にみれば15世紀を中心として14世紀から16世紀の間にわたって機能したものと考えられる。南に連なる栗本城跡の発掘調査においても、青磁を中心とし、若干の白磁、染付が出土しており、やはり15世紀～16世紀に存続していたことが判明していることから、扇城跡と同時期に存在する一連の連立式の城郭と考えられ、西に連なるナリカド城跡もその一端に位置するものと思われる。

# 本文目次

I	調査に至る経緯と経過	1
	1. 調査に至る経緯	1
	2. 調査の経過	2
	3. 調査日誌抄	4
II	遺跡の位置と環境	7
	1. 遺跡の位置	7
	2. 歴史的環境	7
III	調査の概要	12
	1. 城跡の概要	12
	2. 調査方法	17
	3. 調査の概要	19
	4. 層 序	20
IV	検出遺構	29
	1. 遺構の配置	29
	2. 掘立柱建物跡	32
	3. 柵 列	41
	4. 土 坑	45
	5. 段状・通路遺構	48
	6. 溝 跡	49
	7. 堀 切	49
V	出土遺物	51
	1. 土師質土器	51
	2. 青 磁	51
	3. 白 磁	52
	4. 染 付	52
	5. 瀬戸・美濃系	52
	6. 備 前	53
	7. 東播系・瓦質土器その他	53
	8. 土 製 品	53
	9. 金属製品	53
	10. 石 製 品	54
VI	まとめ	55
	1. 遺 構	55
	2. 遺 物	58

## 挿 図 目 次

Fig.1 扇城跡位置図……………	1	Fig.20 S B 12……………	39
Fig.2 扇城跡周辺地形図……………	3	Fig.21 S B 13……………	40
Fig.3 周辺遺跡分布図……………	8	Fig.22 S B 14……………	41
Fig.4 調査対象地図……………	13	Fig.23 S A 1～8……………	43
Fig.5 扇城跡全体図……………	14	Fig.24 S K 1～6……………	44
Fig.6 扇城跡調査前地形測量図……………	15	Fig.25 S K 7～10……………	45
Fig.7 A区(1～3郭)グリッド・4郭 試掘トレンチ設定図……………	18	Fig.26 S X 1・2平面図……………	47
Fig.8 B区(6・7郭)グリッド設定図……………	19	Fig.27 S X 1・2断面図……………	48
Fig.9 1～3郭Fライン縦断セクション図……………	23	Fig.28 扇城跡縄張図……………	57
Fig.10 1～3郭、5・9・10・13・19 ライン横断セクション図……………	25	Fig.29 遺物種別出土帯図……………	58
Fig.11 3郭西斜面、6郭11・14ライン、 7郭Hライン、堀切1・2・4 セクション図……………	27	Fig.30 出土遺物1 土師質土器・青磁……………	69
Fig.12 1～3郭遺構配置図……………	30	Fig.31 ♪ 2 青磁……………	70
Fig.13 6・7郭遺構配置図……………	31	Fig.32 ♪ 3 青磁・白磁・染付・ 伊万里……………	71
Fig.14 S B 1……………	32	Fig.33 ♪ 4 瀬戸・備前……………	72
Fig.15 S B 2～4……………	33	Fig.34 ♪ 5 備前……………	73
Fig.16 S B 5……………	34	Fig.35 ♪ 6 備前……………	74
Fig.17 S B 6・7……………	35	Fig.36 ♪ 7 備前・東播系・土師質 土器・瓦質土器……………	75
Fig.18 S B 8～10……………	37	Fig.37 出土遺物8 土師質土器・羽口・ 土錘・刀子・火箸・鉄釘……………	76
Fig.19 S B 11……………	38	Fig.38 ♪ 9 石製品・礎石……………	77
		Fig.39 ♪ 10 渡来銭……………	78

## 表 目 次

Tab.1 周辺遺跡表……………	9
Tab.2 遺構配置表……………	55
Tab.3 掘立柱建物跡計測表……………	56
Tab.4 輸入陶磁器出土表……………	59
Tab.5 出土土器法量表1～6……………	61
Tab.6 出土金属製品・石製品計測表……………	67
Tab.7 出土渡来銭計測表……………	68

## 写真図版目次

PL. 1	扇城跡航空写真全景		A区3郭西斜面S X 3 セクション
PL. 2	〃    A区全景	PL.18	A区1郭東斜面S D 1
	〃    B区全景		〃    セクション
PL. 3	扇城跡遠景（南より）	PL.19	A区4郭完掘
	〃    近景（北西より）		A区完掘（6郭より）
PL. 4	A区近景（西より）	PL.20	A区堀切1東半部調査前
	A区伐開状況		〃    調査前（東より）
PL. 5	A区調査前全景（北より）	PL.21	〃    中央ベルト東面セクション
	A区堀切1（西より）		〃    西部完掘
PL. 6	A区試掘状況	PL.22	〃    中央部完掘
	A区2郭試掘トレンチ		〃    東部完掘
PL. 7	A区1郭南半部	PL.23	A区堀切2西半部完掘（下方より）
	A区2郭調査状況		〃    （上下より）
PL. 8	A区1・2郭遺構検出状態	PL.24	A区1～3郭遺物出土状態
	A区2・3郭遺構検出状態	PL.25	B区近景（西より）
PL. 9	A区2郭東西ベルト西側セクション		B区調査前全景（南より）
	〃    東側セクション	PL.26	B区伐開状況
PL.10	A区1郭完掘（北より）		B区調査前全景（南西より）
	A区1～3郭完掘（北より）	PL.27	B区6郭調査前（北より）
PL.11	A区3郭遺構検出状態		B区7郭調査前（西より）
	A区3郭東西ベルト西端セクション	PL.28	B区6郭遺検出状態
PL.12	A区完掘全景（南より）		〃    完掘（北より）
	A区3郭S B 9・10、S K 1	PL.29	〃    〃    （南より）
PL.13	〃    S B 7・8、S X 1・2		B区6郭北部ピット集中
	〃    S B 7、S X 1	PL.30	B区6郭南東部
PL.14	〃    S B 8、S X 2		〃    南北ベルトセクション
	〃    S X 1（10'ライン）セク ション	PL.31	〃    羽口出土状況
PL.15	〃    S K 1		B区7郭伐開後調査前（西より）
	〃    西斜面調査前（北より）	PL.32	〃    遺構検出状態
PL.16	〃    〃    （東より）		B区堀切5完掘（西より）
	〃    西斜面完掘	PL.33	B区堀切3完掘（南より）
PL.17	〃    西斜面S X 3		B区堀切3b完掘（北より）

- PL.34 B区堀切4・8郭  
B区堀切4調査前
- PL.35 ♪ 完掘(南より)  
♪ ♪ (西より)
- PL.36 B区6郭遺物出土状態
- PL.37 土師質土器・青磁1
- PL.38 青磁2
- PL.39 ♪ 3
- PL.40 ♪ 4
- PL.41 青磁5・白磁・伊万里
- PL.42 染付・瀬戸・備前1・伊万里
- PL.43 備前2
- PL.44 ♪ 3
- PL.45 ♪ 4・東播系・土師質土器・瓦質土器
- PL.46 土師質土器・羽口・土錘・刀子・火箸・鉄釘
- PL.47 呼子・飾金具・砥石・渡来銭

# I 調査に至る経緯と経過

## 1. 調査に至る経緯

扇城跡は中村市のやや西方、四万十川と中筋川の間にある高森山から派生した尾根の東南端部に続く、独立丘陵上に位置する中世城跡である。扇城跡の周辺は水田の広がる田園地帯であり、北方の谷にはトンボ公園も設置されており、多くの自然が残されている。しかしながら、開発の波は中村市にも押し寄せており、市街地に近いこともあって共同地区では近年各種の開発が押し進められている。昭和58年度には、扇城跡の南に位置する栗本城跡で、上水道貯水地造成に伴う調査が行われている。昭和60年度においても市道共同～楠島線改良工事が計画され、扇城跡及びナリカド城跡の北端裾部がカットされることとなった。この工事に対しては、現地確認をしたうえで扇城跡・ナリカド城跡ともにほとんど影響を受けないため、立会調査が行われた。また、これに並行して扇城跡の西側においては、民間資本による大規模な住宅団地の造成が行われており、扇城跡周辺の景観は大きく変化している。

平成2年度になると、先の住宅団地拡張の計画が持ち上がった。この造成工事計画は、扇城跡全体を削平することにより東へ宅地を広げようとするものであり、事業主である(株)日本総合物

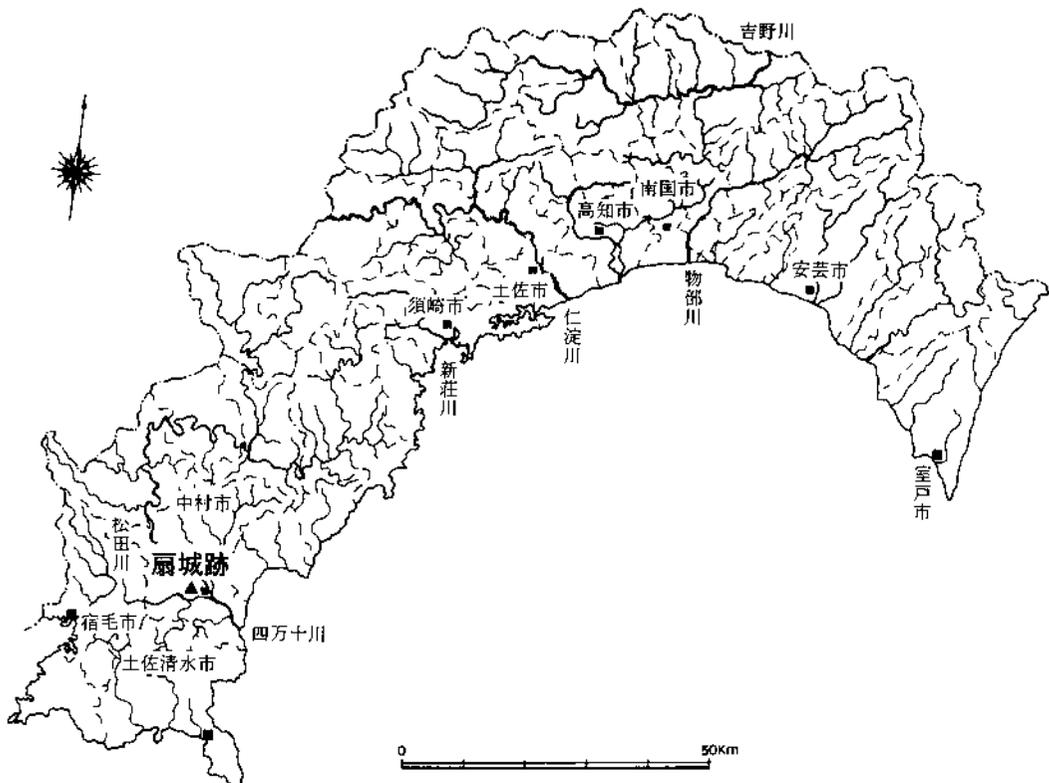


Fig. 1 扇城跡位置図

産から中村市教育委員会を通じて県教育委員会にも遺跡の所在に関しての照会がもたらされた。これを受けた中村市教育委員会及び県教育委員会では、中世城跡である扇城跡の所在を示し、現状保存のための協議を行ったが、城跡の大半が造成計画地内に含まれることから計画変更による保存は不可能であり、止むを得ず記録保存を行うこととなった。このため平成2年9月19日付けで発掘届も提出され、造成計画範囲等を確認するために現地の踏査、立会を行った。この結果、曲輪、堀切等の遺存状態は良好であることが判明し、調査対象地は尾根上の曲輪から斜面部にかけての全面となった。

以上の協議の結果、県教育委員会の指導により、発掘調査は財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが調査主体となり、事業主である㈱日本総合物産からの委託を受けて、平成3年度に実施することとなった。

## 2. 調査の経過

発掘調査は、平成3年5月から10月までの間約6ヶ月の現地調査を行った後、引続き平成4年3月まで整理作業及び報告書刊行の予定で開始された。発掘調査における勸高知県文化財団埋蔵文化財センターの調査体制は次のとおりであった。

総括一埋蔵文化財センター所長 小橋一民

調査事務総括一同事業課長 山崎 浩 調査事務一同主事 三浦康寛

調査担当一同調査第2係長 森田尚宏 同調査補助員一吉成承三

現場作業員 植恵・伊与田茂一・岡村章・田所儀三郎・布泰平・松岡剛・小笠原由夫・江口  
 覚・宮地照夫・下川徹郎・岡本正・山本和・山崎玉子・北原知得子・多和春喜  
 ・福谷満子・両橋安野・加持キワノ・田所洋子・山下皐月・小笠原かねい・植  
 伊吹・安宗幸子・福本澄子・土居澄子・土居繁野・宮崎身代恵・宮崎幸・山下  
 初美・中平百合香・森繁子・松本菊美・福谷弘幸（重機オペレーター）

整理作業員 山中美代子・白木由里・西内宏美・宮地佐枝・小松経子

なお整理作業については、大原喜子・浜田雅代・松木富子・山本裕美子・矢野雅・吉本睦子・宮本幸子等の協力を得た。

発掘調査は、平成3年5月9日から機材の搬入、設営を行い、5月14日には調査が開始された。以後、酷暑の間を通じて調査は進められたが、梅雨、秋雨、台風等の影響もあり、最終的に調査を完了し、現地を徹収したのは10月16日であった。調査は事前に業者により伐採が終了していたA区（南部）から着手し、伐採が終り次第B区（北部）へと進められた。広範囲であること、さらに多数の柱穴等の遺構も検出されたこともあり、遺構を含む全体測量は航空測量（アジア航測に委託）を行った。

現地調査後の整理作業及び報告書作成は、高知県立埋蔵文化財センターの施設において行われ平成4年3月31日をもってすべての作業を終了した。

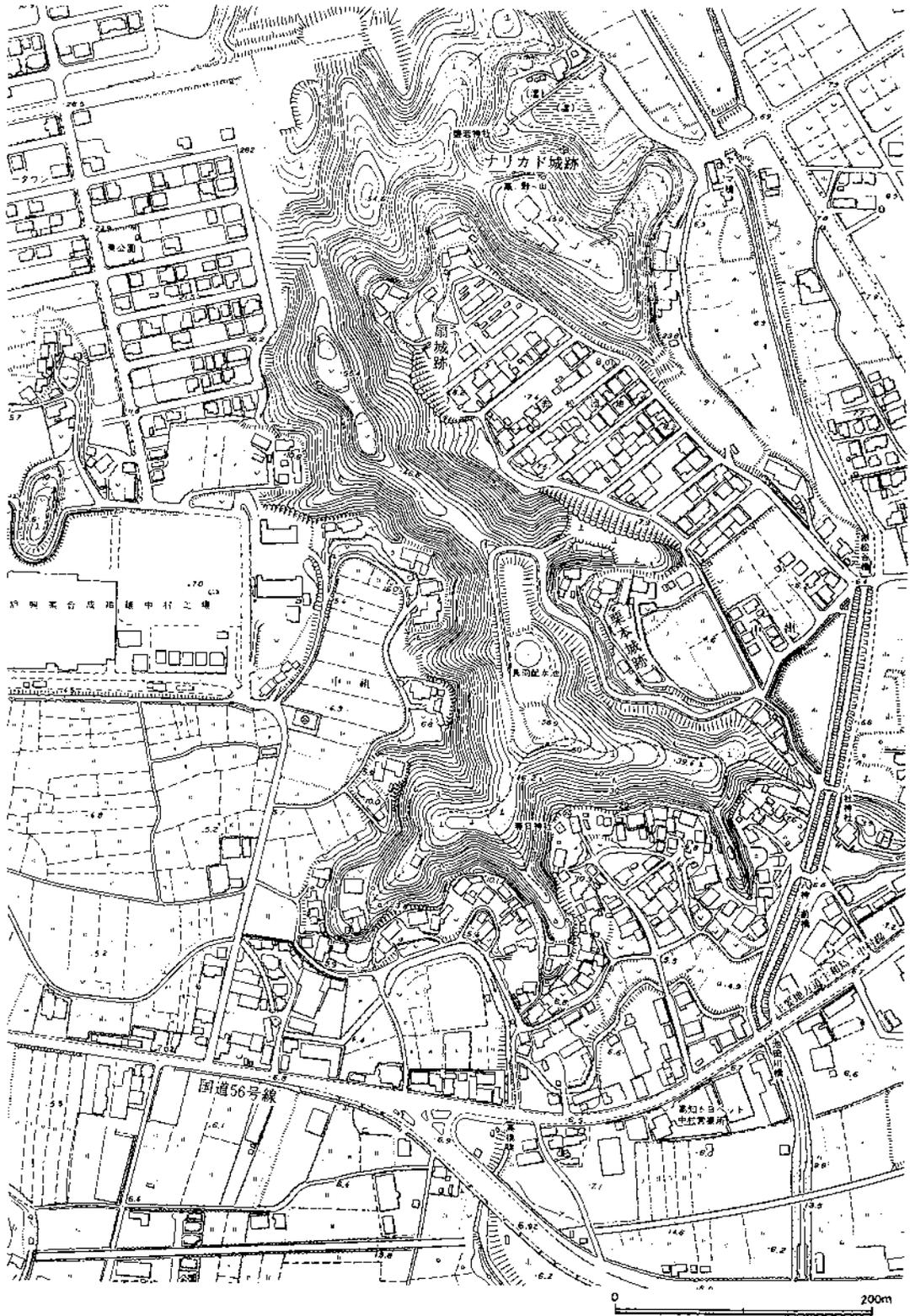


Fig. 2 扇城跡周辺地形図

### 3. 調査日誌抄

5月9日(木)

機材搬入等現地設営を行う。

5月10日(金)

扇城跡現地確認のうえ(株)日本総合物産と打合せを行う。

5月13日(月)

測量基準点の確認を行い、調査準備。

5月14日(火)

本日から作業員により調査開始。A区より伐開、草刈りを行う。

5月16日(木)

昨日は雨で中止するが本日はA区の伐開を続ける。A区全体の略測を行う。

5月17日(金)～24日(金)

20日(月)は雨にて作業を中止。他日は作業を行い伐開、草刈りを終了する。

また、A区のトラバース測量を行い、これを基準に地形測量 ( $S = \frac{1}{100}$ ) を開始する。

5月27日(月)

伐開後の調査前状況の写真撮影後、1～3郭にグリッドを設定。3郭から試掘を開始する。

5月28日(火)

1・2郭も試掘を行う。3郭では岩盤上にピット、土坑を検出し、青磁、備前が出土する。1・2郭でもピットが検出される。

5月29日(水)～31日(金)

雨にて作業は中止するが、地形測量にコンターを入れA区を終了する。

6月3日(月)～5日(水)

1郭の南半部である残地部分の調査を行う。岩盤上にピットを検出。ピット内からは青磁、備前、スラグ等が出土する。

6月6日(木)

1郭南半残地部分の遺構測量を終了し、1

・2郭の表土剥ぎにかかる。

6月7日(金)

引き続き1・2郭の表土剥ぎを行う。

6月10日(月)

雨にて作業中止。調査事務所にて図面等整理。

6月11日(火)

表土剥ぎを進める。2郭の中央部で岩盤が切られており、堆積層厚く堀切か。

6月12日(木)

1郭は表土剥ぎを終り遺構の精査。2郭の岩盤の切れた部分は地表下80cmで岩盤を確認。自然地形とみられる。

6月13日(木)

1郭はピットを掘り込むが遺物はほとんど出土しない。2郭は遺構精査を行い、皇栄通寶が出土する。

6月14日(金)

1郭は土層図を作成し、ベルトを除く。2郭はピットの掘り込みを行い、3郭は表土剥ぎを開始する。

6月17日(月)～21日(金)

17・19・20日は雨天にて作業中止。18・21日は3郭の表土剥ぎ、2郭の土層図を作成する。3郭西半部の遺構検出を行うが遺構は少ない。



写真1 A区伐開状況



写真2 A区調査状況

6月24日(月)

雨天にて作業中止。雨天多く作業は遅れ気味である。

6月25日(火)

2郭のベルトを除き終了する。3郭も表土剥ぎを終了し全体の遺構精査、ピットの掘り込みにかかる。

6月26日(水)

3郭の精査を行い、C3区では青磁底部が出土する。

6月27日(木)

1郭の東斜面下方の小平場にトレンチを設定。岩盤のカット面を確認。

6月28日(金)

東斜面下の小平場は溝端部であることが判明。埋土中からは備前が出土する。調査外へ延びる小曲輪のようである。

7月1・2日(月・火)

天候不順にて午前中のみ作業を行う。1郭東斜面下のSD1を精査する。3郭は南小段部を掘り下げる。

7月3日(水)

SD1は終了。3郭の南西部及び南小段部では岩盤が出ないのでサブトレを設定し下げる。青磁、備前、スラグが出土する。

7月4日(木)

1～3郭の側端部を確認のため下げる。また3郭西斜面下方の緩斜面部の地形測量を追加する。

7月5日(金)

雨にて作業中止。

7月8日(月)

本日より作業員を分けB区の伐開、草刈りにも着手する。

7月9日(火)～12日(金)

B区の伐開、草刈りを行い終了し、トラバース測量を行う。3郭は南西部と南小段部をさらに掘り下げる。

7月15日(月)～19日(金)

B区の地形測量を開始する。3郭南西部から南小段部は岩盤カット面が確認され、盛土により構築されている。盛土中下部には炭化物層が認められ、スラグが出土する。

7月22・23日(月・火)

3郭南西部～南小段部は岩盤まで掘り下げ完了。2段になっており、下段は2郭と同レベルである。床面にピットを検出する。

7月24日(水)～26日(金)

4郭にトレンチを設定、着手するが遺構、遺物はみられず、削平されていると考えられる。また、堀切1、3郭西斜面の調査に着手する。

7月29日(月)

台風9号の影響にて作業中止。

7月30・31日(火・水)

堀切1から西斜面にかけて通路状遺構を検出。堀切1は西半部を終了する。2・3郭のベルトを除く。2郭のベルト中から青銅製の呼子出土する。

8月1・2日(木・金)

堀切1の東半部を終了する。3郭西斜面はさらに拡張し、備前等が出土する。

8月5日(月)～9日(金)

5日は雨にて作業中止。2・3郭は完掘状態の写真撮影を終え完了する。3郭西斜面はほぼ掘り終えるが遺構は検出されなかった。通路状遺構は途中で終り、溝状遺構となり斜面を下っている。

8月12・13日(月・火)

堀切2の調査に着手する。

8月14日(水)～16日(金)

お盆にて作業中止。

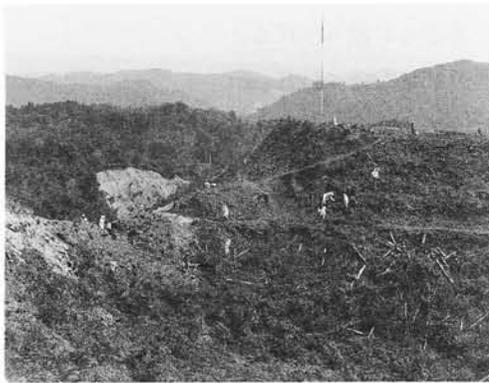


写真3 B区伐開状況

8月19・20日(月・火)

B区の調査に着手する。7郭にグリッドを設定し掘り始めるが、表土下は地山である。

8月21日(水)～23日(金)

台風12号の影響にて作業中止。

8月26・27日(月・火)

堀切2、7郭の作業を進める。7郭の東端部土塁上の地形は地山の削り出しである。

8月28日(水)～30日(金)

台風13号の影響にて作業中止。

9月2日(月)

7郭は終了し、堀切4に着手する。6郭は抜根を行う。

9月3日(火)

堀切4は中央部がやや高く、土橋状になる。

埋土中より瀬戸梅瓶口縁、底部が出土する。

9月4日(水)～6日(金)

4・6日は雨にて作業中止。6郭に試掘トレンチを設定し調査開始。

9月9日(月)

堀切2を終了し堀切3に着手する。6郭では岩盤にピットが検出され、青磁、砥石等が出土する。

9月10日(火)～13日(金)

6郭の全面表土剥ぎを行い、遺構検出に努める。堀切3は浅く、表土下に岩盤が出ている。

9月17日(火)～20日(金)

6郭の遺構を掘り込み、精査を行う。

9月24日(月)

6郭のベルトを除き、遺構の掘り込みを行う。

9月25日(火)

午前中、記者発表を行い、午後航空測量のため清掃。

9月26・27日(木・金)

引き続き全体清掃と6郭の精査を行う。27日は台風19号のため作業中止。

9月28日(土)

現地説明会を行い、多数の参加を得る。

9月30日(月)・10月1日(火)

6郭南東部、盛土部分を掘り込む。

10月2日(水)

午前中清掃を行い、午後航空測量を実施する。

10月3・4日(木・金)

6郭東南部を下げる。北部の墓地改葬が終り調査を行う。

10月7日(月)～9日(木)

7日は雨にて中止。6郭北部ではピットを検出し、東播系鉢が出土する。現地機材の一部徹収を行う。

10月15・16日(火・水)

機材等の徹収を終え、現地調査を完了する。

## II 遺跡の位置と環境

### 1. 遺跡の位置

扇城跡は中村市共同字ミノコシ8588-1他の丘陵上に立地する。この丘陵は四万十川と中筋川の間にある高森山（標高336m）から東方へと派生する尾根の東南端部に位置する半独立丘陵であり、標高50～55mを測る尾根が東南方向に開く逆U字形を呈している。

高森山を含む一帯は地質的にみれば、中央構造線の南、西南日本外帯の四万十帯に属し、さらに詳しくみるならば四万十帯北帯の大正層群である。城跡の立地する丘陵は大正層群中の有岡層であり、砂質頁岩を中心とする混在岩層とされており、四万十川を挟み対岸に位置する中村城跡も同様の地質構造をもっている。

地形的には、四万十川と中筋川の元合流地点（現在では四万十川から中筋川への逆流を防ぐために下流約3.5kmまで堤防により分離されている。）の西側に位置し、宿毛市方面へ延びる中筋平野を四万十川の手前で遮るように南へと突出している。城跡周辺の水田は標高7m前後と低く、中筋川の高低差がきわめて小さいことから、堤防が完成するまでは小規模な出水によっても水没する湿田であり、当時の景観としては城跡の周囲は湿地帯であったと考えられ、自然の要害をなしていたものと思われる。扇城跡の頂部からは西方の宿毛市方面へ延びる中筋平野、東から南にかけては中村城跡から中村市街地、さらに四万十川の河口方面へと眺望が開けており、城跡の立地としては良好である。城跡の斜面はかなり急峻であり、特に東斜面の谷奥は急傾斜面を呈している。山裾は小谷により切られており、凹凸となり、斜面の一部には杉の植林がなされている。他は雑木林であるが、南部の尾根上の曲輪上は畑地として使用されていた。

逆U字状形の丘陵中央部には当城跡が位置しており、南へ延びる尾根の南端部の標高58mを測る頂部を中心として栗本城跡が所在する。西へ延びる尾根上にはナリカド城跡が立地しており、丘陵の尾根上に栗本城跡、扇城跡、ナリカド城跡が連なっている。

### 2. 歴史的環境

扇城跡の存在を直接物語る資料は現在のところ皆無であり、長宗我部地検帳にわずかに記載がみられるのみである。扇城跡を取り巻く中世の状況については後述するとして、四万十川流域における遺跡の変遷を概観してみたい。

四万十川は総延長196kmを測る高知県第一の河川であり、幡多地域に多くの自然の恵みをもたらしている。原流は四国山地の不入山（1,336m）に発し、西南四国を流域としながら梶原川等の支流を集め、中村市下田で太平洋へと注いでいる。流域には平野部が少なく、窪川町の窪川盆地を除けば狭隘な河岸段丘が続いており、中村市街地付近において後川、中筋川へと合流し、中村平野を形成している。

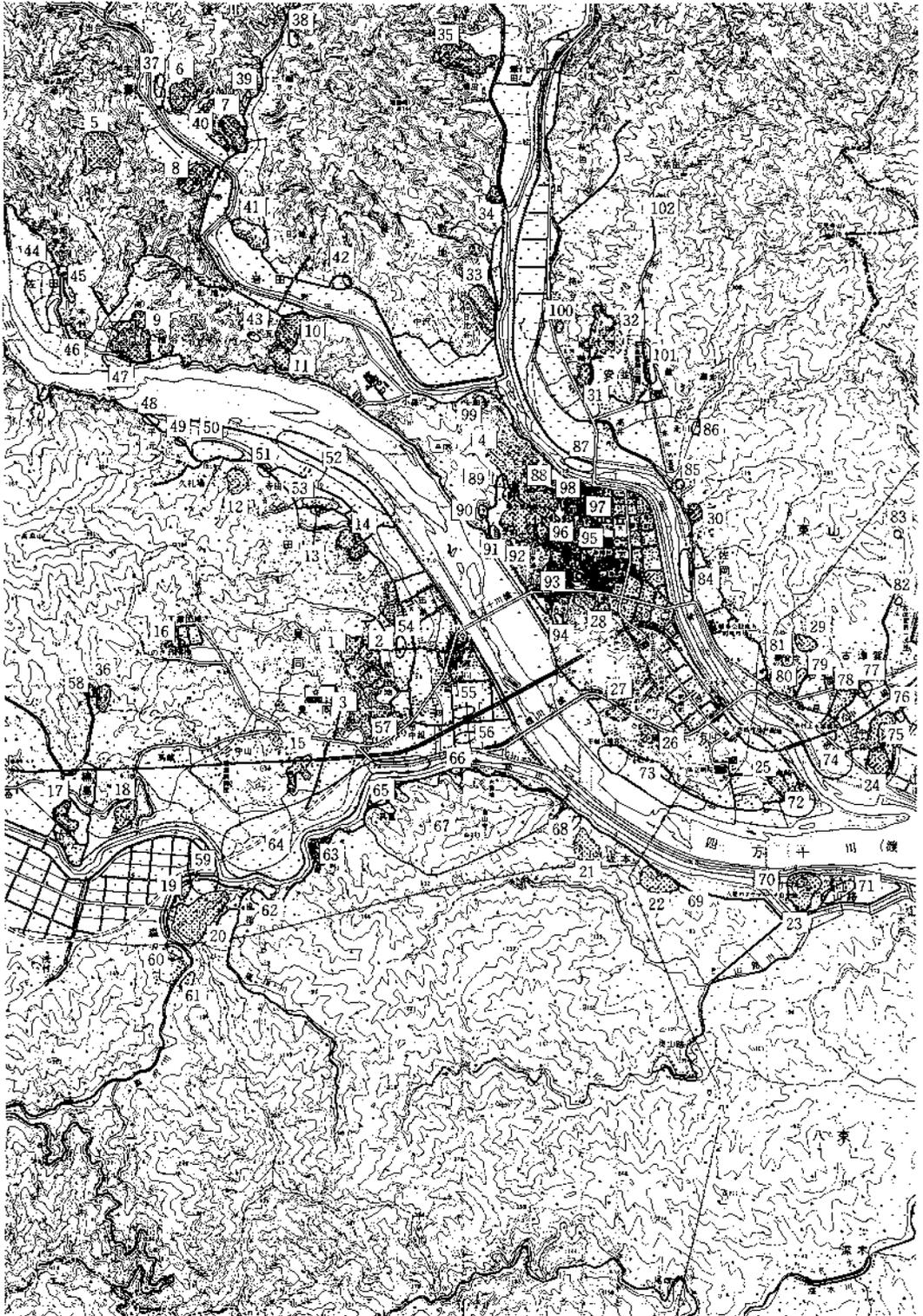


Fig. 3 周辺遺跡分布図

四万十川流域における最古の遺跡は、ナイフ形石器を出土した上流域の椿原町影野地遺跡と河口付近の海岸段丘上の中村市双海遺跡であり、他に宿毛市宇須々木遺跡<sup>(注1)</sup>の存在が知られている。縄文時代では、草創期の豆粒文土器、尖頭器を出土した十和村十川駄場崎遺跡<sup>(注2)</sup>をはじめとし、上中流域に早～前期の遺跡の所在が知られている。中期の遺跡はほとんど確認されていないが後期になると四万十川全域にわたり遺跡が増加する。中村市近辺では市街地の上流約5 kmの地点に三里遺跡<sup>(注3)</sup>が所在しており、後期後半の緑帯文系の三里式が設定されている。市街地周辺には4ヶ所の縄文遺跡が確認されているが調査は行われておらず詳細は不明である。晩期の遺跡としては市街地内に著名な中村貝塚<sup>(注4)</sup>(Fig 3-93)の存在が知られている。中村貝塚は昭和

地図No	遺跡名	種別	時代	備考	地図No	遺跡名	種別	時代	備考
1	扇城跡	城跡	中世		52	入田遺跡	散布地	弥生	
2	ナカリ下城跡	〃	〃		53	秋トシ遺跡	〃	弥生・中世	
3	柴本城跡	〃	〃	消滅	54	国黒遺跡	〃	中世	
4	中村(丸松)城跡	〃	〃	市史跡	55	五反田遺跡	〃	〃	
5	猪石城跡	〃	〃		56	永田遺跡	〃	〃	
6	若藤城跡	〃	〃		57	西和田遺跡	〃	弥生	
7	後岡城跡	〃	〃		58	小才門遺跡	〃	中世	
8	井枝城跡	〃	〃		59	船戸遺跡	祭祀遺跡	古墳	
9	佐田城跡	〃	〃		60	コノヤバタ遺跡	散布地	平安・中世	
10	川原城跡	〃	〃		61	ミキノエ遺跡	〃	〃	
11	川原ハチカ森古城跡	〃	〃		62	風指遺跡	集落跡	弥生・平安・中世	
12	本井城跡	〃	〃		63	アゾノ遺跡	〃	中世	ほとんど消滅
13	秋トシ城跡	〃	〃		64	共同中山遺跡群	祭祀遺跡	弥生・中世	古墳時代が中心
14	長崎城跡	〃	〃		65	具重遺跡	祭祀遺跡	古墳	ほとんど消滅
15	近沢城跡	〃	〃		66	具重下遺跡	散布地	中世	
16	相ノ沢城跡	〃	〃	消滅	67	香山寺跡	社寺跡	中世・近世	
17	桶島城跡	〃	〃		68	坂本遺跡	散布地	中世	
18	桶島西城跡	〃	〃		69	馬場谷遺跡	〃	縄文・中世	
19	森沢北ノ城跡	〃	〃		70	山路遺跡	祭祀遺跡	弥生	
20	森沢城跡	〃	〃		71	宮我ノ前遺跡	散布地	中世	
21	皇子山城跡	〃	〃	消滅	72	角崎遺跡	〃	古墳・中世	
22	サシガミネ城跡	〃	〃		73	不破遺跡	散布地	中世	
23	山路城跡	〃	〃		74	古津賀遺跡群	祭祀遺跡	古墳～中世	古墳時代が中心
24	宮田城跡	〃	〃		75	アミダ堂遺跡	散布地	中世	
25	葛城々跡	〃	〃		76	オカノハナ遺跡	〃	〃	
26	道ノ谷城跡	〃	〃	消滅	77	オシケバ遺跡	〃	古墳	
27	不破城跡	〃	〃	〃	78	古津賀古墳	古墳	〃	県史跡
28	羽生古城跡	〃	〃	〃	79	星野神社遺跡	散布地	中世	
29	観音寺城跡	〃	〃		80	古津賀サコヤシキ遺跡	〃	〃	
30	佐岡城跡	〃	〃		81	観音寺遺跡	〃	縄文	
31	安並城跡	〃	〃		82	ササ山遺跡	〃	中世	
32	ソメ岡城跡	〃	〃	消滅	83	古津賀岡田屋敷遺跡	〃	〃	
33	岡城跡	〃	〃		84	佐岡遺跡	〃	弥生・古墳	
34	式地城跡	〃	〃		85	佐岡製鉄所跡	製鉄所跡	近世	市史跡
35	田ノ川城跡	〃	〃		86	走川端遺跡	散布地	弥生	
36	小才田城跡	〃	〃		87	後川橋西遺跡	〃	〃	
37	駄場屋敷遺跡	散布地	縄文・中世		88	一条房基墓	墓	中世	
38	小畑遺跡	〃	中世		89	古城山遺跡	散布地	弥生・奈良・平安	
39	瀬々谷遺跡	〃	平安・中世		90	吹越山遺跡	〃	弥生	
40	東海遺跡	〃	〃		91	百笑遺跡	〃	平安・中世	
41	岩田遺跡	〃	〃		92	久山遺跡	〃	弥生	
42	下馬遺跡	〃	中世		93	中村貝塚	貝塚	縄文	
43	針力森遺跡	〃	弥生		94	岩崎山遺跡	散布地	弥生	
44	池本遺跡	〃	弥生・奈良・中世		95	中村御所跡	御所跡	近世	市史跡
45	佐田遺跡	〃	弥生		96	一条教房墓	墓	中世	県史跡
46	佐田本村遺跡	〃	中世		97	玉鑑の墓	〃	〃	市史跡
47	溝口遺跡	〃	弥生・中世		98	中村奉行所跡	奉行所跡	近世	
48	平元遺跡	〃	中世		99	山内忠直の墓	墓	近世	市史跡
49	白近遺跡	〃	縄文・中世		100	カキ谷遺跡	散布地	弥生・中世	
50	源地遺跡	〃	弥生・中世		101	八宗田遺跡	〃	弥生・古墳	
51	今井遺跡	〃	中世		102	安並クリヤシキ遺跡	〃	中世	

Tab. 1 周辺遺跡表

44年に幡多事務所新築工事中に発見されており、地表下約5 mに貝層が確認された。貝層はヤマトシジミ（上層）、マガキ・ハマグリ（下層）であり、土器、石器、骨角器、獣骨等が出土している。また、貝層下の粘土層中からは稲花粉が検出されており、注目される。土器は出土貝層の上下及び突帯の刻目の有無等により中村Ⅰ・Ⅱ式として設定され、晩期後半末に位置付けられている。

弥生時代では13ヶ所（Fig. 3）の遺跡が確認されているが、前期の遺跡として著名なのは入田遺跡（Fig. 3-52）である。<sup>(注9)</sup> 入田遺跡は四万十川の西岸、自然堤防上に立地すると考えられ、現況では堤防内の河川敷である。出土土器は縄文系突帯文の入田B式と弥生土器である入田式が相伴しており、高知県における弥生文化生成を知る上で重要な資料となっている。中期から後期になると遺跡は拡散しており、共同中山遺跡群（Fig. 3-64）、<sup>(注7)</sup> 山路遺跡（Fig. 3-70）からは銅鐻の出土が知られている。<sup>(注8)</sup>

古墳時代の遺跡としては共同中山遺跡群と古津賀遺跡（Fig. 3-64・74）が注目される。<sup>(注9)</sup> 両遺跡ともに中筋川と後川の河川敷に立地する祭祀遺跡であり、多量の土師器、須恵器とともに手づくね土器、土製鏡等の祭祀遺物がブロックとなり出土している。時期的には共同中山遺跡群が4世紀から5世紀を通じ6世紀前半まで、古津賀遺跡は5世紀末から6世紀にかけてであり、共同中山遺跡群が先行する。このような祭祀遺跡の存在は、祭祀を行った集団（集落）の存在とこれを統括する政治的勢力（首長）を裏付けるものであり、周辺部に大規模な集落跡が想定される。首長墓としての古墳は中村市周辺には未発見であるが、中筋川の上流部、宿毛市平田には前方後円墳である曾我山古墳、<sup>(注10)</sup> 2基の円墳からなる高岡山古墳群<sup>(注11)</sup>が存在しており、幡多地域における政治的発展を示している。また、後期古墳としては横穴式石室をもつ古津賀古墳（Fig. 3-78）、竹島土居山古墳等が知られている。

古代になると確認されている遺跡は少なくなる。発掘調査が実施された遺跡としては共同中山遺跡群とその対岸に位置する風指・アゾノの両遺跡（Fig. 3-62・63）<sup>(注12)</sup>をあげることができる。いずれの遺跡においても出土遺物は9世紀以降、10・11世紀を中心としており、7～8世紀の律令期は現在のところ空白である。風指遺跡では7点の緑釉陶器が出土しており、遺跡の立地、出土状況からみて官制の祭祀との関連性が指摘されており、古代末の幡多における一様相を知ることができる。共同中山遺跡群、アゾノ遺跡では12～14世紀の集落跡、墓跡群が検出され、古代末から中世への変化がみられる。また、アゾノ遺跡では地震跡の噴砂が検出されており、南海地震との関連が注目されている。

中世の遺跡では先に述べた共同中山遺跡群、アゾノ遺跡の他、注目されるものとして香山寺跡に関係すると考えられる川平山中世墓群が調査されている。<sup>(注13)</sup> 香山寺跡は中筋川の南岸、共同中山遺跡群の対岸であり、中世墓群からは14～15世紀の備前壺の蔵骨器が出土している。また、共同中山遺跡群では集石墓、土壙墓が検出されており、土壙墓からは13世紀の青磁碗が数点副葬品として出土し、集石墓では14世紀と考えられる常滑大甕が出土している。中筋川流域における集落と墓域・墓制の関係とその変遷を知る上で重要な資料であろう。

戦国時代では、中村城跡をはじめとして栗本城跡、塩塚城跡、チシ古城跡等の発掘調査が行

われている。中村城跡は、中村市街地の北西に接して立地しており、土佐・条氏から長宗我部氏、山内氏の各時期に使用されている。屋根上には「東城」「為松城」「中ノ森」「御城」「今城」と長宗我部地検帳に記載される曲輪が存在し、昭和58年度に「御城」を中心とする曲輪の調査が行われている。調査の結果、詰では基壇状遺構とこれに伴う石垣、堀切等の遺構が検出されており、瓦類も多く出土している。时期的には16世紀後半が中心であり、長宗我部時代の遺構と考えられる。栗本城跡は、土佐を追われた一条兼定が、再起をかけて長宗我部氏と対峙した天正3年（1575）の渡川合戦時に陣を張ったとされる城跡であり、昭和58・59年度に調査が行われている。調査の結果、多数の柱穴、溝等が検出され、輸入陶磁器、国産陶器、土師質土器が出土しており、15世紀後半～16世紀後半の時期とされている。塩塚城跡は四万十川をやや遡った川登に位置する城跡であり、やはり柱穴が検出されている。遺物も青磁を中心とする輸入陶磁器、備前等が出土しており、15～16世紀前半に位置付けられる。県下の発掘調査が行われた城跡をみれば、15～16世紀にかけてのいわゆる戦国時代に存続したと考えられる城跡と、それ以後長宗我部氏の勢力が土佐一門を支配した16世紀後半まで継続した城跡の2時期が存在しており、土佐における中世末期の状況をみることができる。

- 註1 山口将三 「高知県における旧石器文化」『旧石器考古学』43号 川石器談話会 1990
- 註2 山本哲也・岡本桂典 『十川駄場崎遺跡発掘調査報告書』 十和村埋蔵文化財調査報告書第3集 十和村教育委員会 1989
- 註3 木村剛朗 「四万十川流域の縄文遺跡研究」 幡多埋文研 1987
- 註4 岡本健児 「三里遺跡」 中村市教育委員会 1967
- 註5 『中村市史』 中村市 1969
- 註6 『高知県史』考古編 高知県 1958
- 註7 出原恵三・松田直則・廣田佳久 「後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ」 共同中山遺跡群・古津賀遺跡 高知県教育委員会 1988
- 註8 註5に同じ
- 註9 註7に同じ
- 註10 註6に同じ
- 註11 山本哲也 『高岡山古墳群発掘調査報告書』 高知県教育委員会 1985
- 註12 出原恵三・松田直則 「後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ」 風指遺跡・アズノ遺跡 高知県教育委員会 1988
- 註13 林道工事立会調査により確認された遺跡であり、五輪塔等も出土している。
- 註14 松田直則他 「中村城跡」 中村市教育委員会 1983
- 註15 木村剛朗 『栗本城跡』 ♪ 1984
- 註16 山本哲也 『塩塚城跡』 ♪ 1987

### Ⅲ 調査の概要

#### 1. 城跡の概要

扇城跡は標高55m前後を測る尾根上に立地しており、南へ延びる尾根上には栗本城跡、西へ延びる尾根上にはナリカド城跡が存在する。全体的な地形と城跡の配置をみれば、南東に開く谷を囲むようなU字形の尾根上に栗本・扇・ナリカドの3城跡が連なっており、扇城跡はその名称のごとく扇の要に位置している。

調査前の状況をみれば、南部（A区）と北部（B区）の2ヶ所に頂部が存在しており、城跡の中心となる詰（3郭・6郭）と考えられる。A区は、3郭を詰として南へ延びる尾根上に1・2郭が直線上に連続し、北には2本の堀切により各々隔てられた4郭・5郭が続いている。B区は、2本の堀切によりA区と分離する6郭を中心として、東のナリカド城跡へと続く尾根上に7郭、北へ延びる尾根が堀切により隔され、8郭となっている。なお、5郭及び8郭は堀切により他の曲輪と隔絶しているが自然地形と考えられ、平坦面等は存在しない。

A区の1郭は、南北方向に長軸を取る不整形の曲輪であり、南北長25m、東西最大幅8～9mを測る。標高は54.5mであり、北へ続く2郭との比高差は0.8m前後を測る。なお、調査対象範囲は1郭の北半部であり、南半部は調査区外である。2郭は、1郭と3郭の間の鞍部であり、南北長25m、東西幅5～8mを測り、最低部の標高は53.6mである。2郭と3郭の間には8.5×2.5mの小段部が存在しており、2郭との比高差0.7m、3郭との比高差は0.6mを測る。3郭は半円形状を呈しており、東辺長33m、中央部最大幅20mを測る。北端部から東辺一部にかけて土塁状の地形がみられ、平坦面との比高差は1.2mと高く、断面からみれば地山の削り出しである。平坦部の標高は約54.5～55.8m、北端部では56.3mを測る。3郭の西斜面の北半部には標高47m前後に非常に緩やかな斜面がみられ、曲輪の一部ではないかと考えられた。また、東斜面にも一部帯状の緩斜面が標高50mラインに存在する。

3郭の北面はきわめて急峻な斜面をなしており、堀切1を形造っている。堀切1は中央部で幅14mを測り、東端部は標高40mラインまで延び、幅5～6mで終る。西斜面では標高45mラインで山道に続き終っている。3郭との比高差は約7m、4郭との比高差は約2.5mを測り、扇城跡では最大の堀切である。

4郭は南北長34m、南端幅15m、北端幅7mを測る不整形であり、標高50m前後を測る。西辺寄りには地山削り出しの土塁状地形がみられ、西側は緩斜面となっている。東辺側には約1.5m下部に3×28mの帯状平坦面が存在する。4郭の平坦面には杉の植林がなされており、土塁状地形及び東辺下部の平坦面は植林によるものと考えられた。

4郭と5郭の間には堀切2が存在する。中央部は埋められ通路となっているが、堀切の幅は約3.5mとみられ、東端部は標高約42m、西端部は標高約45m付近まで掘り切られている。

5郭は標高約54mの小頂部であり、平坦面等はみられず自然地形である。5郭から尾根は方

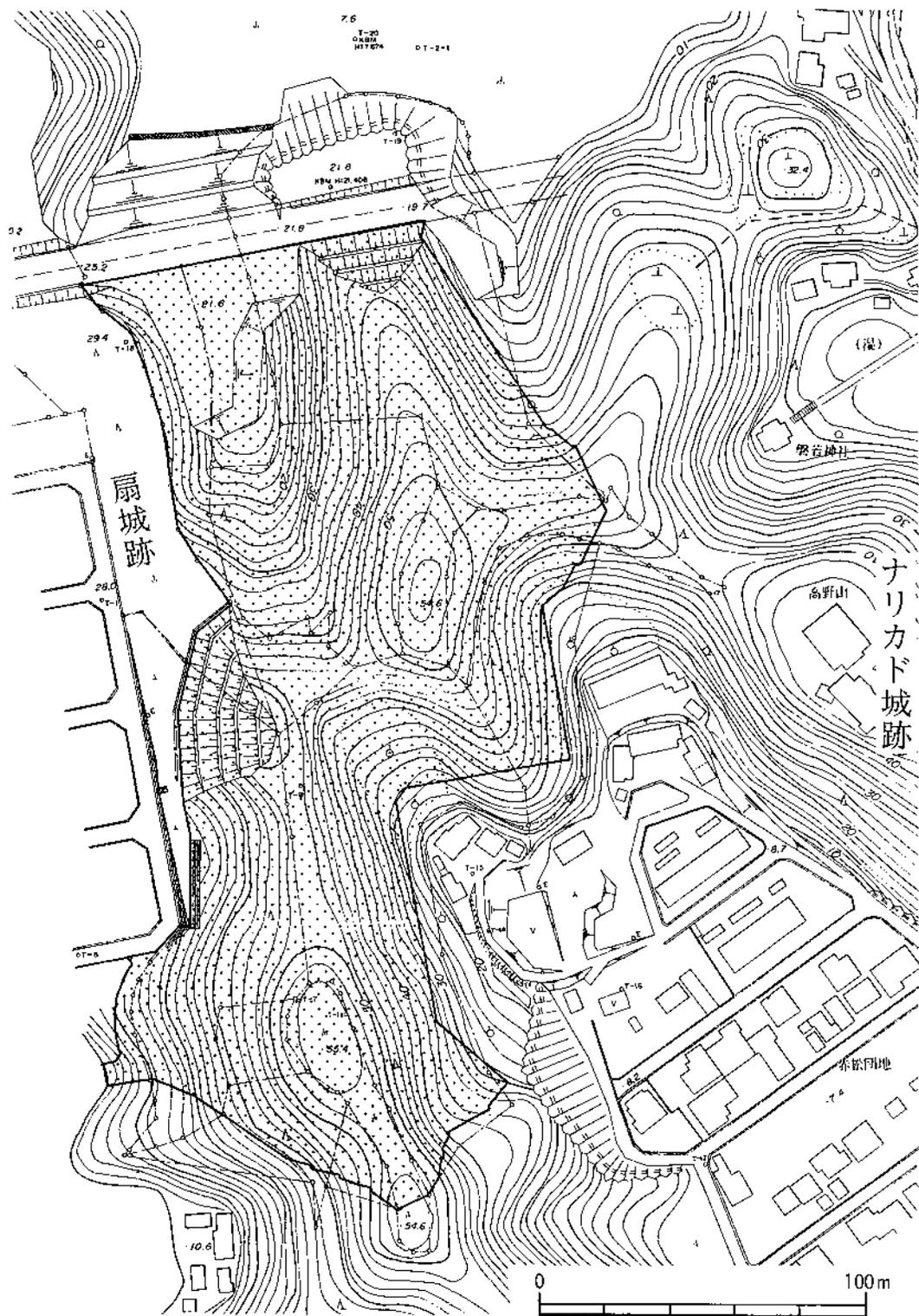


Fig. 4 調査対象地図

向を東へ振り、鞍部を隔て6郭へと続いている。また、西へと延びる尾根が存在していたが、すでに造成により削平されている。

堀切3は5郭と6郭の間の鞍部に堀られた2本の堀切であり、鞍部の標高は約45mと最も低くなっている。堀切3aは一部山道になっており、西斜面側はかなり破壊されているが幅約2m、

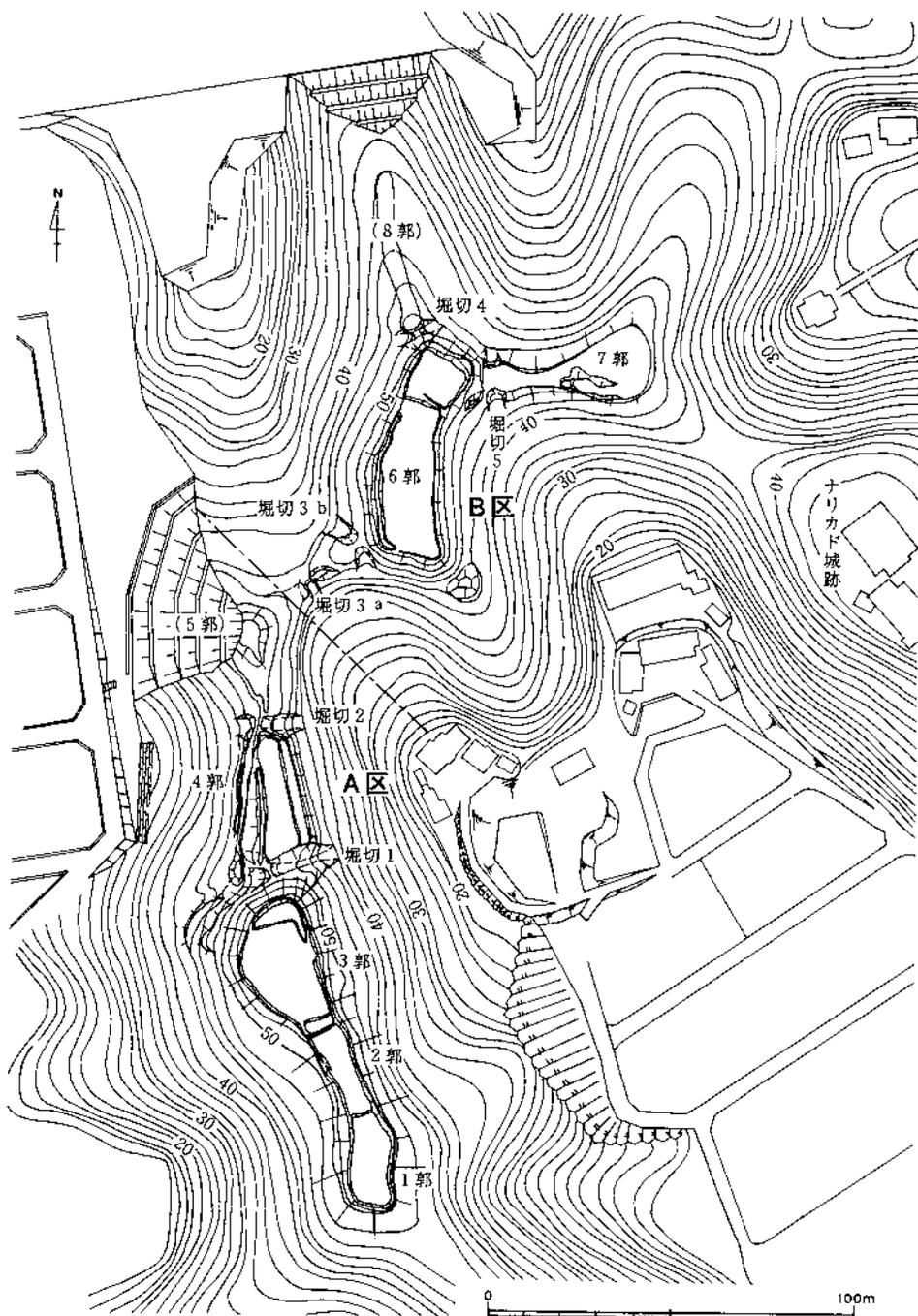


Fig. 5 扇城跡全体図

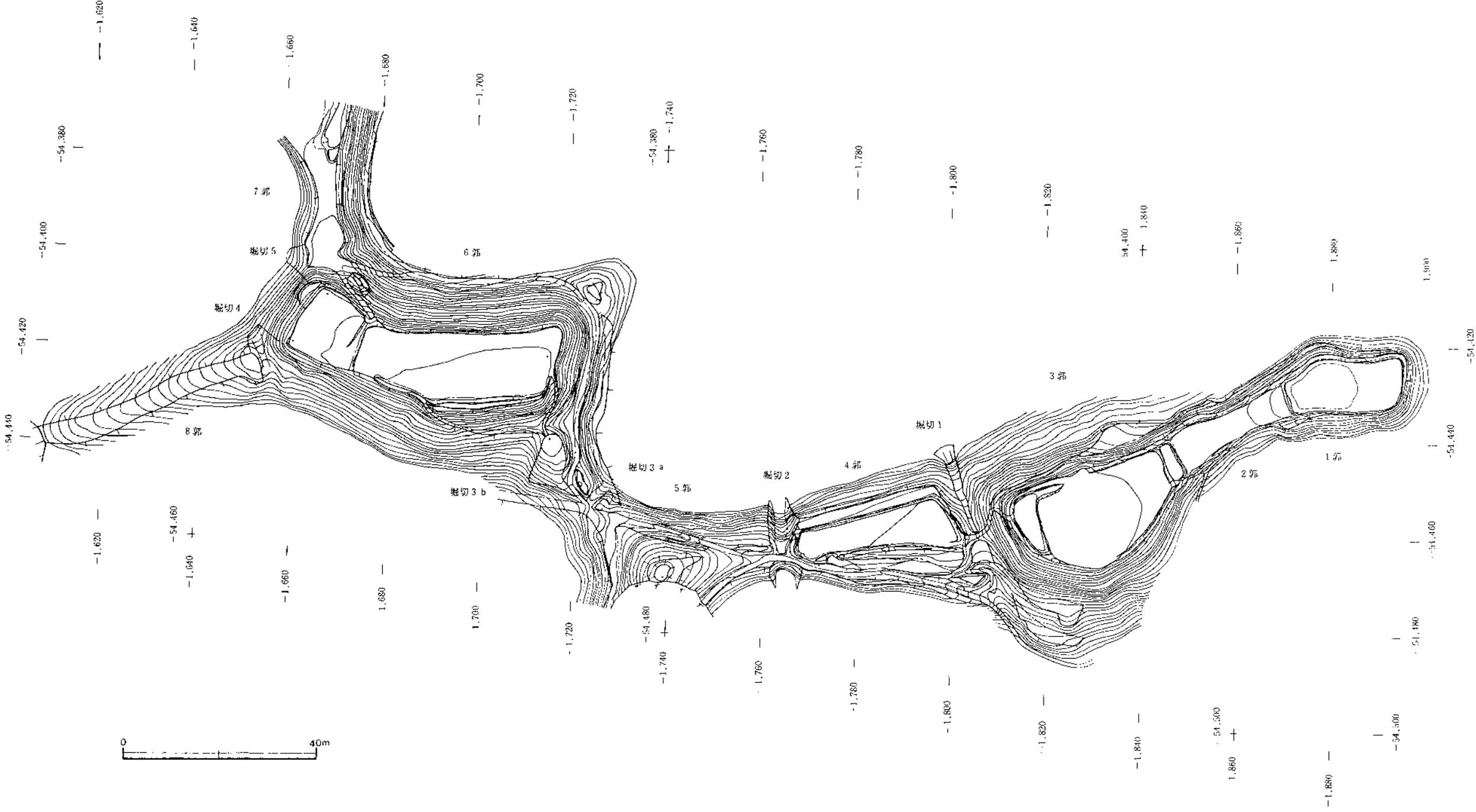


Fig. 6 扇城跡調査前地形測量図



東斜面では4 mほど掘り下げられている。堀切3bは、約13mほど6郭への斜面を上った位置であり、幅約2.5mを測る。西斜面では緩やかに開き斜面へと続くが、南斜面では山道が通っておりわずかな窪みとなっている。

6郭は南北長55m 東西幅13~16mを測る方形を呈し、やや西へ張り出し曲っている。平坦面の標高は53.5m前後を測り、北部約13mは0.5~0.8mほどの小段となり低くなる。また、北端の一部を除き西辺には地山の削り出しによる幅1.5m、高さ1mの土塁状地形がみられる。堀切3bから延びる山道が東斜面中腹を巡り、南東端から延びる小尾根を削り込んでいる。6郭には一部植林がなされており、西辺の土塁状地形からみても4郭と同様に削平を受けているものと考えられた。

7郭は6郭から東へ延びナリカド城跡へと続く尾根上であり、堀切5により隔てられている。平坦面は東西長約40m、南北幅5~8mを呈しており、東南部にはやはり土塁状の地山削り出しがみられる。標高は47mを測り、6郭との比高差は約4mである。

堀切5はほとんど埋まっており、南北両斜面にわずかな窪みとして残されていた。幅は約3mとみられ、端部は標高44mラインで終わっている。

8郭は緩やかに北へ延びる尾根であり、平坦面等は存在せず自然地形である。堀切4は6郭と8郭を隔てるが、堀切5と同じく幅約2.5mのわずかな窪みとしてのみ確認された。

調査前の状態は以上であり、自然地形も含め南から1~8郭の曲輪と5本の堀切が確認された。1~3郭は最近まで畑地として使用されており、4・6・7郭には植林が行われていたことからみれば各曲輪の遺存状況はあまり良好とは思われなかったが、堀切については現況においても明瞭に確認された。各斜面の傾斜は全体的に40~60°と急峻であり、特に堀切2の東西両斜面、堀切3の南斜面は60°以上の傾斜面である。1郭の南は5~6mの比高差をもつ急傾斜面であり、さらに南の栗本城跡に至るまでは、ほぼ平坦な細尾根が続いている。

## 2. 調査の方法

調査にあたっては、調査前のトラバース測量を行い、地形測量図を作成した。さらに調査区の設定については、トラバース測量点を基準点として各曲輪の形状にあわせた任意の4mグリッドを設定した。1~3郭は同一グリッドであり、基準線は公共座標第IV系の北から東へ4°-40'-30"振れている。グリッドの名称は東西を西からA~L、南北を北から1~25とし、北西コーナーを基準として呼称することとした。調査はグリッドにより2m幅のトレンチを設定し、遺構、遺物の遺存状態を確認した後、ベルトを残し全面発掘を行った。また、3郭西斜面も同様にベルトを残し掘り進めた。堀切1・2については4郭の中央長軸を基準線として任意に分割し全面を掘り下げた。4郭は地表面がすでに地山であり、遺構、遺物が存在する可能性はほとんどなかったが、確認のためA~Fのトレンチを設定し、調査を行った。各トレンチは次のとおりである。Aトレンチ3×22m・Bトレンチ2×18m・Cトレンチ1×9m・Dトレンチ1×5m・Eトレンチ1×4m・Fトレンチ1×4m。

B区については6・7郭に4mグリッドを設定した。グリッドの基準線はやはり6郭の南北長軸方向とし、公共座標第Ⅳ系の北から東へ $4^{\circ}10'20''$ 振っている。名称は1～3郭と同様に東西をA～O、南北を1～16とし、北西コーナーを基準として呼称した。やはりグリッドラインにベルトを残し全面調査を行ったが、北端部と南端部及び中央西辺部に墓地が残されており、改葬後に調査を行うこととした。7郭はグリッドを延長し、調査を進めた。堀切3・4については、堀切の中心線を基準とし、堀切5はグリッドを基準とした。

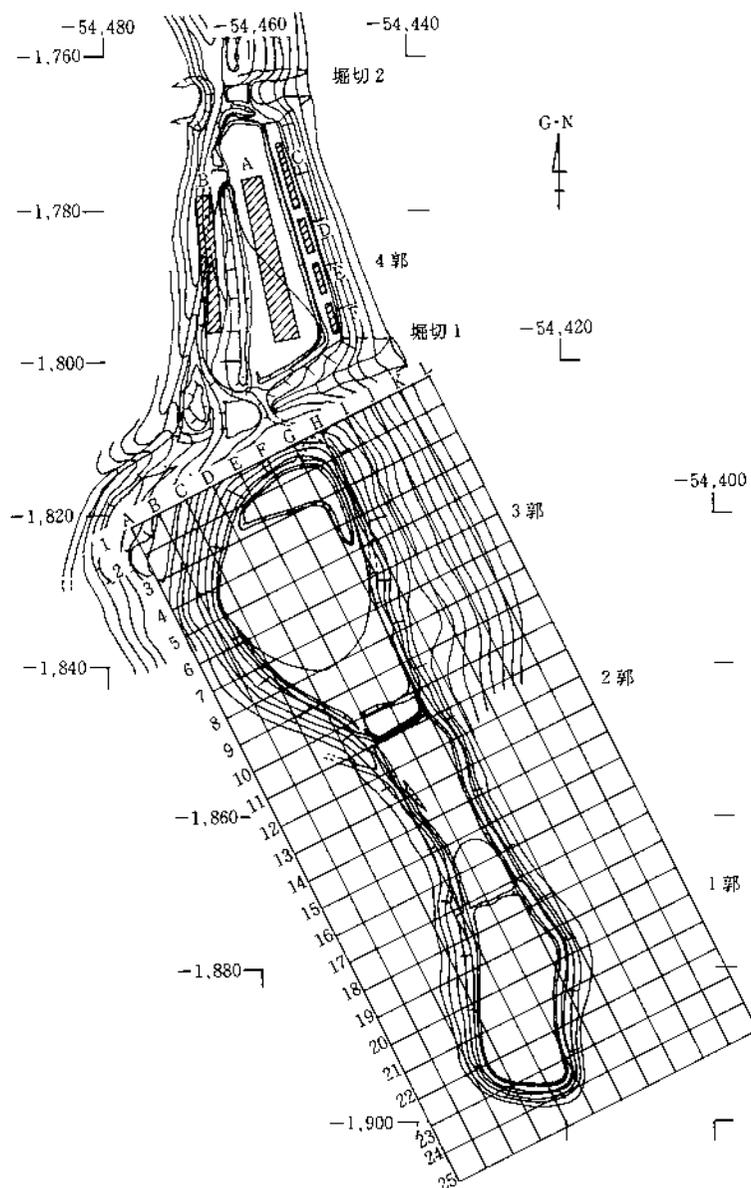


Fig. 7 A区(1～3郭)グリッド・4郭試掘トレンチ設定図 (S = 1/1000)

遺構の全体測量については航空測量により実施し、縮尺 $\frac{1}{50}$ の遺構図、同 $\frac{1}{100}$ の全体図を調製した。各曲郭、堀切等の土層図等については現地が必要に応じて作成した。

### 3. 調査の概要

調査はA区から着手したが、調査対象地は1郭の北半部であったので、事業者と協議のうえ対象外であった南半部の調査から開始した。南半部では表土下に岩盤がみられ、岩盤を掘り込んだ柱穴31個が確認された。南端部では岩盤が深くなり黄褐色土が盛土されていた。調査対象地である北半部でも同様に岩盤を掘り込んだ柱穴42個が検出された。2・3郭ではグリッドに

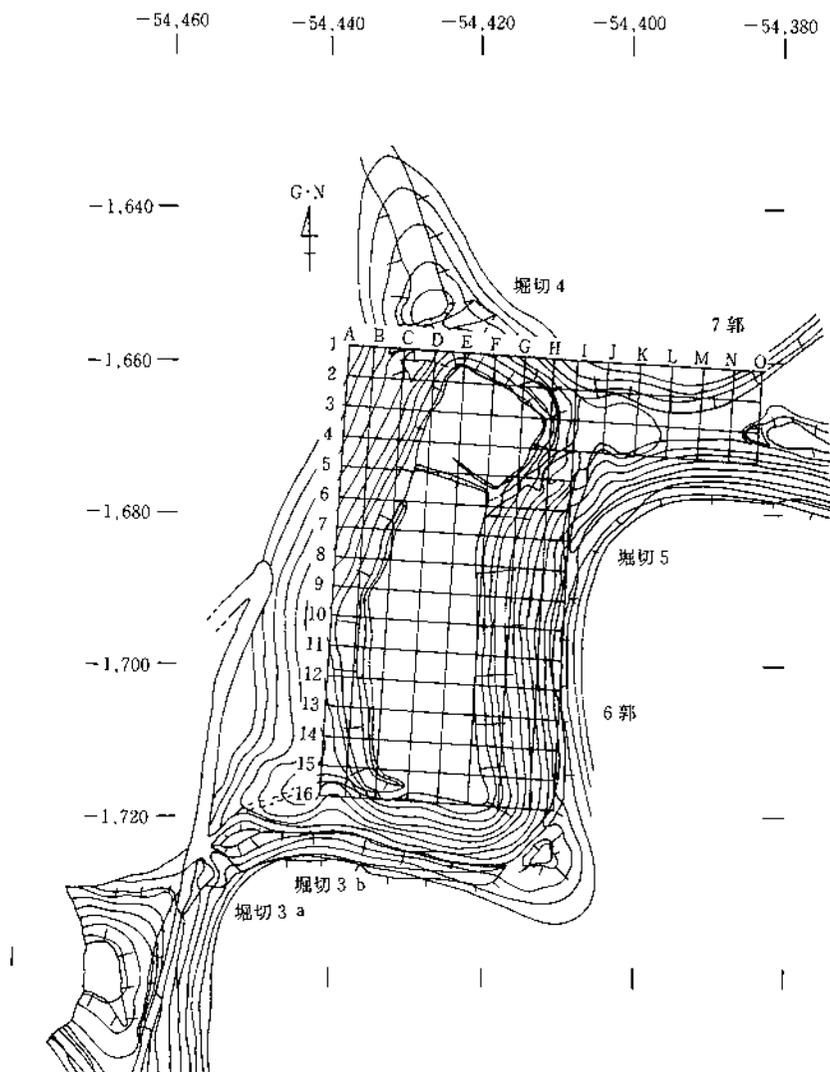


Fig. 8 B区(6・7郭)グリッド設定図 (S = 1/1000)

よる幅2 mのトレンチを中心に設定し、調査を進めた。2郭のトレンチでは北寄りの部分で岩盤が切れ、堀切の存在が考えられたが、調査の結果、部分的な岩盤の落ち込みであることが判明した。2郭と3郭の小段部は掘り込んだ結果、西半部の岩盤を大きく削平し、平場を造り出していた。柱穴はやはり岩盤に掘り込まれており、2郭では80個、小段部には7個が検出された。3郭のトレンチにおいても表土直下に岩盤がみられ、柱穴の存在が確認された。全面調査の結果、北端部から東辺部にかけての土塁、南西部の岩盤削平による平場の造り出し、方形及び円形の土坑各1基、柱穴77個が検出された。また、西斜面の緩斜面部においては、堀切より続く通路状の遺構を確認した。4郭では中央部と東部、西部の平坦面をトレンチにより調査を行ったが、ほとんど表土もなくすべて地山であり、出土遺物もないことから後世の植林等の削平によるものと考えられた。5郭は現況確認の結果、自然地形であると判断されたが、その南北に続く尾根部は堀切により隔絶されており、城としての構造の一環としてとらえられる。堀切1及び2は岩盤を削り込んでおり、尾根部、斜面部ともにきわめて急激な斜面をなしている。特に堀切1の3郭側は急斜面であり、東側では比高10mほど削り込んである。

B区の調査はA区終了後に着手された。まず、A区と同様に遺構、遺物の遺存状態を確認するために6郭の中央部に幅2 mのトレンチを設定し、調査を進めるとともに、7郭の全面調査にも着手した。6郭も他の郭と同様に表土は薄く、直下に岩盤がみられたが、南西端部及び北端部は岩盤が落ち込んでおり、盛土により造り出されていた。遺構としては西辺部の土塁と土坑8基、柱穴155個が検出された。柱穴は北部と南半部に集中しており、土坑は柱穴の少ない中央部に集中していた。7郭では表土直下に岩盤がみられ、堀切5の部分に5個の柱穴が検出されたのみであり、他の遺構は確認されなかった。また、東端部においては調査対象地外に延びる土塁が一部確認されていた。8郭は5郭同様、北へ延びる自然地形の尾根であることが確認され、やや浅いが6郭との間には堀切4が検出されている。堀切3は5郭と6郭の鞍部に掘られた2重の堀切であり、堀切5では中央部を土橋状に掘り残しており、その周辺に5個の柱穴が検出されている。

遺物の出土状況は、A・B区ともに表土が薄く、直下に岩盤がみられる部分が大半であり、包含層出土の遺物はあまり多くなかったが、2・3郭の平場を造り出した段状遺構及び郭の端部を造成した盛土中と柱穴等の遺構から出土する遺物が中心であった。土師質土器は377点と他の城跡に比して少なく、ほとんどが磨耗している。輸入陶磁器は、青磁が264点と大半を占め、他は白磁13点、染付8点ときわめて少量である。国産陶器では備前が最も多く304点、他に瀬戸5点、天目茶碗1点、東播系1点がみられる。瓦質土器は10点と少なく、他に土鍾が14点出土している。金属製品では渡来銭、鉄釘、呼子等が出土しており、スラグ、砥石もみられる。

#### 4. 層 序

扇城跡における土壌の堆積は薄く、各曲輪においても表土下に岩盤がみられる状態であるが、2郭のみは1郭と3郭の鞍部にあたり、岩盤までの間に堆積が存在する。また、3郭南西部の

段状遺構及び6郭の北部と南東部は岩盤が低く落ち込んでおり、盛土がみられる。

1～3郭の縦断面セクション（Fライン）の層序は次のとおりであり、表土はすべて畑地の耕作土である。

1層 表土	4層 暗褐色混砂利土（炭化物を含む）
2層 淡黒褐色粘質土	5層 黄色地山土
3層 黄褐色混砂利土	6層 黒褐色粘質土（pit埋土）

1郭では中央部に若干の3層がみられるが、ほとんどは表土直下が岩盤である。2郭はF12・13から1郭側と3郭側へと高くなっており、表土直下に岩盤がみられる。F12・13は岩盤が落ち込み、最も低くなっており、2～5層の土層が存在する。2層は表土（耕作土）の影響により淡黒褐色を呈する。3・4層は地山土に砂利を含む土層であり、4層には炭化物を多く含むことにより色調の変化がみられる。5層は地山土であり、若干の地山礫を含む。城跡に關係する土層は3・4層であり、整地のために盛土が行われたと考えられる。

1・3郭の横断面セクション（19・5ライン）は1層表土直下に岩盤がみられ、肩口には岩盤を削り込んだ畑の周囲を廻る道が存在し、一部黄褐色混礫土等が存在する。2郭（13ライン）は縦断面セクションと同様であるが、4層下の一部に炭化物の集中層が検出されている。2郭北西部及び3郭南西部の段状遺構（S X 1・2）では岩盤を削り込み整形が行われ、さらに3郭と同レベルまで盛土がみられる。盛土の層序は次のとおりである。

#### 9ライン（S X 2）

1層 表土	5層 暗黄褐色混砂利土
2層 黄褐色混砂利土	6層 暗褐色粘質土
3層 暗黄色混砂利土	7層 炭化物
4層 暗黄色混礫土	8層 黄色地山土

#### 10'ライン（S X 1）

1層 表土	6層 明褐色粘質土	10層 暗黄色砂利土
2層 黄褐色混砂利土	7層 焼土	11層 暗褐色砂利土
3層 暗黄褐色混礫土	8層 明黄色混礫土	12層 黄色地山土
4層 茶褐色粘質土	9 a層 暗褐色粘質地山土	
5層 暗黄褐色地山土	9 b層 〃 混砂利土	

9ラインでは、2～5層のいずれも砂利（1cm以下の岩盤小片）または岩盤礫（1～5cm）を多く含む土層であり、色調の変化はあるが同質の盛土である。6層は礫をほとんど含まない地山土をベースとする粘質土であり、7層炭化物層を間層として含むことからみれば、S X 2の遺構面に伴う堆積層と考えられ、上層の2～5層は整地時における一括盛土であろう。10'ラインの層序は、7層焼土とともに礫を含まない4層茶褐色粘質土、6層明褐色粘質土の存在から8層上面において上層と下層に分離される。下層の8～11層は、9 a層暗茶褐色粘質土を除き砂利、礫をかなり含んでおり、S X 1の下層一括盛土とみられる。上層の盛土は8層上面に

おける作業面に伴う堆積である6・7層と5層堆積面上の4層の2面が考えられ、以後2・3層により3郭の小段部のレベルまで盛土整形されたものであろう。

3郭の西斜面下の緩斜面部ではほとんど土層の堆積はなく、1層表土と岩盤上の2層黄色地山土である。通路と考えられるS X 3は岩盤を削り出しているが、部分的には2層地山土を強く叩き締めており、他の地山土との差は明瞭である。

6郭の北端部では、地山の落ち込みに2層暗黄褐色粘質土を盛土し、整形している。また、南西部も同様に大きく地山が落ち込んでおり盛土されているが、その層序は次のとおりである。

#### 14ライン

- 1層 暗褐色粘質土
- 2層 黄灰色混礫土
- 3層 暗黄褐色混礫土
- 4層 暗黄色礫土
- 5層 暗黄灰色礫土
- 6層 黄褐色礫土

1層を除き2～6層は岩盤礫を多く含んでおり、6郭削平土による盛土と考えられる。堆積状態は各層とも右下へ傾斜をもっており、6層から順次盛土を行いながら拡張し、整形した状況がみられる。

7郭は1層表土が非常に薄く、その下には2層黄色地山土が存在するが、遺物包含層等はなく、以下は岩盤である。また、3・6・7郭に残存する土塁は、いずれも地山の削り出しによって築造されており、盛土によるものは存在せず、各曲輪の削平時に造り出されたものである。

堀切1のセクションでは、上層黄褐色混礫土、下層に暗黄褐色地山土が存在するが、上層は堀切斜面の部分的な崩壊による堆積と考えられ、礫を含まない下層が堀切の埋土とみられる。堀切2のセクションにも、上層の1層表土、2層暗褐色混礫土と下層の礫を含まない3層黄褐色粘質土が存在し、やはり下層が埋土と考えられる。堀切4のセクションは土層の堆積が薄く、1層表土と2層黄褐色粘質土がみられるのみである。

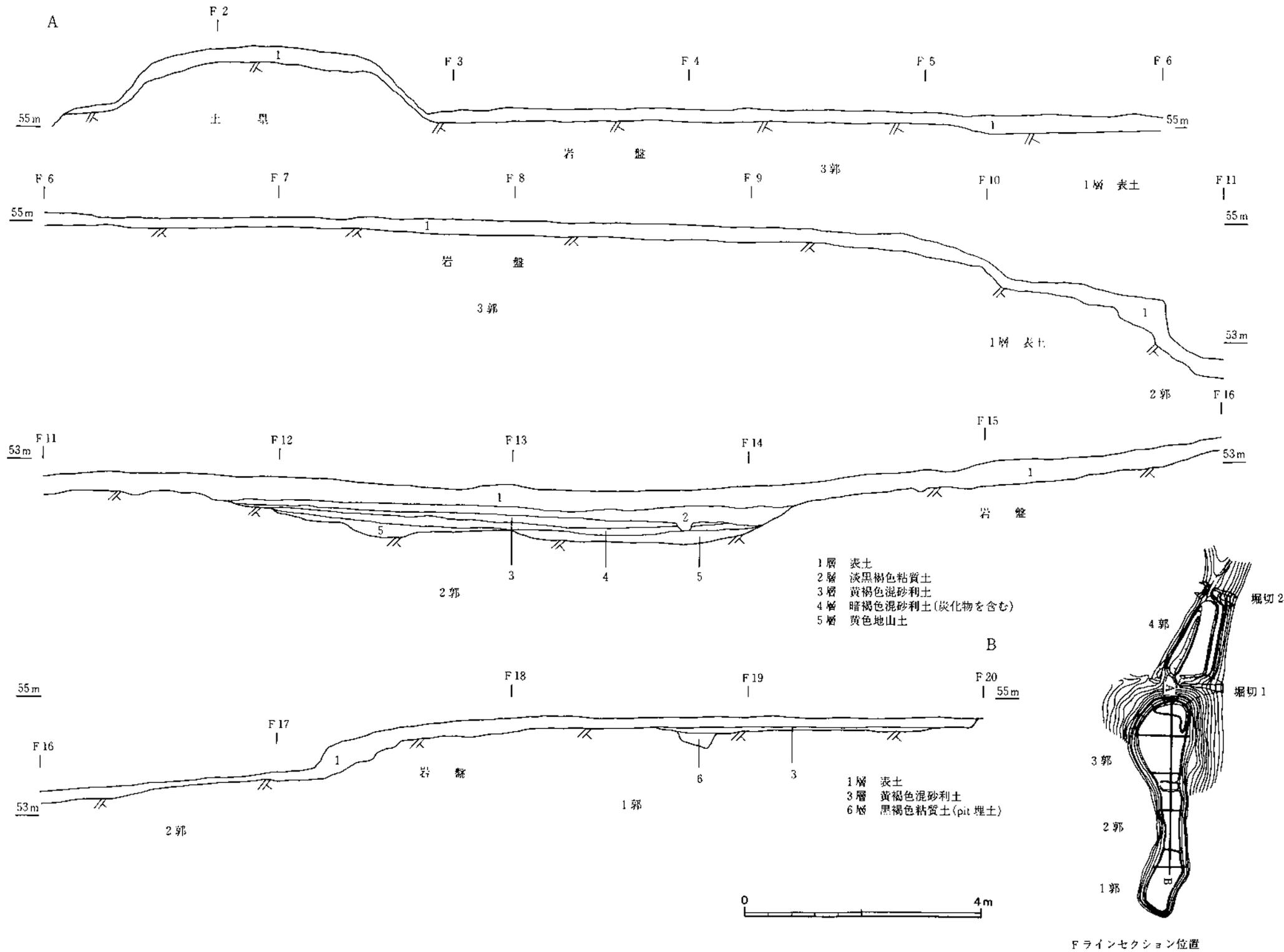


Fig. 9 1~3郭Fライン縦断セクション図



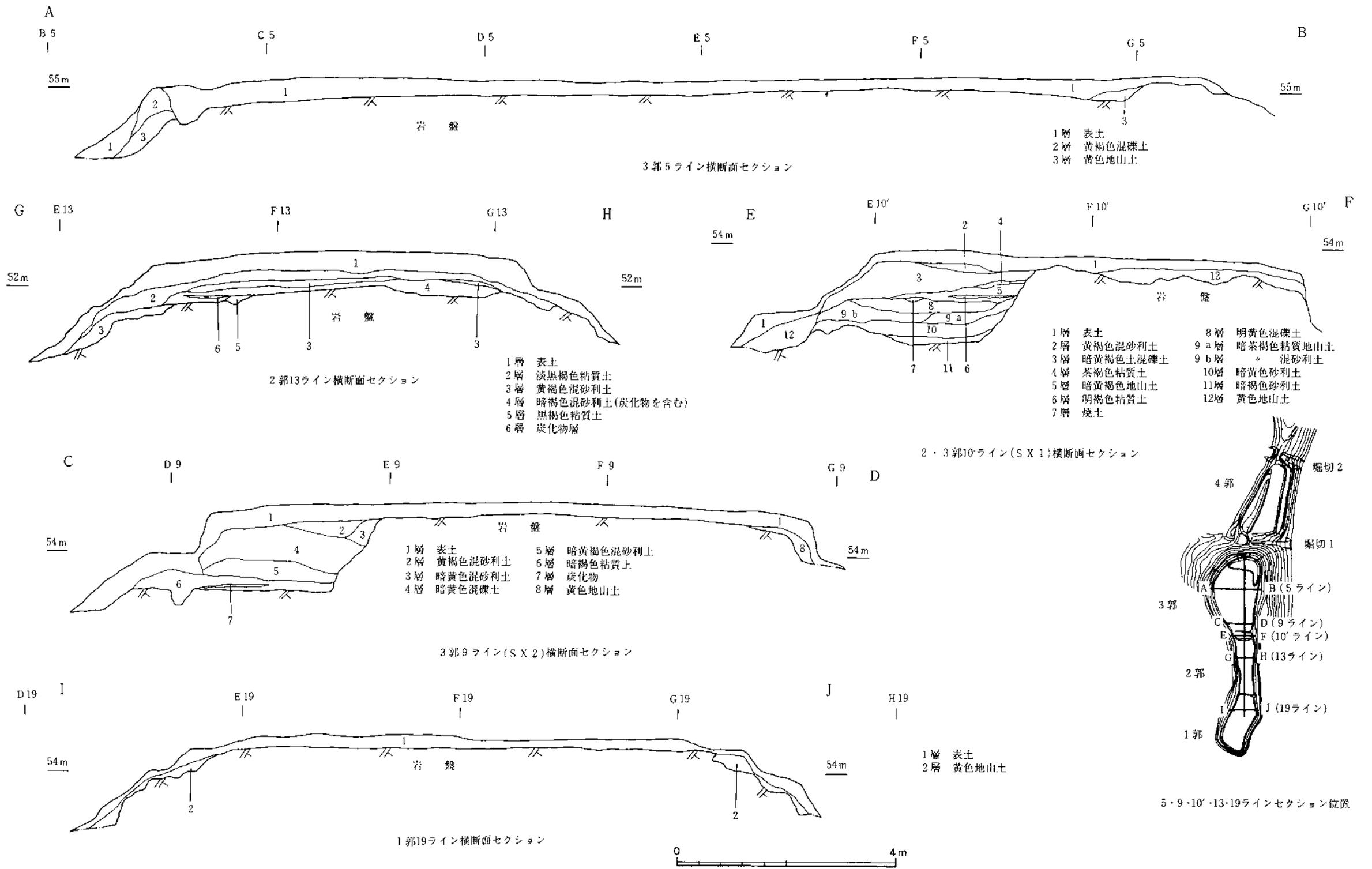


Fig. 10 1~3郭5・9・10'・13・19ライン横断面セクション図



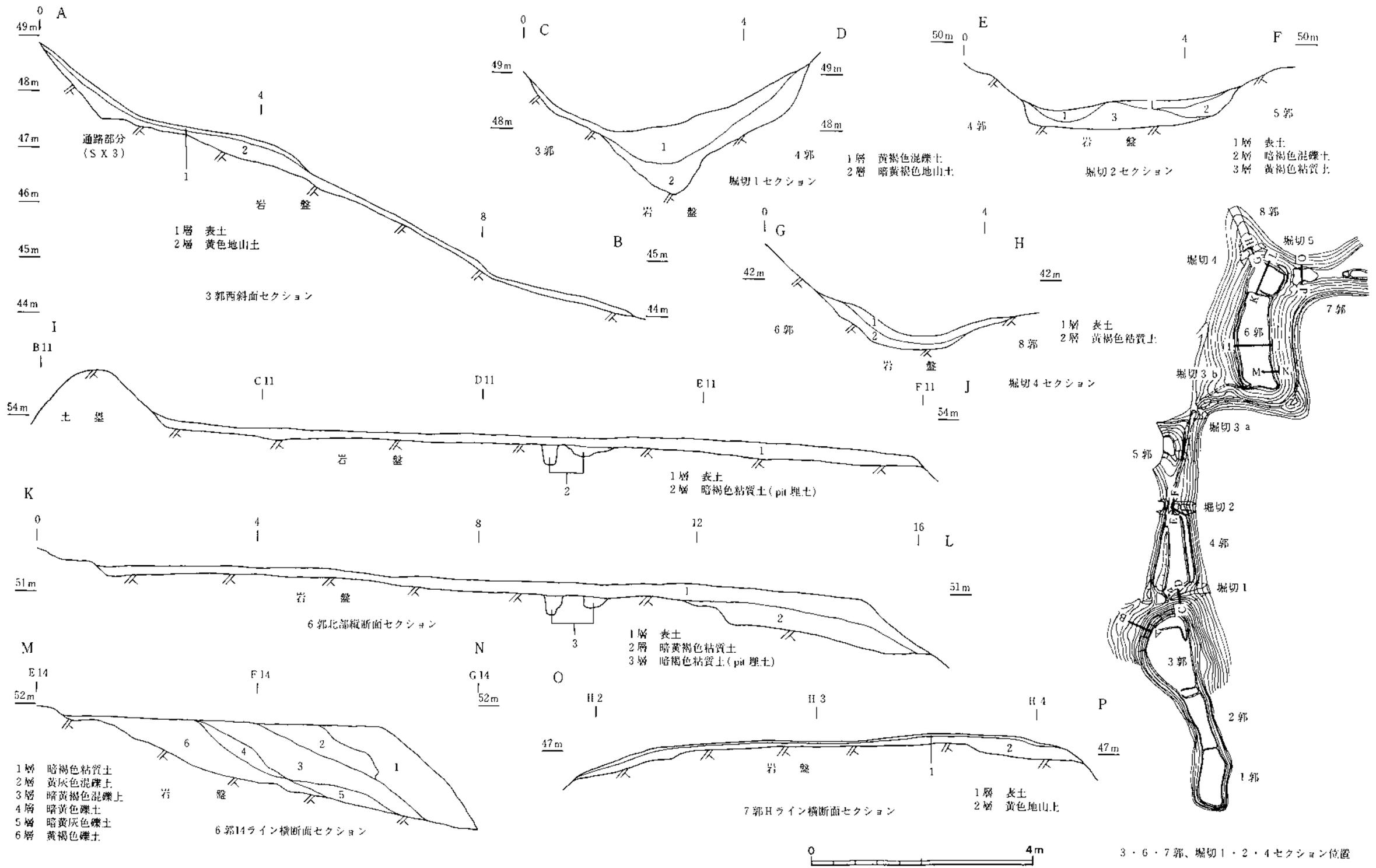


Fig. 11 3郭西斜面、6郭11・14ライン 7郭Hライン、堀切1・2・4セクション図



## IV 遺 構

### 1. 遺構の配置

扇城跡において検出された遺構は、1・2・3・6・7郭の各曲輪であり、堀切は1・2・3 a・3 b・4・5の6本であった。他に1郭の東斜面に溝跡SD1、2郭北西部及び3郭南西部では段状遺構SX1・2、堀切1の底部より3郭の西斜面の緩傾斜部に延びる通路遺構SX3が検出された。5・8郭はすでに述べたとおり自然地形であり、削平による平場の築造等はみられず、4郭も試掘トレンチの状況から判断すれば後世の植林による削平であると考えられた。土塁は3郭の北辺から東辺北半部にかけて、6郭では西辺部に残されており、7郭においても東端部から調査区外に延びる南辺部に土塁が確認された。各曲輪の遺構配置については以下に述べる。

1郭における遺構は、調査対象地外も含め、掘立柱建物跡4棟、柵列2列、柱穴40個、東斜面に溝跡1条が検出された。1郭自体は25X10mの不整形であり、中央部から南はやや西へと曲っている。遺構面は標高54.50m前後を測るほぼ平坦な岩盤面であり、南端部約2m及び縁辺部1mは岩盤が落ち込み、盛土により築造されている。1郭と2郭の間は50~60cmの小段差により区分され、東西の斜面は40~55°の傾斜をもつ。東斜面のSD1上面斜面は掘削により急斜面を造り出している。

2郭では、掘立柱建物跡3棟、柵列1列、柱穴60個が検出された。2郭は1郭の北半部と同方向に延びる方形の曲輪であり、幅5~8mと狭く、全長は21m（SX1部分では25m）を測る。遺構面はやはり岩盤であり、1郭側から緩やかに低くなる。3郭側では西方に向け岩盤が40~50cm落ち込んでおり、南端部との比高差は約1.8mを測る。掘立柱建物跡及び柱穴は岩盤面に多く、SX1にはSB7が位置している。また、岩盤落ち込み部には2個の礎石と考えられる50cm前後の礫が検出されている。2個ともに割れているが、上面には平担面がみられ、火を受けて赤化している。出土状態からみれば移動していると考えられ、盛土時に埋め込まれたものであろう。

3郭の遺構は、掘立柱建物跡4棟、柱穴50個、土坑2基、土塁である。遺構面はすべて平坦な岩盤面であり、柱穴数は曲輪の面積に比して少なく、散在している。3郭の東辺は2郭から同方向に直線的に延び、西辺は半円形をなす。全長は35m、最大幅17mを測り、南端部には5×5mの3郭面より1.3mほど低い小段部が存在する。南西部のSX2にはSB8が位置し、西斜面の緩斜面部には堀切1底部から延びる通路遺構SX3が存在する。

6郭では、掘立柱建物跡3棟、柵列5列、柱穴94個、土坑8基、土塁が検出された。6郭は中央部で若干東へ屈曲した方形であり全長55m、最大幅15mを測る。遺構面は岩盤であるが、北部及び南東部では岩盤の落ち込みを盛土により整形しており、特に南東部は盛土が厚い。掘立柱建物跡と柵列は南部と北部に分かれ、中央部には土坑が位置している。さらに柵列は6郭の中央部に、長軸方向に添い連続して存在する。

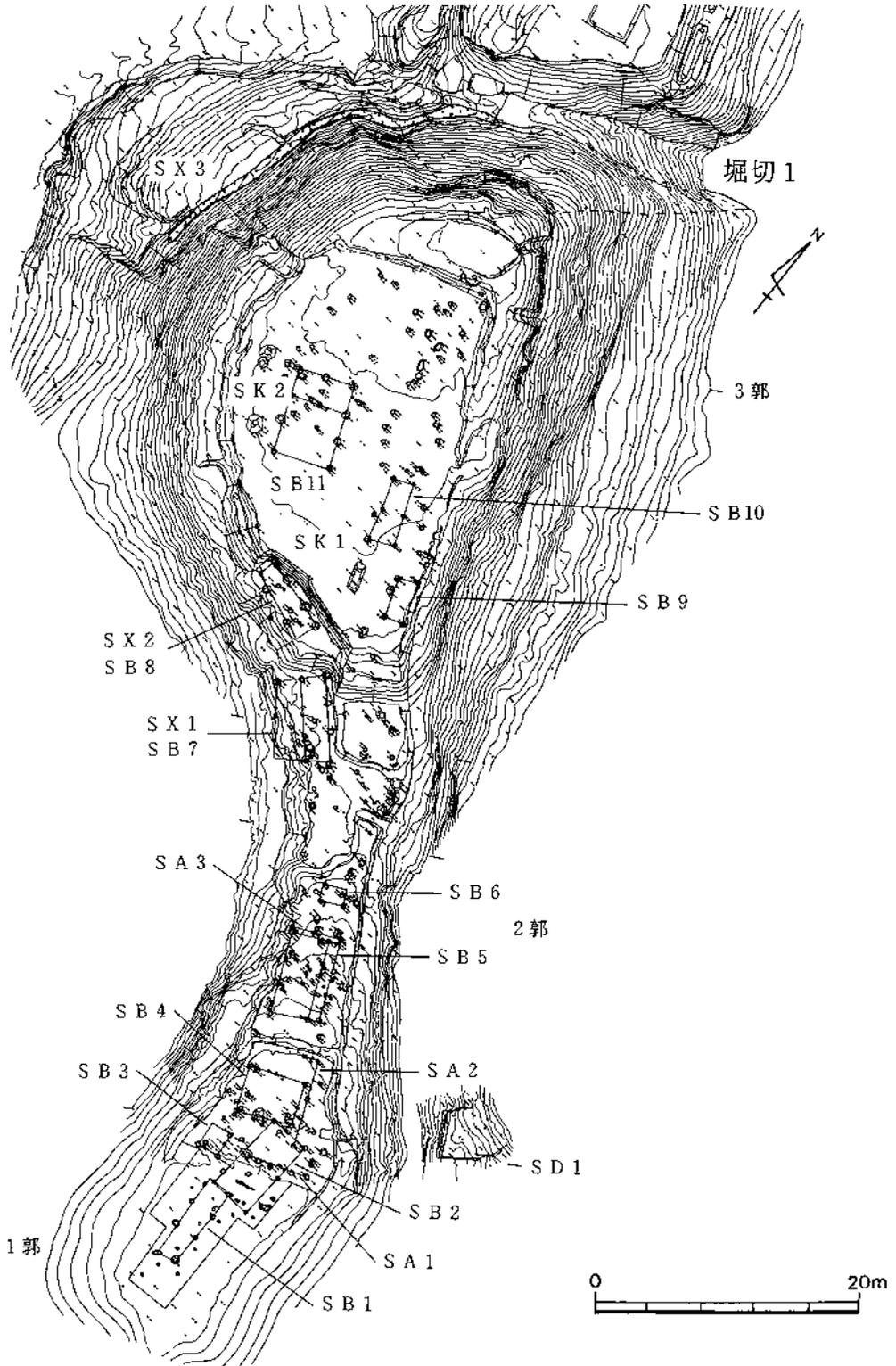


Fig. 12 1～3郭遺構配置図

7 郭の遺構は、堀切 5 の土橋部分に検出された 5 個の柱穴と東端部の土塁のみであり、他は全面ともに岩盤面である。

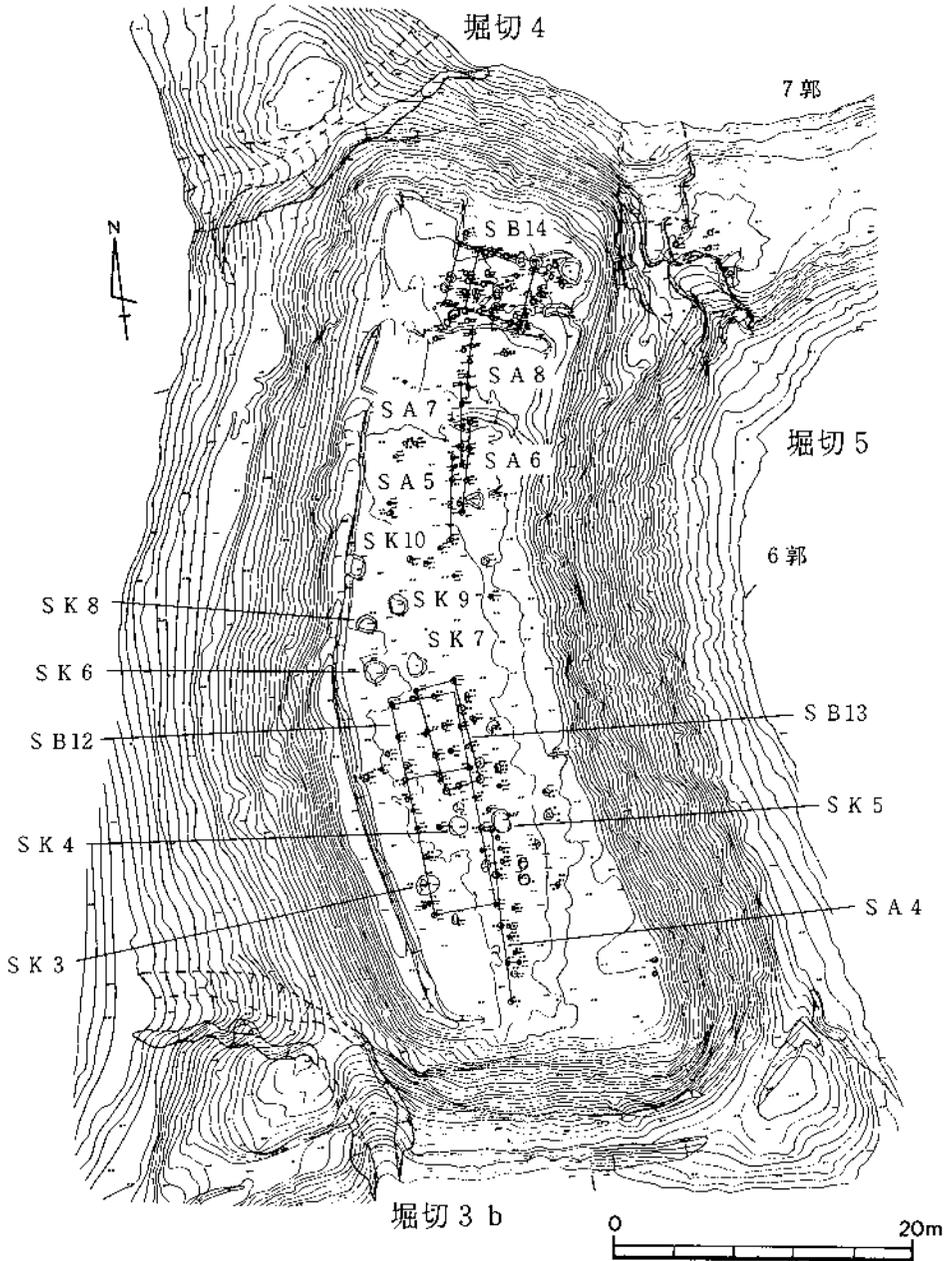


Fig. 13 6・7 郭遺構配置図

## 2. 掘立柱建物跡

### 1) 1郭

#### S B 1

S B 1は、1郭の南半部に位置する1×3間の南北棟であり、ほぼ北に方位をとる。柱間は桁行2.05～2.65m、梁間1.9mを測るが、南辺は1.4mと狭い。柱穴は直径40～70cmの楕円形及び不整形であり、北西コーナーの柱穴は検出されていない。深さは30～40cmを測り、南東コーナーの柱穴は65cmと深い。埋土は暗褐色粘質土であり、南端は岩盤の落ち込む屑部にかかっている。遺物は、図示したものとして、南西コーナーのP1から青磁の皿口縁（Fig.28-17）が出土している。

#### S B 2

S B 2は1郭のほぼ中央部に位置し、1×2間の南北棟である。棟方向はN-7°-EとS B 1とはほぼ同方向であり、北を示す。柱間は桁行3.15～3.45m、梁間3.05～3.3mを測り、他の掘立柱建物跡に比べ広い間隔をもつ。南辺はS B 1の北辺に一部接している。柱穴は直径30～40cmの円形であるが、左辺中央部の柱穴は長径90cmの楕円形であり、切り合いがみられる。深さは、いずれも20～30cmと全体的に浅く、埋土は暗褐色から褐色粘質土である。

#### S B 3

S B 3は、S B 2の西側約1mに位置する1×1間の小規模な建物跡であり、S B 1・2と同じくN-2°-Eとほぼ北に方位をとる。柱間は1.7mと1.85mを測り、北西コーナーの柱穴は検出されていない。柱穴は直径40～50cmの楕円形であり、深さは10～20cmと浅く、埋土は暗褐色粘質土である。

#### S B 4

S B 4は1郭の北半部に位置し、S B 2の北西部と一部重複する2×2間の東西棟である。棟方向はN-71°-Eを示し、S B 1～3とはやや方向に違いがみられ、1郭の形状に合わせているようである。柱間は桁行2.05～2.25m、梁間1.35～1.9mを測り、差がみられる。柱穴は直径35～45cmとやや小さく、深さも10～25cmと浅い。南辺中央の柱穴は重複しており、深さは44cmと深く、埋土は黄褐色粘質土である。

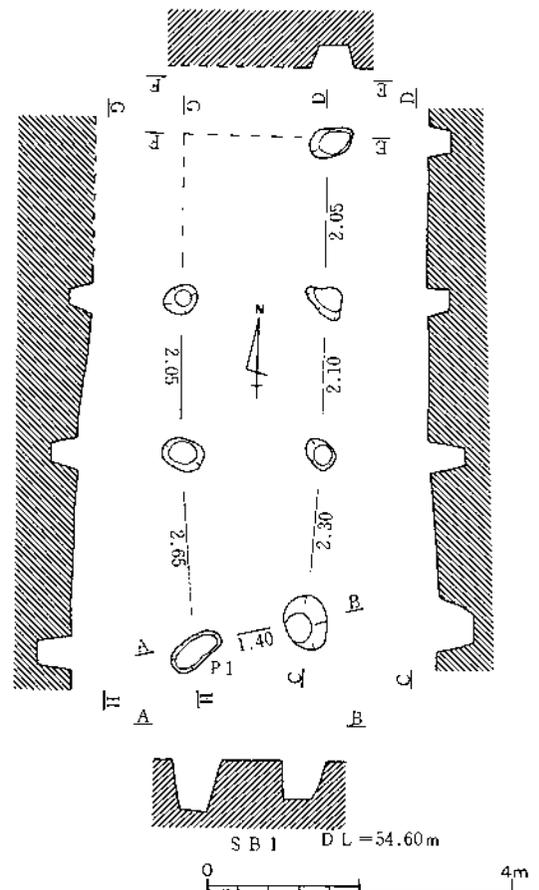


Fig. 14 S B 1

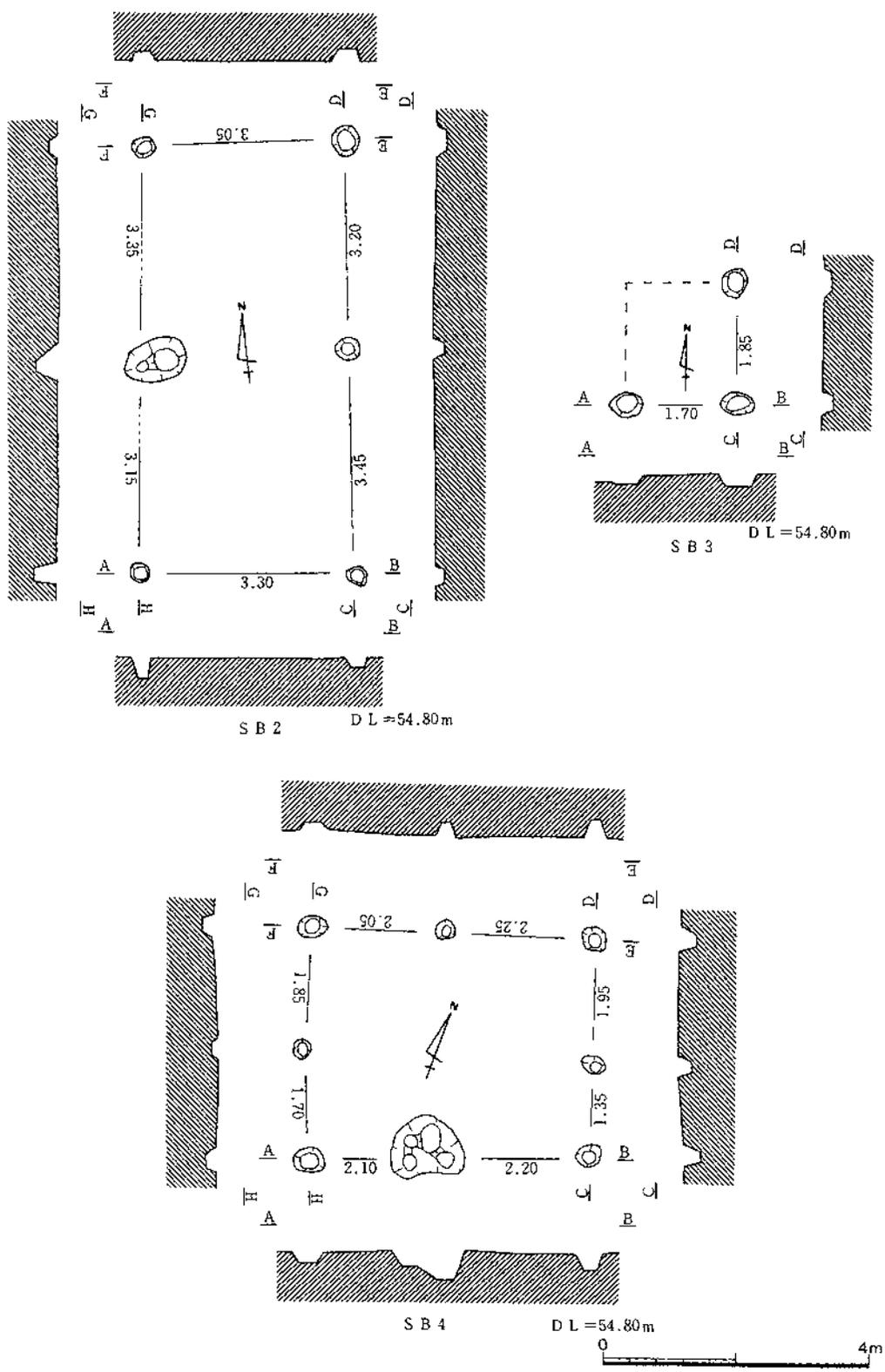


Fig. 15 SB 2 ~ 4

## 2) 2郭

## S B 5

S B 5は、2郭の南半部の岩盤面上に位置しており、1×3間の南北棟である。棟方向はN-23°-Wを示し、やはり2郭の形状に合わせる方向である。柱間は桁行1.85~2.25m、梁間2.85~2.9mを測り、梁間がやや広い。さらに、東辺には80~90cmの間隔をもつ張り出しの柱穴が存在するがやや並びが乱れている。柱穴は直径25~40cmの円形及び不整楕円形であり、小形である。深さは20~45cmが多いが、最も深い柱穴は75cmを測る。埋土は暗褐色粘質土である。規模からみれば梁間は2郭の幅に近く、西辺は岩盤の肩口にそって検出されている。東辺部側は幅1.5mほど残されており、通路としての空間と考えられる。

## S B 6

S B 6はS B 5の北2.5m、岩盤落ち込みの肩口に位置している。規模は1×1間であり、柱間は1.3mと1.8mを測る。長軸を棟方向とすればN-68°-Eを示す東西棟である。柱穴は直径25~35cmと小さく、北西コーナーの柱穴は検出されていない。深さは10~25cmと浅く、埋土は暗褐色粘質土である。

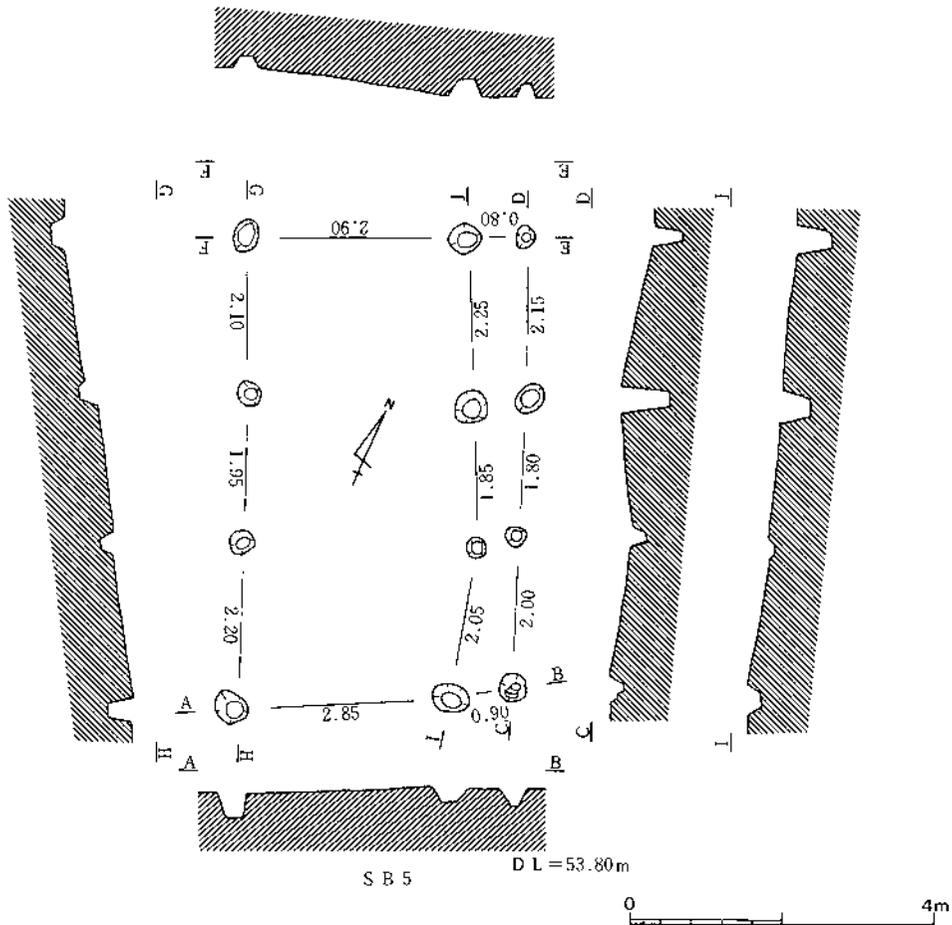


Fig. 16 S B 5

## S B 7

S B 7は2郭の北西端部に位置する段状遺構であるS X 1に位置する。S X 1は3郭南端の小段部の西辺から、3郭の南西端部を削り込み、造り出された方形の平坦部であり、S B 7建造のために造築されたものであろう。規模は2×3間の南北棟であり、棟方向はN-40°-Wを示す。柱間は桁行2.1~2.35m、梁間1.8~1.9mを測り、東辺部はほぼ等間隔である。柱穴は直径40~60cmとやや大形であり、不整形の円形及び楕円形を呈する。北西コーナーと南辺中央の柱穴はS X 1の肩口であり、西辺は斜面上に張り出す。南辺と中央ラインの柱穴には段部がみられ柱の建替えが考えられる。北辺と東辺は削り込んだ壁にほとんど接しており、S X 1の平坦部全面に建物が存在している。埋土は暗黄褐色粘質土であり、小礫を含んでいる。

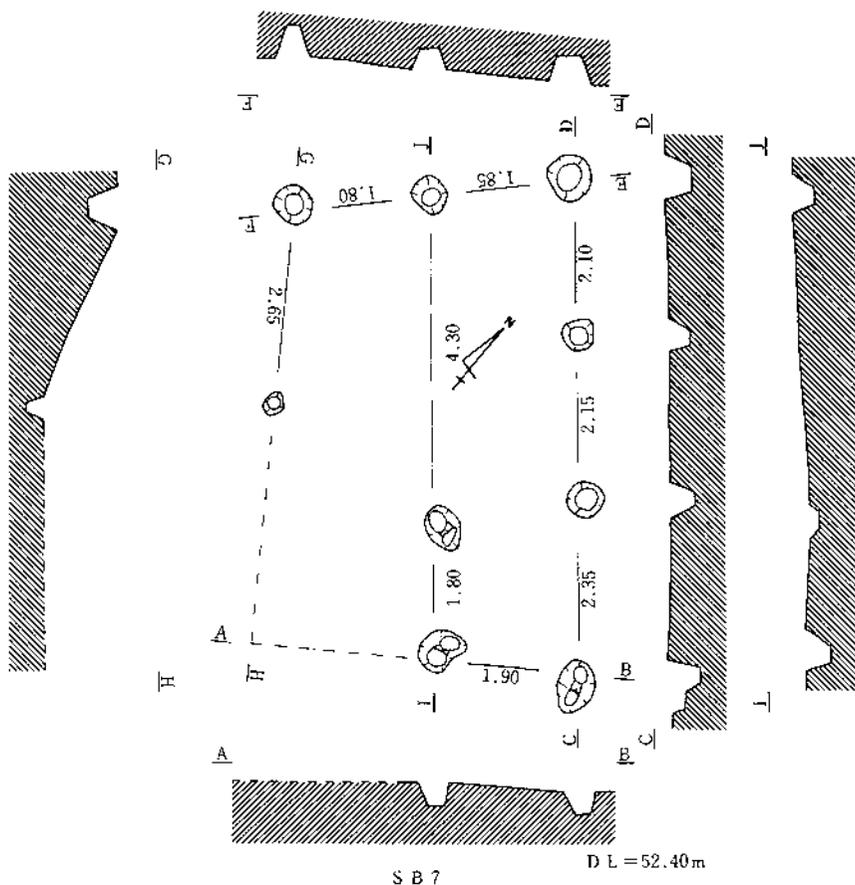
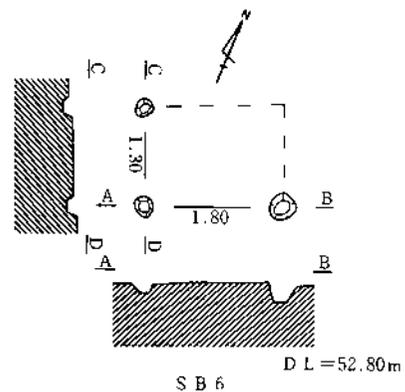


Fig. 17 S B 6・7

0 4m

## 3) 3郭

## S B 8

S B 8は3郭南西端部の段状遺構S X 2に位置する。S X 2はS X 1と同様に3郭をほぼ垂直に削り込んで造り出された方形の平担面であり、やはりS B 8建造のための造築であると考えられる。規模は1×3間の東西棟であり、棟方向はN-71°-Wを示す。柱間は桁行1.3~2.8m、梁間1.3mを測る。桁行の中央部は2.6mとやや広く、両端の柱間は1.6mであり等間隔で狭くなっている。柱穴は直径40~80cmを測る不整楕円形であるが、中央部の柱穴は70~80cmと大きく、両端の柱穴はやや小形である。深さは10~30cmと径に比べ浅く、南東コーナーの柱穴は検出されなかった。両辺及び北辺の柱穴は壁にほとんど接しており、S B 7と同様にS X 2全面に建物が存在する。埋土もS B 7と同じく暗黄褐色粘質土であり、炭化物が若干みられた。

## S B 9

S B 9は3郭の南端部近くに位置し、1×1間の規模をもつ。柱間は1.5mと1.55m、3.0mと3.35mであり、長軸を桁行とすれば、梁間の間隔は桁行のほぼ半分である。また、棟方向はN-16°-Wを示す。柱穴は直径30~40cmの不整円形であり、深さも20~30cmとそろっている。埋土は黄褐色粘質土であり、東辺の柱穴2個は3郭の東端部にかかっている。

## S B 10

S B 10は、S B 9の北西約2mに位置する。規模は1×2間の南北棟であり、棟方向はN-18°-Wを示し、S B 9と同方向である。柱間は桁行2.40~2.55m、梁間1.6mと2.05mであり、桁行はそろっているが、梁間は南辺が開いている。柱穴は直径25~50cmを測る不整形及び楕円形であり、深さは10~30cmである。埋土は黄褐色粘質土であり、棟方向は3郭の東辺に平行し、S B 9とともに東辺を基準としている。

## S B 11

S B 11は、3郭中央西寄りに位置する2×3間の南北棟である。棟方向はN-20°-Wを測り、3郭の他の建物跡S B 9・10とほぼ同方向を示す。柱間は桁行1.85~2.55m、梁間2.15~2.25mを測り、ほとんどが2m強とそろっている。柱穴は直径40~70cmの円形及び不整形であり、並びも整然としているが、深さは10~20cmと浅い。南側2間分の間中柱穴は検出されなかったが、棟の延長上南へ2mの位置に柱穴が検出されており、S B 11の柱穴の確証はないが棟柱の柱穴ではないかと考えられる。埋土は黄褐色粘質土である。

S B 11は1~3郭の中では最大規模であり、3郭から西への眺望が最もよく利く位置に存在することからみれば、南郭部の中心的な建物であったと思われる。

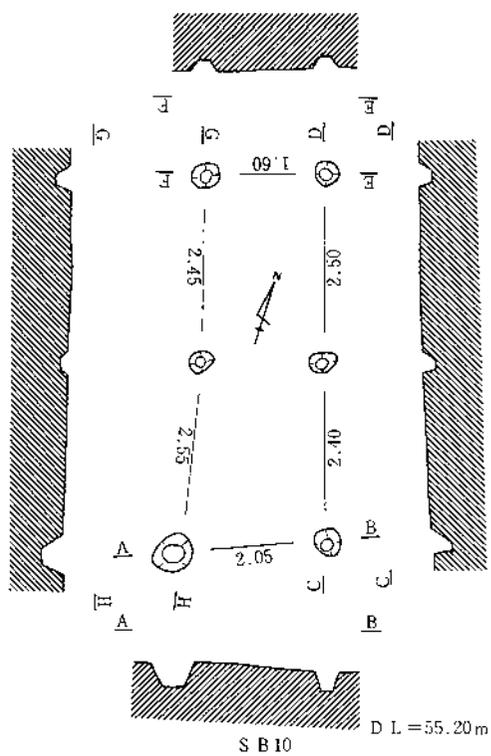
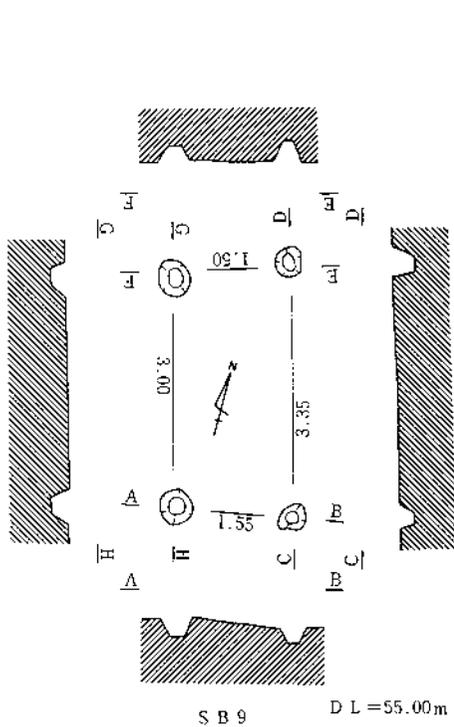
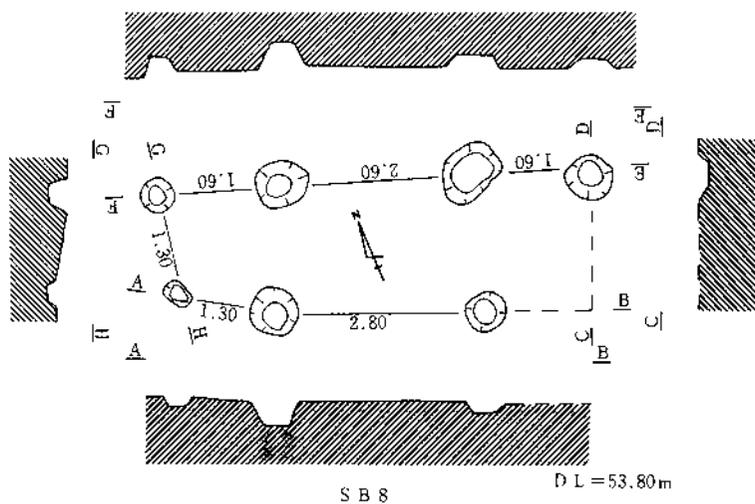


Fig. 18 S B 8 ~ 10

4) 6郭

S B 12

S B 12は6郭の南半部、西寄りに位置する。規模は2×5間であり、棟方向はN-3°-Eであり、ほぼ北を示す南北棟である。桁行の柱間は南側2間が3.3~3.85mと広く、北側3間は1.95~2.9mと狭いが、特に中央部は南北の2間分に比べ1.95m、2.1mと狭い。柱穴は直径20~40cmとやや小形の不整形円形であり、深さは20~30cmを測る。北辺は柱間1.45mの2間であり、南半部では中間柱穴が検出されない。埋土は暗褐色粘質土である。S B 12は扇城跡では最大の建物跡であり、6郭の中心的建物であったと考えられる。

S B 13

S B 13は、S B 12の北東部にほぼ重複する。1×3間の南北棟である。棟方向はN-1°-Wとほぼ北を示し、S B 12と同方向である。柱間は桁行1.9~2.8m、梁間2.4~2.65mを測るが、

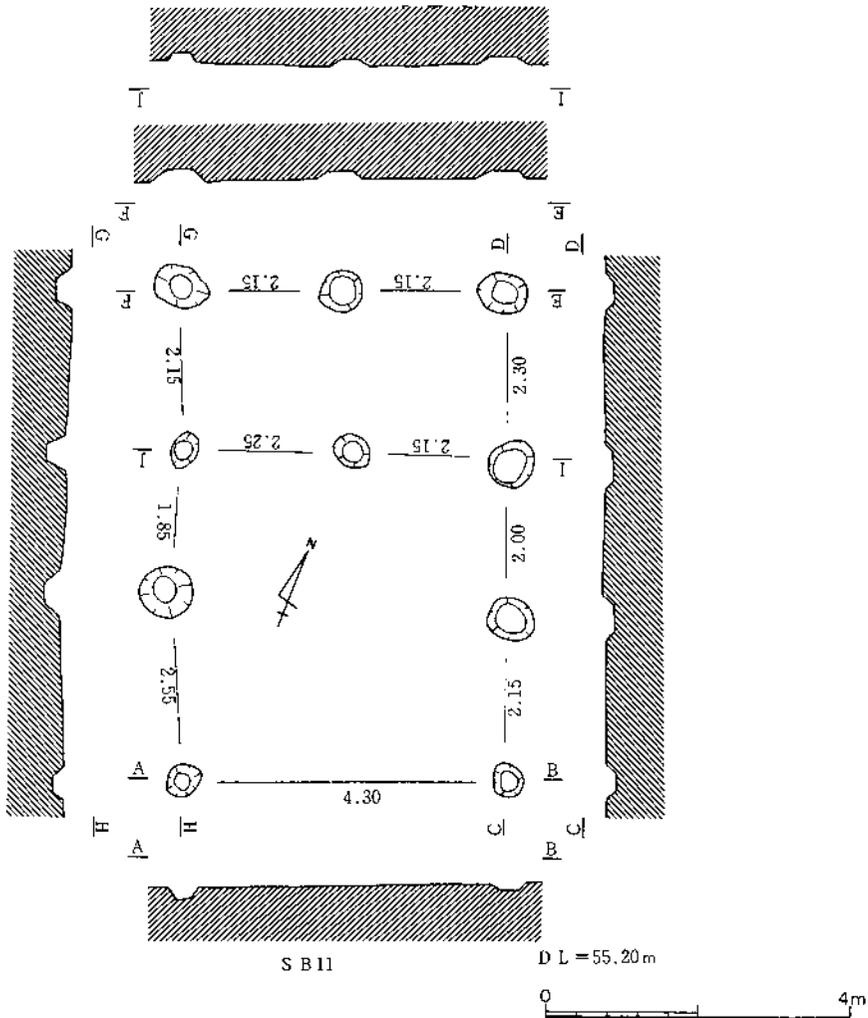


Fig. 19 S B 11

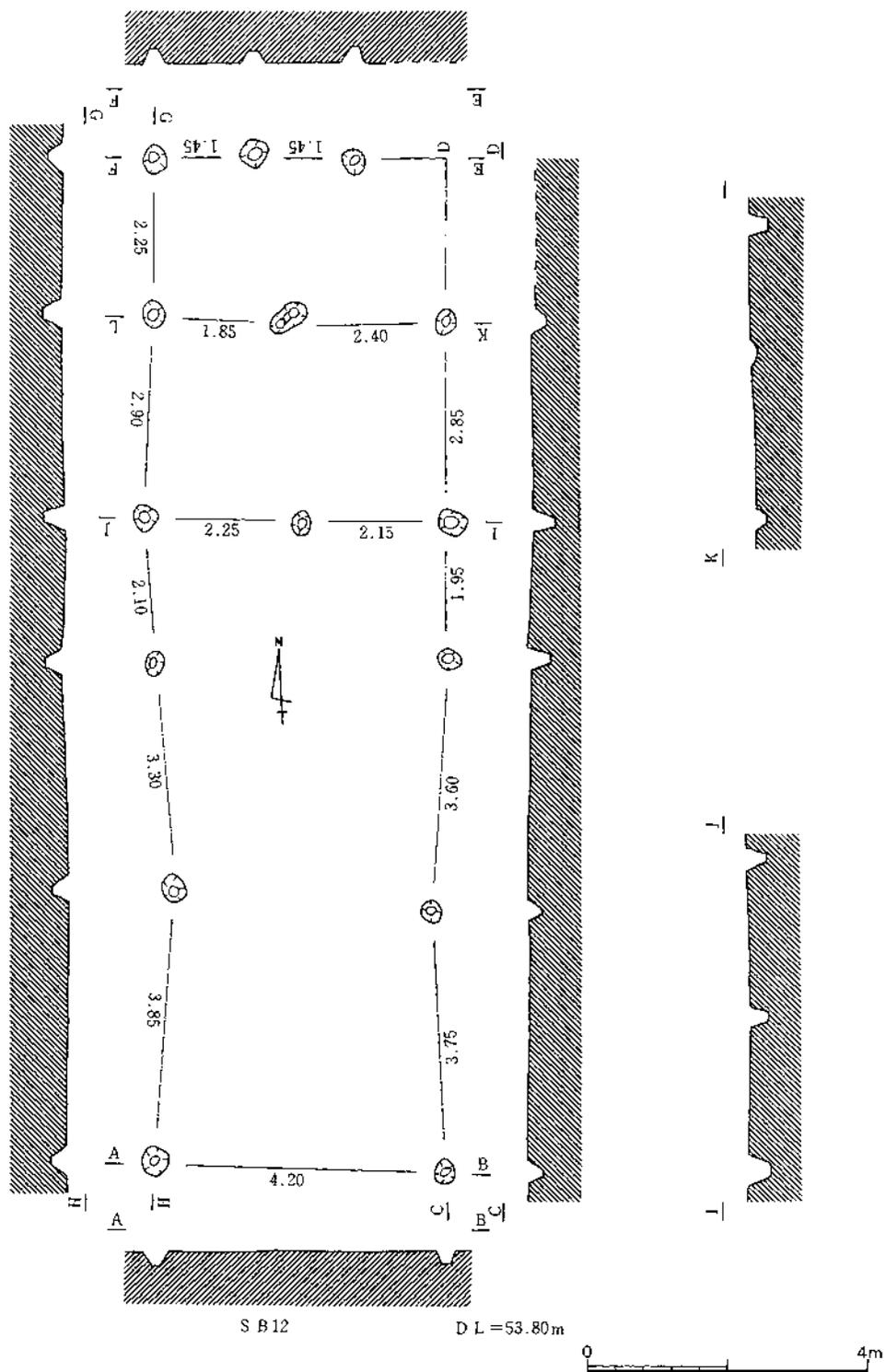


Fig. 20 S B 12

西側の柱穴は中央へ寄っている。また、北側の梁間を除き中間柱穴がみられるが、南側では柱間が0.85m、1.5mと西側側が狭くなっている。柱穴は直径30~50cmの不整形円形であり、深さは20~40cmを測る。埋土は暗褐色粘質土である。

#### S B 14

S B 14は、6 郭の北端部に位置する2 × 3 間の東西棟である。棟方向はN-62°-Wを測り、やはり6 郭の北辺にはほぼ平行している。柱間は桁行1.3~2.0m、梁間1.7~2.35mと他の建物跡に比べ狭く、特に桁行はすべて2 m弱と狭くなっている。中央列の柱穴は、中央部が2.8mと広く、両側は1.2m、1.3mと狭く両側の柱穴の並びからはずれている。柱穴は直径30~50cm不整形円形及び楕円形であるが、南東コーナーの柱穴は直径90cmと大形である。深さは20~30cmを測るが、大形の柱穴は60cmと深い。埋土は暗茶褐色粘質土である。

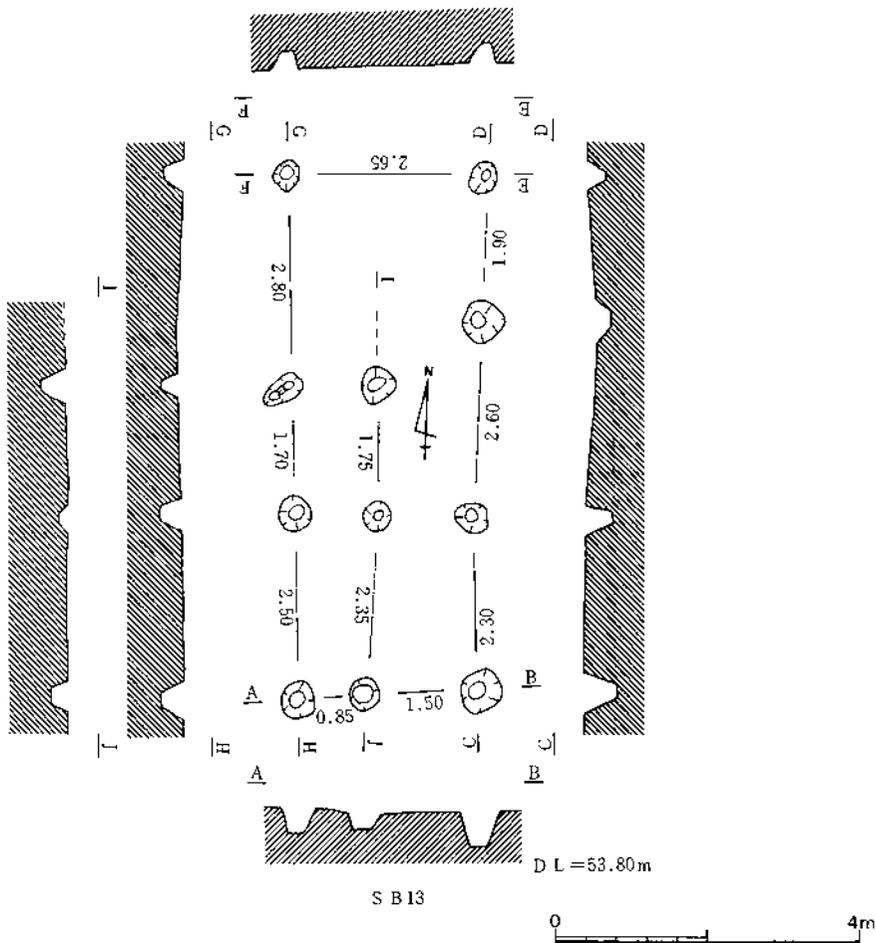


Fig. 21 S B 13

### 3. 柵 列

#### 1) 1 郭

##### S A 1

S A 1 は 1 郭のやや屈曲する中央部に位置し、1 郭を南北に隔てている。S A 1 自体は S B 2 と重複しており、その西側には S B 3 が存在する。規模は 3 間であり、N-70°-E と東西方向を示す。柱間は 0.95~1.65m と狭く、特に西側で狭くなっている。柱穴は直径 40~50cm の不整形であり、深さは 20~40cm を測る。埋土は暗褐色粘質土である。

##### S A 2

S A 2 は 1 郭の北半部に位置する逆 L 字状の柵列であり、S B 4 の東側を開く。方向は N-21°-W と S B 4 東辺にほぼ平行であり、南北方向が 3 間、北辺に 1 間の規模をもつ。柱間は 1.1~3.0m を測り、北辺は 1.1m と狭く、南北方向の北側 1 間は 3 m と広い。柱穴は直径 20~40cm の楕円形及び不整形であり、深さは 20~45cm を測る。S B 4 との間隔は東辺 0.5m、北辺 3 m と東辺側が狭い。南端の柱穴は S B 2 と重複している。埋土は暗褐色粘質土である。

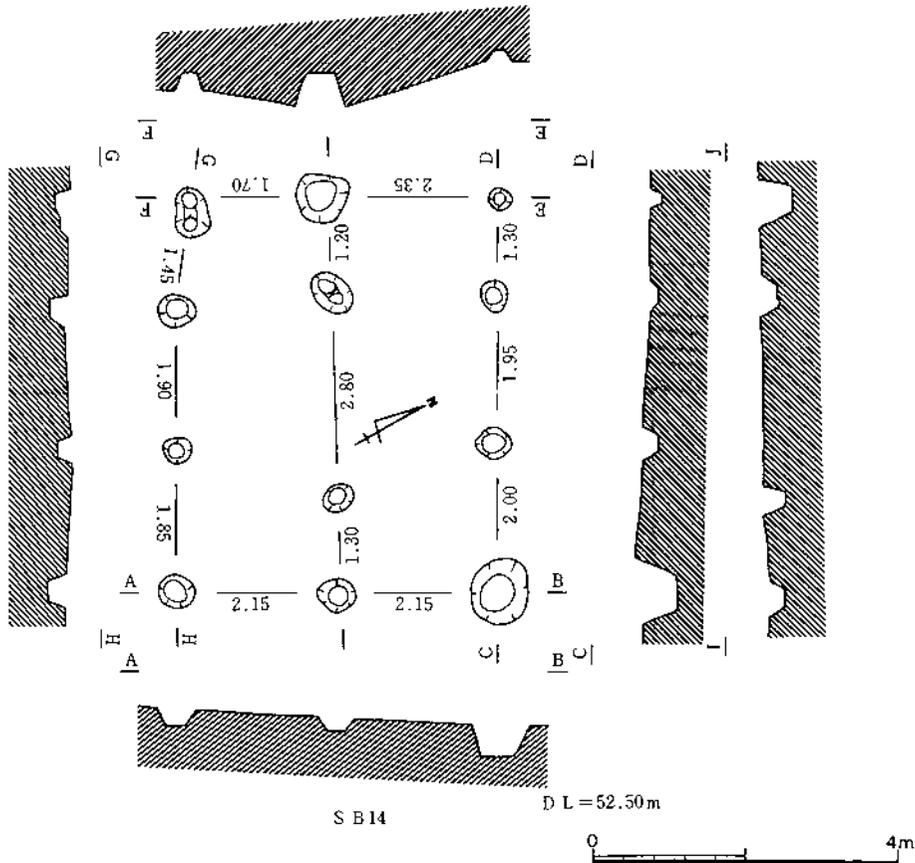


Fig. 22 S B 14

## 2) 2郭

## S A 3

S A 3は2郭の南半部、岩盤上に位置しており、S B 5の北辺に平行する東西方向の柵列である。方向はN-66°-Eを示し、規模は2間である。柱間は1.7mと2mを測り、S B 5の北辺とほぼ同じ長さをもっている。柱穴は直径25~30cmの楕円形であり、やや小形である。深さは10~15cmと浅い。埋土は暗褐色粘質土である。

## 3) 6郭

## S A 4

S A 4は6郭の南部、S B 12の東辺南半部に位置する。方向はN-8°-Eを示し、S B 12に比べ5°ほど東へ振っている。規模は4間であり、全長は11.5mと最も長い。柱間は2.55~3.45mを測り、柱間の広い柵列である。柱穴は直径30~50cmの楕円形であり、深さは15~20cmとやや浅いが、よくそろっている。S A 4の位置は6郭のほぼ中心線上であり、南部を東西に分離している。埋土は暗褐色粘質土である。

## S A 5

S A 5は6郭中央部北寄りに位置している。方向はN-20°-Eを示し、S A 6~8とほぼ同方向に連続している。規模は3間であり、柱間は1.5~2.35mを測る。柱穴は直径40cm前後を測る円形及び楕円形であり、深さは20~30cmであるが、西から2個目の柱穴は8cmと浅い。埋土は暗褐色粘質土であり、南端の柱穴(P 1)からは砥石(Fig. 36-133)が出土している。

## S A 6

S A 6はS A 5の東側約1mに位置し、やや北に寄っている。方向はN-20°-Eを示し、S A 5と同方向である。規模は3間であり、柱間は1.75~2.2mを測る。柱穴は直径30~40cmを測る不整形であり、深さは30cm前後とそろっている。埋土は褐色粘質土である。

## S A 7

S A 7はS A 5とS A 6の間から北部の下段部に延びている。方向はN-16°-Eを示し、S A 5・6に比べやや北寄りの方向である。規模は4間であり、柱間は1.3~1.5mとほぼ等間隔であるが狭い。柱穴は直径30~50cmの不整形を呈し、深さは18~45cmであるが、南半部の柱穴は30~45cmと深い。埋土は暗茶褐色粘質土である。

## S A 8

S A 8はS A 7の東側0.5mに位置し、北へ延びる。方向はN-23°-Eを示し、S A 7に比べやや東へ振っており、S A 5・6とほぼ同方向である。規模は4間であるが、全長3.6mと短かい。柱間は0.8~1.05mと他の柵列に比べ狭く、半間間隔に近い。深さは10~20cmと浅く、埋土は暗茶褐色粘質土である。

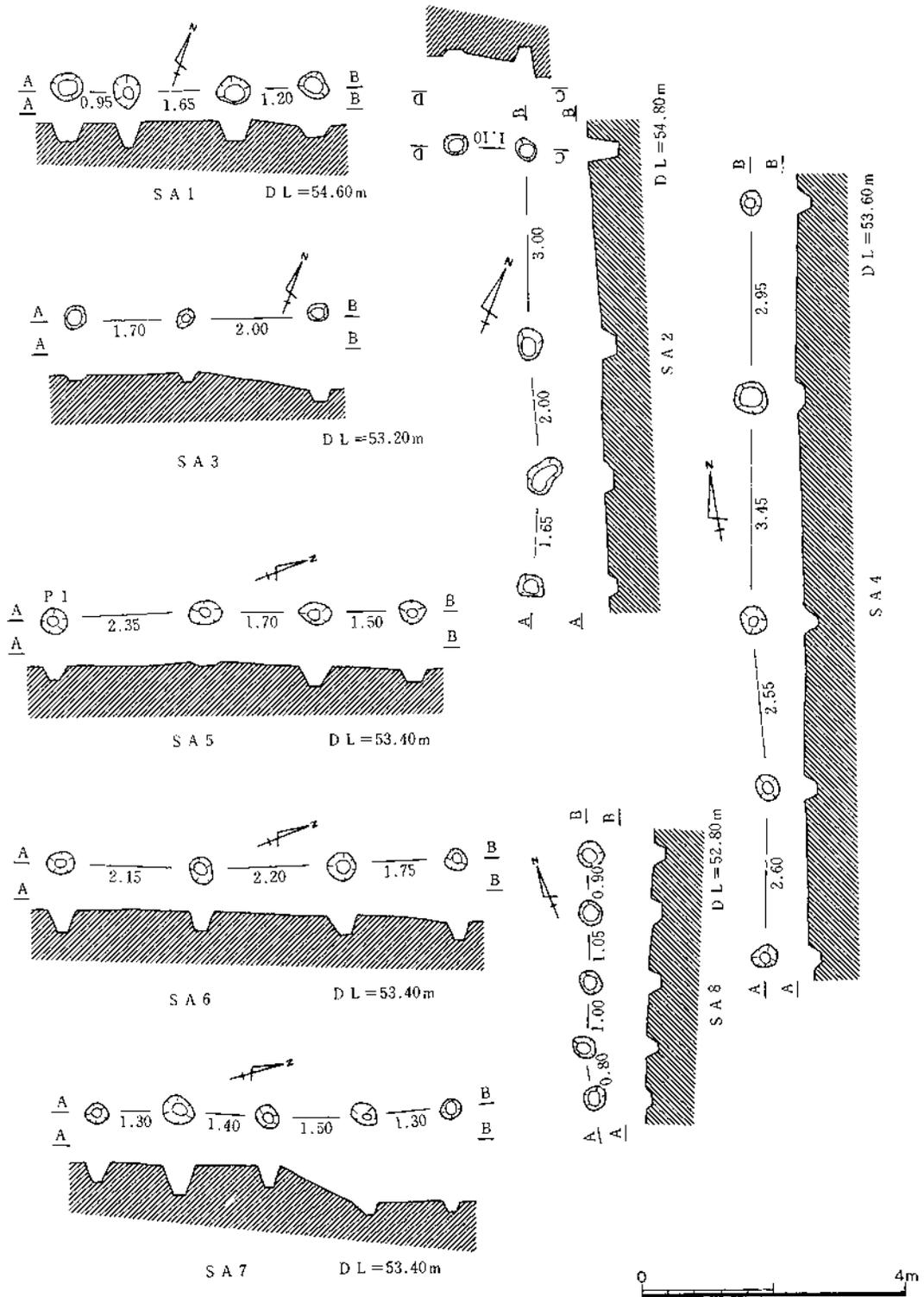


Fig. 23 SA 1 ~ 8

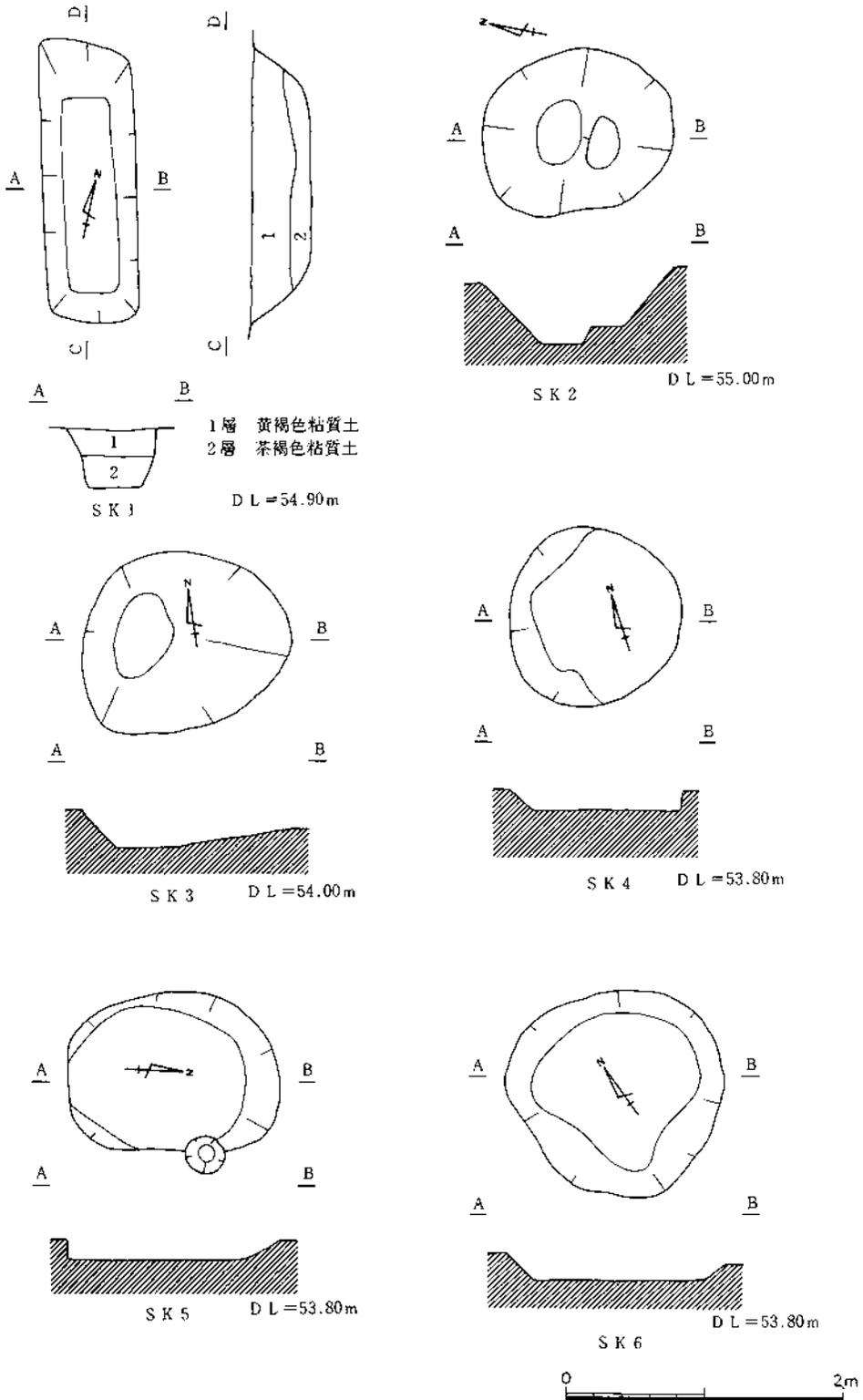


Fig. 24 SK 1 ~ 6

## 4. 土 坑

## 1) 3 郭

## S K 1

S K 1 は 3 郭の南部、S B 9 の西側 2.5m、S B 10 の南側 1.8m に位置する。規模は 2.0×0.7m を測る方形であり、深さは 42cm である。長軸方向は N-13°-E を示し、S B 9・10 とほぼ同方向である。南北の両壁は東西壁に比べ緩やかに立ち上り、底面は平坦である。埋土は 2 層に分離され、1 層黄褐色粘質土（岩盤小礫を多く含む）が 35cm 前後、2 層茶褐色粘質土（炭化物を含む）は 18cm 前後を測り、ほぼ水平の堆積層をなす。

## S K 2

S K 2 は 3 郭の西部、S B 11 の西側 1 m に位置する。規模は 1.38×1.16m の楕円形であり、深さは 48cm を測る。長軸方向は N-12°-W を示し、底面は小さい。南側には深さ 38cm の小段部がみられる。壁は緩やかであり、スリ鉢状を呈する。埋土は黄褐色粘質土であり、岩盤小礫を含む。

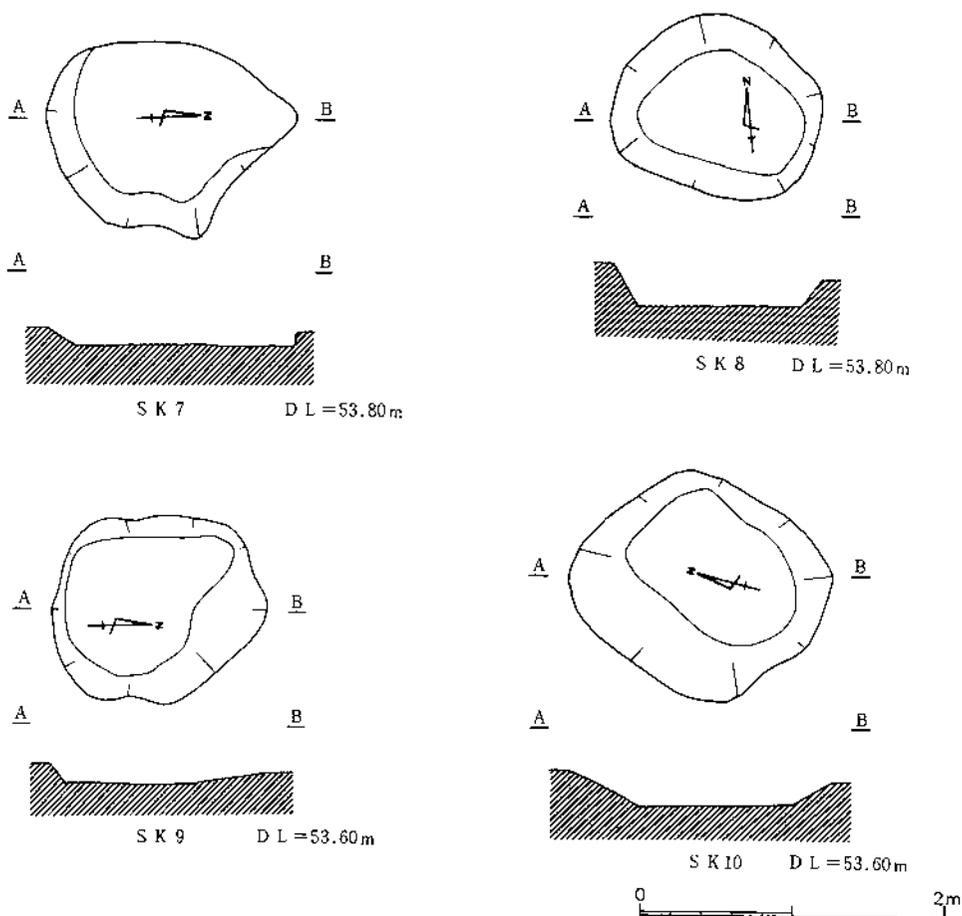


Fig. 25 S K 7 ~ 10

## S K 3

S K 3は6郭の南部、土塁東側に位置し、S B 12と重複している。規模は1.5×1.28mの楕円形であり、深さは28cmを測る。長軸方向はN-81°-Wを示し、底面は小さく、西に寄っている。東壁は底面からきわめて緩やかに立ち上り、ほとんど平坦に近い。埋土は暗褐色粘質土である。

## S K 4

S K 4は6郭の南半部、S K 3の北東3mに位置し、やはりS B 12の範囲中に含まれる。規模は1.23×1.2mの円形であり、深さは16cmと浅い。長軸方向はN-72°-Wを示し、底面は平坦である。西壁は緩やかであるが、東壁は垂直に立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土である。

## S K 5

S K 5はS K 4の東側1.60mに位置し、S A 4北端の柱穴が重複している。規模は1.54×1.14mの楕円形であり、深さは14cmとやはり浅い。長軸方向はN-3°-Wとほぼ北を示し底面は平坦である。壁はやや緩やかであるが、南辺及び東辺の一部は垂直に立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土である。

## S K 6

S K 6は6郭の中央部、S K 12の北1.5m土塁寄りに位置する。規模は1.58×1.5mの不整形円形であり、深さは20cmを測る。長軸方向N-55°-Wを示し、底面は平坦である。壁はやや緩やかに立ち上り、埋土は暗褐色粘質土である。

## S K 7

S K 7はS K 6の東1.4mに位置し、規模は1.66×1.2mの不整形である。深さは9cmときわめて浅く、長軸方向はN-4°-Eを示す。底面は平坦であり、北辺と西辺の壁は垂直に立ち上る。埋土は暗褐色粘質土である。

## S K 8

S K 8はS K 6の北1.6mに位置し、規模は1.4×1.14mの楕円形である。深さは8cmときわめて浅く、皿状を呈する。底面は平坦であり、長軸方向はN-63°-Wを示す。埋土は暗褐色粘質土である。

## S K 9

S K 9はS K 8の北東1.1mに位置し、S K 6～8と類似した配置を示す。規模は1.38×1.22mの不整形であり、深さは6cmとやはり浅く、皿状を呈する。長軸方向はN-14°-Eを示し、底面も不整形であり、北壁はきわめて緩やかに広がる。埋土は暗褐色粘質土である。

## S K 10

S K 10はS K 8の北2.2mに位置し、西辺は土塁裾部にかかっている。規模は1.5×1.39mの不整形であり、深さは10cmと浅く、皿状を呈する。長軸方向はN-22°-Eを示し、底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がるが、西壁は特に緩やかである。埋土は黄褐色粘質土である。

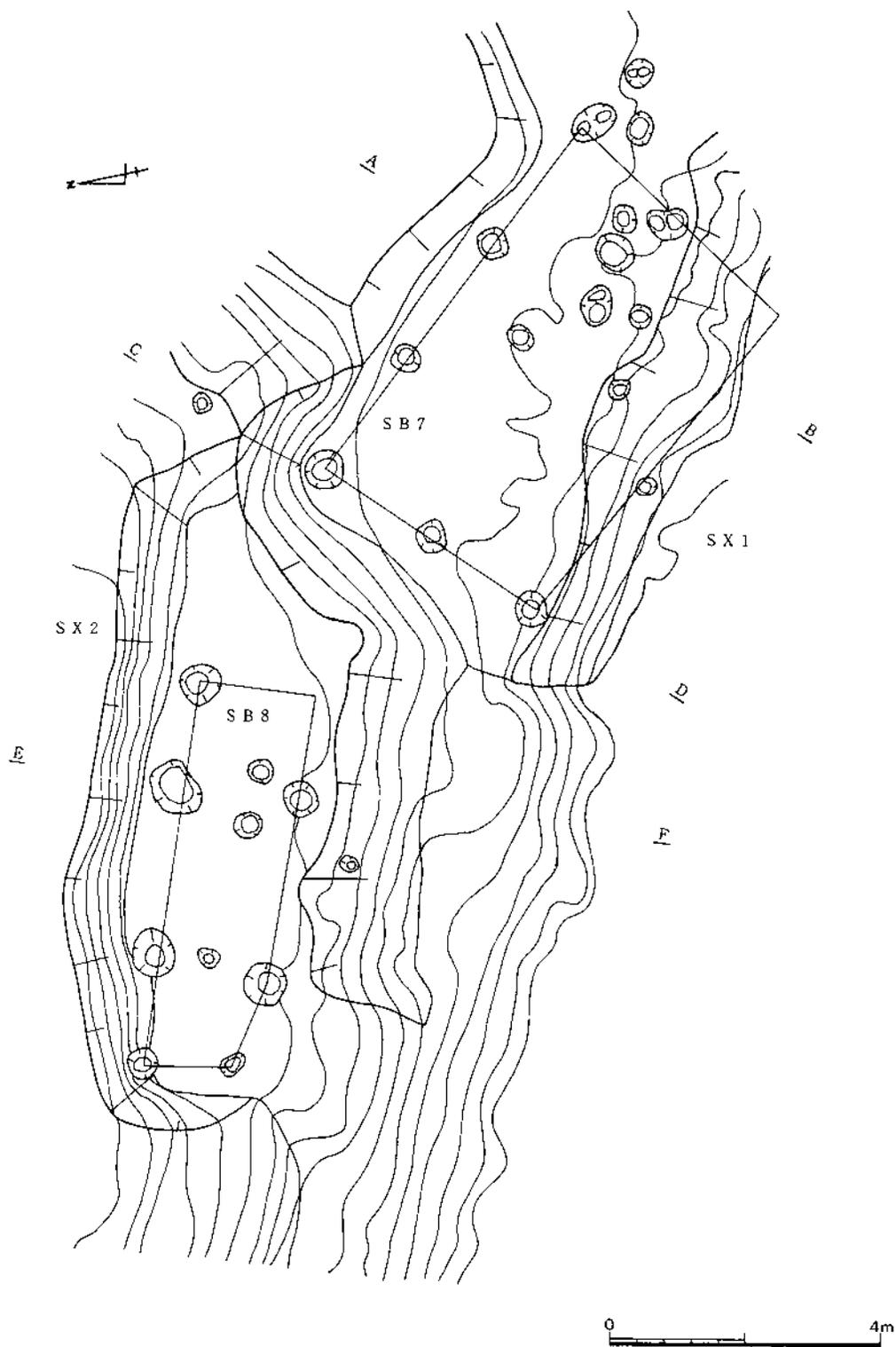


Fig. 26 SX 1·2 平面图

## 5. 段状・通路遺構

### 1) 2郭

#### S X 1 (段状遺構)

S X 1は2郭の北西部に位置し、3郭S X 2及び3郭小段部に接している。規模は、東辺の削り込みが6.5m、北辺の削り込みが4.3m、南部では2.6mを測る台形状であり、西辺は斜面となる。北辺はS X 2の平坦面から約1mの比高差をもち、東辺は3郭小段部から約20cmの比高差である。調査前はすべて盛土により整地されており、3郭及び3郭小段部となっていた。盛土は層序で述べたとおり12層であり、焼土の存在及び8層以下の土層により2分される。S X 1には掘立柱建物跡S B 7が存在するが、北辺及び東辺の柱穴は壁際に位置しており、3郭面と同レベルの上屋が想定される。また、西辺は斜面部に張り出していることから、盛土により平坦面を造り出していたと考えられる。出土遺物には図示したもので青磁5点、白磁2点、備前1点、その他青磁片が19点みられ、その大半は2～4層からの出土である。

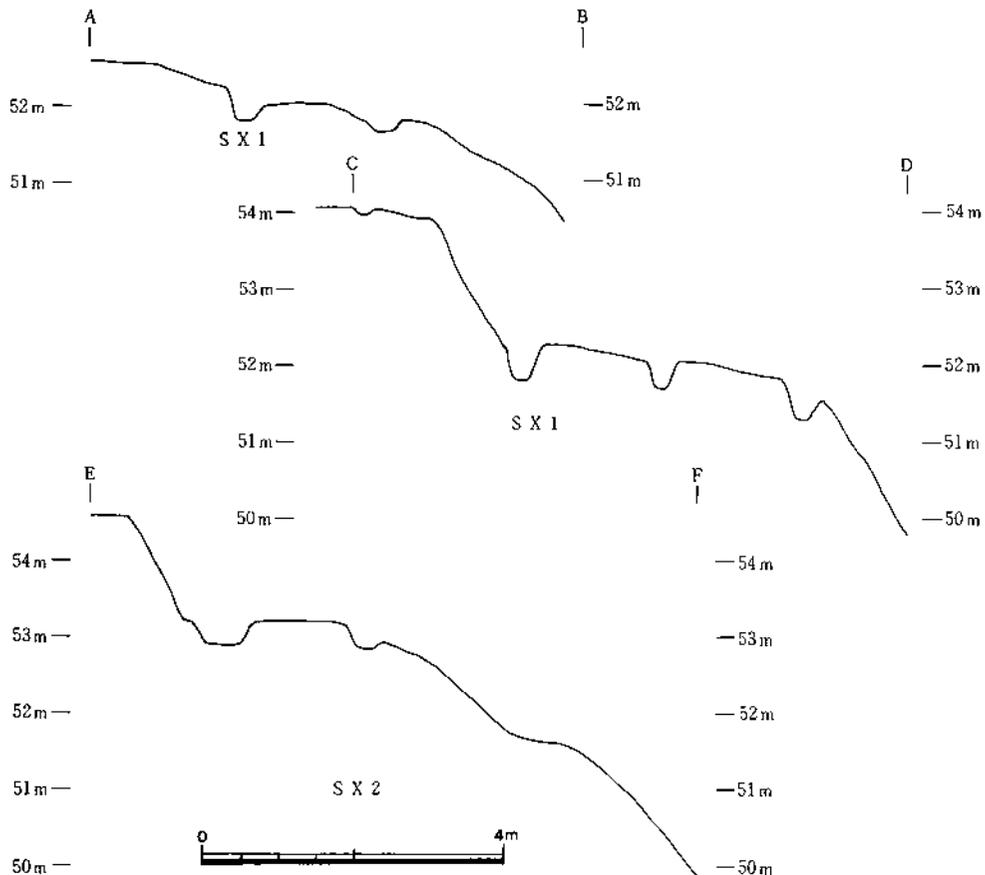


Fig. 27 S X 1・2 断面図

## 2) 3郭

### S X 2 (段状遺構)

S X 2は3郭の南西端部を削り込んでおり、西辺は斜面、南辺はS X 1へと落ち込んでいる。規模は東辺が9.3m、北辺2.4m、南辺の一部1.6mが削られており、3郭面からの比高差は約1.2mを測る。S X 1同様3郭面まですべて盛土により整地されており、盛土の土層は8層に分層され、7層の炭化物面がS X 2の機能した面とみられる。掘立柱建物跡S B 8が位置するが、やはり東壁際に柱穴が存在しており、3郭面からみればS B 7と同じく上部へは突出しない建物であったと考えられる。図示した出土遺物には、土師質土器1点、青磁9点、白磁2点、備前3点、その他青磁片19点と備前の胴部片がみられ、やはり4層を中心として出土している。

### S X 3 (通路遺構)

S X 3は堀切1の底面から西斜面へ延びる通路遺構であり、斜面傾斜が緩斜面に変化する部分に造られている。全長は約27m、幅約0.5mを測る。堀切1の底面では標高48.3mであるが、除々に高度を下げ、南端部では標高46.5mと約1.8mの比高差がみられる。中央部より南端部にかけては通路西端から斜面部がやや溝状に深くなり、南端部ではさらに下方へと落ち込むが、通路自体は自然消滅する。通路部分は一部岩盤を削り込んで造り出しており、他の部分は黄褐色地山土を堅く締めている。S X 3から下方の緩斜面部には遺構は存在せず、表土下の黄色地山土が若干堆積しているのみであった。図示した出土遺物は、土師質土器2点、青磁8点、白磁1点、備前7点であり、他に青磁片17点が出土している。

## 6. 溝 跡

### S D 1

S D 1は1郭の東斜面の下方、標高46m前後に位置する。S D 1の南側に小尾根に続く緩斜面が存在しており、S D 1はこれを掘り切る横堀の北端部と考えられ調査区外へと延びている。1郭側の斜面は約1mほどの垂直に近い壁であり、幅は上端部2.8m、底部1.9mを測る。深さは南壁のセクションで見れば約40cmと浅いが、水平に延びるとすれば、最深部は1m前後を測ると考えられる。埋土は表土下の黄褐色粘質土であり、岩盤礫等の混在はなく、一括埋土であり、遺物の出土はなかった。

## 7. 堀 切

### 堀切1

堀切1は3郭と4郭の間に堀られた扇城跡最大の堀切である。底部の標高は48.3mを測り、比高差は3郭から7.7m、4郭からは2.14mである。3郭と4郭の間は約14.3m、断面台形をなす底部の幅は約2.2mであり、3郭側がきわめて急斜面となる。東斜面部は標高43mラインまで掘り込みがみられ、底部は4郭側が急斜面をなすV字状に近い形状となる。西斜面側は山道が通っており崩されているが、標高46.2m付近が堀切端部と考えられる。底部の埋土は厚さ35cmと浅く、斜面からの崩壊土であるが、東斜面部は厚くなり、1.25mを測る。上層はやはり

崩壊土である黄褐色混礫土が75cm、下層には暗褐色粘質土の堆積が50cmみられる。

#### 堀切 2

堀切 2 は 4 郭と 5 郭間の堀切である。4 郭と 5 郭の間は約5.4m、底部の幅は約3.2mを測り、底部との比高は 4 郭側1.23m、5 郭側は1.48mと浅い。東西斜面ともに幅3.5mで掘り切られており、断面は台形を呈する。東斜面は標高約42m、西斜面は標高45mまで確認されている。東西斜面部の底面斜傾は60°前後を測り、堀切 1 の東斜面部同様きわめて急斜面となっている。埋土は浅く、底部50cmを測る。やはり、上層には地山崩壊土が若干みられ、下層には黄褐色粘質土がみられるが、遺物の出土はなかった。

#### 堀切 3 a・b

堀切 3 は 5 郭と 6 郭の間に存在する鞍部に位置し、最低部の堀切 3 a と 6 郭斜面下の堀切 3 b の 2 条からなる。堀切 3 a は谷部からの山道によりかなり破壊されており、わずかに東斜面の掘り込みが残されていた。底部の標高は45.62mを測り、下端は標高44.4mまで確認された。上端の幅は約2.8m、底部幅は約0.5mと狭い堀切である。埋土はほとんどなく、若干の表土が存在するのみであり、出土遺物もみられなかった。

堀切 3 b は、鞍部から 6 郭へと続く小尾根の中腹に位置し、西斜面及び南斜面へと掘り込まれている。底部の掘り込みはほとんどなく、調査前の状態から幅3.5m、深さ0.5mの落ち込みがみられた。西斜面部は南壁側を強く掘り込んでおり、北壁側は緩やかに自然地形の斜面に開く浅いV字状を呈し、標高42.5mまで延びている。幅は4～5.5mであり、埋土は若干の表土のみである。南斜面側は、標高46m付近を通る山道にかかっており、下半部は埋められていた。東西壁ともに1m前後掘り込んでおり、断面形はU字状を呈する。上端部の幅は3.2～4.35m、底部は2.6～1.3mを測り、下方は標高44mまで延び、狭くなっている。埋土は山道部分を除き、若干の表土のみである。

#### 堀切 4

堀切 4 は 6 郭と北へ延びる 8 郭の間に位置する堀切である。調査前の状況においても幅約3m、深さ約0.5mの落ち込みが存在しており、東西斜面側へも浅く続いていた。調査の結果、南壁（6郭側）は強く削り込んでいるが、北壁（8郭側）は緩やかに自然地形へと開いていた。底部の幅は約1.5mを測り、東斜面では標高44m、西斜面では標高45mまで確認された。埋土は表土のみであり、出土遺物はみられなかった。

#### 堀切 5

堀切 5 は 6 郭と 7 郭の間に位置する。西壁（6郭斜面側）は強く削り込まれているが、東壁（7郭側）は中央部に土橋状の小平担面を残し、南北斜面側へと掘り込まれている。北斜面では上端幅約3m、底部2.5mを測り、標高45mまで延びる。南斜面の上端幅は3.3～2.3mを測り、標高44mまで延びており、下方がやや狭くなる。中央の土橋部は標高47m、幅約1.2mを測り、堀切底部からの比高は25～50cmである。土橋部の形状は不整形であり、北斜面側に緩やかに下る。7郭側には直径30～40cm、深さ20～30cmを測る楕円形の柱穴が5個検出されている。出土遺物には瀬戸（Fig. 31-67・68）と刀子（Fig. 35-118）がみられる。

## V 出土遺物

扇城跡における出土遺物には、土師質土器、瓦質土器、輸入陶磁器として青磁、白磁、染付、国産陶器では備前、瀬戸、東播系がみられる。他に土製品としては、土錘、羽口、金属製品には刀子、火箸、鉄釘、呼子、飾金具、渡来銭、石製品では砥石、礎石が出土している。

土師質土器は、377点と量的には最も多いが大半は細片であり、磨耗している。瓦質土器は2点と少量であり、やはり磨耗が激しい。輸入陶磁器では、青磁が264点と圧倒的な量を占めており、白磁は13点、染付は9点と非常に少量である。国産陶器には、やはり備前が304点と多く、大甕片が大半を占めている。瀬戸には梅瓶、おろし皿の2種がみられるが、4点と数少ない。また、瀬戸・美濃系の天目茶碗片1点、東播系捏鉢1点、須恵質土器1点も出土している。

出土地点としては、2・3・6郭が中心であり、特に2郭中央部、6郭の南西部の盛土中に多く出土している。またS X 1・2の盛土中及び3郭の西斜面からの出土もやや多くみられた。以下に図示した遺物を中心に述べる。

### 1. 土師質土器

土師質土器は細片が多く、図示したものは小皿2点、杯4点、鍋3点、捏鉢1点である。1・2は小皿であり、底部は回転糸切りであるが、2は板目の圧痕を残す。3～6は杯であり、3・4は底部回転糸切り、内面にロクロ目を残す。5・6は磨耗が激しく、調整は不明である。98は釜、101・102は鍋であり、98は直立する口縁部から球形に近い胴部をもつとみられる。頸部に若干の突帯が存在する。101・102は強く張る胴部をもち、口縁下に鐙を有する。102では口縁を拡幅し、突帯状をなす。胴部には左下りの斜行タタキ目がみられる。100は捏鉢の口縁部あり、やや上方に拡幅し、端面は丸味を帯る。

### 2. 青磁

7～18は皿、19～51は碗、52は盤、53は壺である。皿は、口縁内湾タイプ(7・8)、口縁外湾タイプ(9～13)、稜花皿(14～18)の3タイプが存在する。7は口縁下外面に若干の稜をもち、内外面ともにきわめて浅い沈線がみられる。8の口縁部は若干外反する。9～11は口縁部のみであり、小さく外反する。12・13は外面に蓮弁文をもち、口縁は強く外反し水平となる。12は半個体に近く、外面体部にきわめて浅い線描蓮弁文がみられる。内面見込みは輪状釉剥ぎであり、露胎部表面はきわめて平滑である。外底面は髹付まで施釉され、高台内は露胎である。13の外面には浅い片切彫の蓮弁文がみられ、釉調は貫入もなく良好である。14～16は稜花皿の口縁部であり、内面に割花文が施され口縁は輪花をなす。17・18は底部であり、高台

外面まで施釉、高台内は露胎である。髷付は外半部を削り、一部に釉がかかる。14は焼けており、釉は淡黄色となっている。19～37は無文の碗である。19を除き内湾気味の体部から口縁は小さく外反し、やや肥厚する。38は外面無文であるが、内面に非常に浅く、不明瞭な線描蓮弁文がみられる。39・40は蓮弁文の碗である。39は浅い線描蓮弁文であるが、剣頭は丸く連続して描く。40は非常に浅い片切彫りによる幅広の蓮弁文である。41～44は口縁部が小さく外反し、外面に浅い線描及び片切彫りによる草花状の文様が施される。45は雷文帯をもつ碗であるが、かなり崩れており、内面には草花状の文様がみられる。46～51は底部であり、50は皿、その他は碗である。46は高台外面まで施釉、高台内面は露胎であり、髷付は外半部を削る。47は高台外面まで施釉され、髷付から高台内部は露胎であるが一部には内面にも釉がかかる。48は高台内まで施釉され、外底面は輪状釉剥ぎである。釉は厚く貫入がみられるが良好である。49は高台外面まで施釉、髷付から高台内は露胎である。50は全面施釉の後、外底面を輪状釉剥ぎであり、見込みには浅い印花文がみられる。51も全面施釉に外底面輪状釉剥ぎであり、見込みは不明瞭な印花文である。52は盤口縁部であり、口縁は上方に拡幅する。体部内面には浅い丸彫りの菊花文が施される。53は壺の底部と考えられ、内面は無釉、外面は全面施釉に髷付のみ釉剥ぎである。

### 3. 白 磁

54～59は皿、60・61は碗である。54～57は口縁部内湾タイプであり、体部外面上半まで施釉される。58は約半個体の皿であり、口縁部はやはり内湾する。施釉は体部の下端から底部が露胎である。高台は割高台であり、髷付には釉の付着がみられ、高台脇を削る。59は底部であり、体部上半から一部高台脇まで施釉され、高台脇と髷付外半部を削る。60は内湾気味の体部から口縁は外反し、外面下端近くまで施釉される。外面には浅い指頭痕状の文様がみられる。61は玉縁口縁をもつ碗であり、外面下半は露胎である。58の皿は1郭F20のP1から出土している。

### 4. 染 付

63・64は外反する皿の口縁、66は内湾する口縁である。63の内面は熱により劣化しており、文様は不明であるが、外面には唐草文とみられる文様が施される。64は口縁内面に1条の界線、外面は唐草文がみられる。66は口縁の内外面に1条の界線を巡らせるが、外面の文様は小片のため不明である。

### 5. 瀬戸・美濃系

67は瀬戸の梅瓶口縁部であり、灰釉がかかるが剥落している。68も灰釉の底部であり、67と同地点から出土しているので梅瓶の底部と考えられる。また、図示できなかったが肩部とみられる破片も1点出土しており、浅い沈線が1条巡っている。69はおろし皿であり、底部は回転糸切り、口縁部はナデにより凹む面をなす。また、図示しえなかったが天目茶碗片が1点出土

している。

## 6. 備 前

70～79は搦鉢である。72は7条の搦目をもち、口縁部は拡幅せず面をなすものである。70は口縁部が斜上方に拡張するが、口縁下の突出はわずかであり、4条の搦目が確認される。71・73は口縁部が上方に拡幅し、口縁下の突出はやや強い。71は口縁下の突出が強く、8条の搦目がみられる。74は口縁部が上方に大きく拡張し、端部は丸くおさめる。口縁下の突出は大きく、7条の搦目がみられる。76も口縁部が上方に拡張し、端部は丸くおさめる。口縁下の突出は垂下し、2条の搦目が確認される。内面にはロクロ目がみられる。75はさらに口縁部を上方に拡張し、外面には2条の浅い凹線が巡る。端部は外方が稜をなし、内方へ丸くおさめる。73・74の体部は明淡赤色、その他は暗赤褐色から黒赤褐色の発色である。77～79は底部であり、77は7条、78は9条、79はやや太い8条の搦目がみられる。77・79は明淡赤色に発色する。80～84は壺とみられ、80は3条の櫛描波状文と5条の櫛描文をもつ肩部である。81・83は直立する口縁部であり、端部は外面に肥厚する。82は小さく外反し玉縁状をなす。84は肩部であり、ヘラ描沈線による波状文がみられる。85～94は大甕である。88・89は底部、85～87・90～93は口縁部であり、玉縁をなす。94は玉縁口縁であり、口縁部と肩部・胴部は直接接合しないが、胎土、色調等からみれば同一個体と考えられる。93・94の玉縁は丸くおさめており、他は偏平に垂下した玉縁口縁である。96は小物の底部であり、回転糸切りである。

## 7. 東播系・瓦質土器その他

95は東播系の搦鉢であり、口縁部は内湾気味に拡張し、口縁下外面は突出する。端面はやや張り出し、暗青灰色を呈する。97・99は瓦質土器である。97は小さく外反する鍋の口縁であり、99は口縁端部を備前搦鉢状に拡張するものである。なお、62・65は伊万里の紅皿と染付碗であり、3郭と西斜面からの出土である。

## 8. 土製品

103はふいごの羽口であり、一部は破損するが他の一端は原形を保っている。104～117は土錘であり、すべて紡錘形である。重量は、平均3.6gを測るが破損していることを考えれば4～5gであろう。

## 9. 金属製品

118は、堀切5から出土した刀子であり、3個に折れ刃部のみである。119は火箸と考えられ、3郭より出土している。120～128は鉄釘である。断面四角形の角釘であり、頭はL字状に折られている。125・127は3郭の柱穴から出土している。129は青銅製の呼子である。本体は楕円形を呈し、吹口は下面が平坦な半楕円形である。上面には切込みが存在し、内部に小突起がみ

られる。基部は1.8cmの棒状の柄部となり、端部は直径2mmの横方向の環となっている。本体には1条、柄部には3条の突帯が装飾として付いており、上下を接合し成形している。2郭F12のベルト2層中より出土している。130は青銅製の飾金具であり、やや楕円形の凸形に鶴の透彫としている。渡来銭は16枚出土している。銭種は開元通寶から洪武通寶の11種であるが、皇宋通寶が3枚、祥符元寶と熙寧元寶は2枚、他は各1枚であり、不明の破片が1枚である。遺構からは、皇宋通寶(144)と洪武通寶(150)が6郭の柱穴から出土している。また、2・3郭の表土中から寛永通寶が2枚出土している。

## 10. 石製品

当城跡出土の石製品は、131～133の3点の砥石のみと数少なかった。131・133は方形の砥石であり、131は4面、133は3面が砥面としてよく使用されている。132は熱により赤化し割れており、砥面は1面のみである。133は6郭のS A 5・P 1から出土しており、131は2郭S X 1、132は1郭からの出土である。また、134・135は礎石とみられる礫であり、2個ともに上面に平坦面をもち、熱により赤化している。2郭の西辺近くからの出土であるが、岩盤上からやや浮いた状態で検出されており、2次的に移動していると考えられる。

## VI まとめ

高知県においては、近年中世城跡の調査が増加しており、調査の結果新しい事実が判明している。今回行われた扇城跡の発掘調査においても、調査対象地全域の調査を実施することにより、城跡の構造を解明するとともに、扇城跡を中心とする歴史的背景をもとに土佐における戦国時代の一端を明らかとする資料を蓄積することができたと考える。以下に遺構、遺物をまとめ、若干の考察を試みてみたい。

### 1. 遺 構

扇城跡の曲輪については、先に述べたように1～3・6・7郭の5ヶ所が確認された。各曲輪は南北方向の尾根上に連続しており、堀切3の位置する鞍部により南部（A区）の1～3郭と北部（B区）の6・7郭に分かれる。1～3は連続する一連の曲輪であり、1郭南端の比高差約5mの急斜面と3郭北面の堀切1により隔されている。1～3郭の北に存在する4郭は、植林により削平されているが、堀切1と堀切2により隔されていることからみれば曲輪として機能していたものと考えられる。堀切2と鞍部の間には自然地形の頂部である5郭が存在する。5郭は1～3郭及び6郭を見通すには絶好の位置であり、曲輪としての築造は行われていないが見張り所等の一定の機能を有していた可能性が強い。6郭は南を堀切3、北面は北へ延びる尾根（自然地形である8郭）を堀切4、東は堀切5により7郭から隔てられた単独の曲輪である。7郭は東のナリカド城跡に続く曲輪であり、堀切5には土橋が存在していることから、7郭は6郭に付属する曲輪と考えられる。

各曲輪の斜面は急傾斜であるが、1郭の南斜面、1～3郭の東斜面、6郭の周囲の斜面は特に傾斜が強く、堀切による斜面とともに曲輪の防禦を強化するために築造された斜面と思われる。曲輪の規模は6郭が810㎡と最大であり、以下3郭363㎡、7郭187㎡、1郭185㎡、2郭144㎡と、やはり6郭と3郭が中心である。4郭は280㎡であり大きいですが、削平を考えれば当初の面積は2郭と同程度であったと考えられる。

遺構 \ 曲輪	1郭	2郭	3郭	6郭	7郭
掘立柱建物跡	4	3	4	3	0
柵 列	2	1	0	5	0
土 坑	0	0	2	8	0
溝 跡	1	0	0	0	0
段状遺構	0	1	1	0	0
通路状遺構	0	0	1	0	0
柱 穴	41	34	90	98	5

Tab. 2 遺構配置表

積は2郭と同程度であったと考えられる。

検出された遺構は、掘立柱建物跡14棟、柵列8列、土坑10基、溝跡1条、段状遺構2基、通路状遺構1条である。各曲輪の遺構検出状況は左表のとおりであるが、中心となる3・6郭以外では1・2郭に掘立柱建物が多く、柵列も3列が存在している。柱穴数も3・6郭は100個弱と多く、1・2郭は40個前後である。土坑は6郭に集中しており、他は3郭に2基検出されているのみである。特徴的な遺構としては、2・3郭の西辺に段状遺構SX1・2が確認された。SX1・2には掘立柱建物跡SB7・8が

存在しており、特異な形態をもつものと思われる。また、堀切1の底部から3郭の西斜面にかけて延びる通路状遺構は、山裾部から城跡へと至るルートを想定する資料として注目される。各遺構の配置の中では、6郭のSB12が2×5間と最大であり、次いで3郭のSB11が2×3間と柱穴の配置もしっかりしており、中心となる建物と考えられる。他の掘立柱建物跡は1×1間～2×3間と小規模であり、柱穴の規模、配置も不明瞭なことからみて、その性格としては倉庫等ではないかと思われる。SB7・8は段状遺構SX1・2に位置しており、段状の高さ約1.5～1.8mからすれば、その上屋は2・3郭面とほぼ同レベルかやや上に出る程度であり、段状の平場に隠すように建てられていたものであろう。建物跡としては掘立柱建物跡以外にも礎石が2個出土しており、2次的に移動しているものの礎石建物が存在していたと考えられる。さらに礎石が焼けていることと、SX1・2の埋土下層に焼土、炭化物層が検出されていることからみれば、掘立柱建物が存在する時期とその後に礎石建物が存在した2時期が考えられる。礎石建物の時期が、一条兼定が長宗我部氏と対峙し、栗本城に陣を張った天正3年(1575)とすれば、その戦火を受けた痕跡を示しているのではないだろうか。柵列は6郭に集中しているが、その配置は南部にSA4が1列、北部には連続的にSA5～8の4列が位置している。いずれも中央部に並んでおり、南北に長い6郭を東西に2分しているようである。土坑もやはり6郭にSK3～10の8基が集中しており、中央部から南部にかけて散在している。形態は円形から楕円形をなし、深さは浅く性格は不明であるが、場合によっては植林等における木根痕の可能性も否定できない。6郭の南西部は盛土により築造されているが、盛土中からは備前大

番号	計測値 規模(間)	梁間×桁行(m)	面積(m <sup>2</sup> )	棟方向(G・N)	郭
SB1	1×3	1.7×6.4	10.88	N-0° (南北)	1郭
SB2	1×2	3.3×6.6	21.78	N-7°-E(南北)	〃
SB3	1×1	1.7×1.8	3.06	N-2°-E(南北)	〃
SB4	2×2	3.5×4.3	15.05	N-71°-E(東西)	〃
SB5	1×3	3.7×6.2	22.94	N-23°-W(南北)	2郭
SB6	1×1	1.2×1.8	2.16	N-68°-E(南北)	〃
SB7	2×3	3.6×6.5	23.40	N-40°-W(南北)	2郭(SX1)
SB8	1×3	1.8×5.8	10.44	N-71°-W(東西)	3郭(SX2)
SB9	1×1	1.6×3.0	4.8	N-16°-W(南北)	3郭
SB10	1×2	1.6×4.8	7.68	N-18°-W(〃)	〃
SB11	2×3	4.3×6.5	27.95	N-20°-W(〃)	〃
SB12	2×5	4.4×14.4	63.36	N-3°-E(〃)	6郭
SB13	1×3	2.6×6.8	17.68	N-1°-W(〃)	〃
SB14	2×3	4.3×5.3	22.79	N-62°-W(東西)	〃

Tab. 3 掘立柱建物跡計測表

甍、羽口等の出土遺物がみられ、SA4により区画された作業場等の機能が考えられる。

以上のような曲輪の構造、遺構の配置からみれば、3郭を中心とする南部の曲輪と6郭を中心とする北部の曲輪からなる連郭式の構造をもつことが確認された。さらに南の尾根上に位置する栗本城跡及び7郭の東に続くナリカド城跡との関係からは、同丘陵の尾根上に連なる一連の連立式の城跡とみることで

きるであろう。

さて、県内の中世城跡の調査結果からみれば、礎石建物跡は発見されず掘立柱建物跡のみの城跡としては栗本城跡（中村市）<sup>(4.1)</sup>、芳原城跡<sup>(4.2)</sup>、吉良城跡（春野町）<sup>(4.3)</sup>、和田城跡（袴原町）<sup>(4.4)</sup>が存在するが、他に一部の調査であり確定はしないが塩塚城跡、中村城跡（中村市）の中で今城部分に掘立柱建物跡がみられる。また、礎石建物跡（礎石のみも含む）を検出した城跡としては波川城跡（伊野町）<sup>(4.6)</sup>、久礼城跡（中土佐町）<sup>(4.7)</sup>、岡豊城跡（南国市）<sup>(4.8)</sup>、中村城跡<sup>(4.9)</sup>の存在が知られている。岡豊城跡は長宗我部氏の居城であり、掘立柱建物跡とともに瓦葺きの礎石建物群が検出されている。中村城跡においてもやはり詰に瓦葺き礎石建物跡の存在が指摘されており、長宗我部氏の幡多進出に伴い構築されたものと考えられる。また、16世紀後半に廃城となった波川城跡、久礼城跡では瓦類の出土はみられないが、礎石建物跡の存在は明確であり、中村城跡、岡豊城跡からみても16世紀後半には長宗我部氏が関連する城跡では礎石建物の存在が一般化していたものと思われる。掘立柱建物跡だけの城跡では、出土遺物からみれば15世紀末から16世紀前半を中心とする時期が考えられ、当然ながら掘立柱建物から礎石建物への変化を知ることができる。16世紀前半までの在地有力国人層及びそこから発展した土佐の七守護と称せられる本山、山田、安芸、吉良、大平、津野、長宗我部氏等の掘立柱建物と土塁、掘切による中世的築城から、16世紀後半の長宗我部氏による土佐一国の制定、さらには四国の制覇の過程における礎石建物の出現、これに加えて瓦葺き建物の存在が岡豊城跡、中村城跡、浦戸城跡<sup>(4.10)</sup>で確認されており、より近世城郭成立に向けての変遷を知ることができ

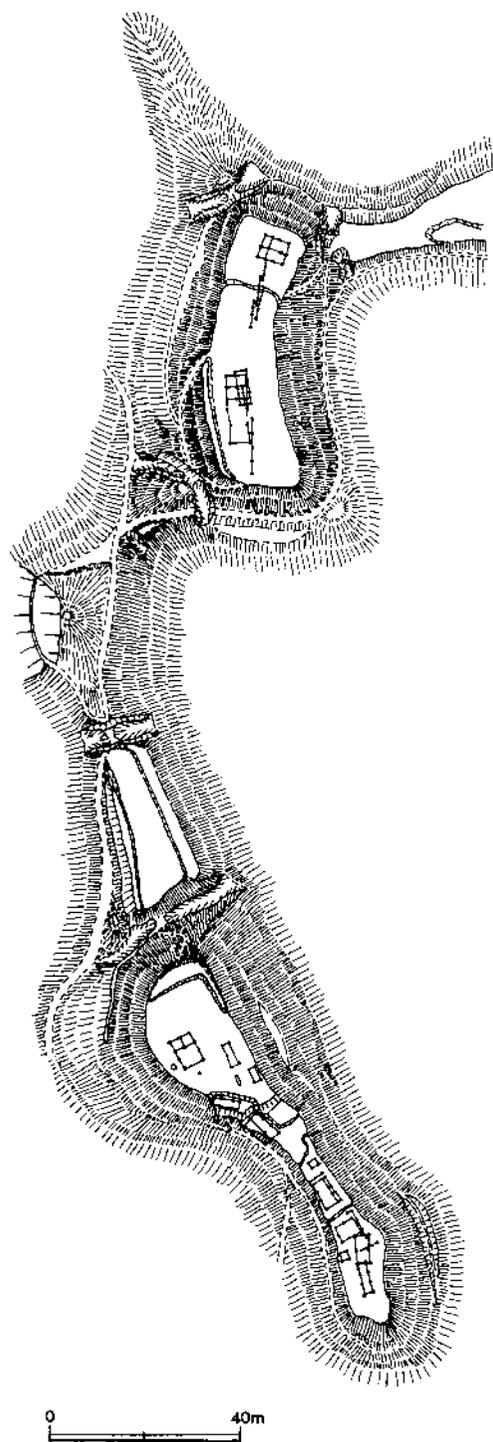


Fig. 28 扇城跡縄張図

よう。また、岡豊城跡における土塁内側の石積み、そして中村城跡における基壇状地形両側の石垣、浦戸城跡の石垣と天守台の存在は、城内における恒常的な建物の構造と相まって、より強固な築城を目指した技術の導入が図られたものと考えられる。

扇城跡における掘立柱建物跡及び柱穴は、栗本城跡における状況に類似しており、出土遺物からみても15世紀～16世紀前半の時期を中心とすると考えられ、一連の連立式の城跡であることが確認される。しかしながら、焼けた礎石及び染付の出土からみれば16世紀後半にも機能した可能性があり、一条兼定が長宗我部勢と四万十川を挟んで対峙し、合戦に及んだ時に栗本城に陣を張ったとすれば、尾根続きである扇城跡への布陣も十分に考えられる。

## 2. 遺物

扇城跡で出土した遺物には、土師質土器、瓦質土器、青磁、白磁、染付、備前、瀬戸、東播系の土器、土錘、羽口の土製品、刀子、火箸、鉄釘、呼子、飾金具、渡来銭の金属製品、石製品では砥石、礎石等がみられる。以下に各遺物ごとにまとめてみたい。

土師質土器は377点が出土しているが、ほとんどが細片である。小皿、杯の破片が大半であり、釜、鍋、捏鉢が若干存在する。小皿、杯は、磨耗が激しいが、その大半は底部回転糸切りと考えられ、ロクロ成形されたものである。内面には一部ロクロ目も残されている。胎土は精選されており、黄橙色を呈する。中村城跡、栗本城跡において出土した土師質土器も同様であり、岡豊城跡等県中央部の土師質土器との違いがみられ、幡多地域で独自の土師質土器生産が行われていたとも考えられる。鍋は口縁下に小さな鐙を有し、体部には斜行する叩目をもつものである。田村遺跡群<sup>(11)</sup>、芳原城跡等でまとまった量が出土しており、県下一円にみられる。時期的には15世紀後半～16世紀前半の鍋の主流を占めるものであり、扇城跡の機能した主たる時期と

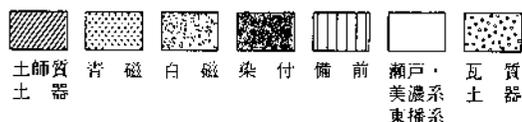
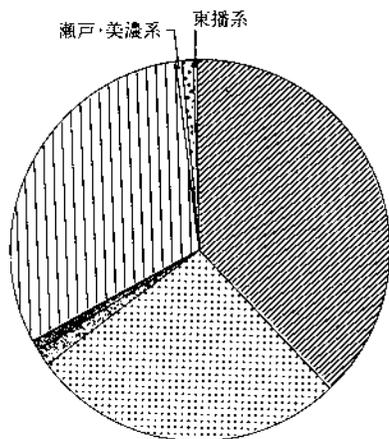


Fig. 29 遺物種別出土量図

して取えられる。釜は口縁部1点のみであるが、球形の体部をもち最大径に鐙を有するものとみられ、16世紀前半の遺物と考えられる。瓦質土器は少なく鍋と捏鉢の2点のみであり、煮沸調理形態は土師質土器が中心となっている。

輸入陶磁器は286点あり、青磁264点、白磁13点、染付9点と青磁が圧倒的多数を占めている。青磁は皿が46点、碗214点、盤3点、壺1点であり、碗が約80%を占めている。皿は口縁内湾のものが若干あるが、大半は口縁が外反するタイプであり、体部外面に連弁文を施すものもみられる。稜花皿は皿の約20%を占めている。碗の大半は内外面とも無文であり、口縁部はやや肥厚

出土地点 種別	1郭	2郭	3郭	6郭	7郭	S X 1	S X 2	3郭西斜面	堀切3b	表 採	計
青磁 皿	2 (1)	6	11 (3)	6 (2)	0	8 (2)	6 (1)	6 (3)	1	0	46
青磁 碗	9 (3)	53 (6)	52 (5)	26 (4)	2	18 (3)	23 (7)	16 (3)	6	9 (2)	214
青磁その他	0	0	0	1	0	0	1 (1)	2 (1)	0	0	4
白 磁	3 (2)	1 (1)	2 (1)	2	0	2 (1)	1 (2)	1 (1)	0	0	13
染 付	1	2 (2)	5 (1)	0	0	0	0	0	0	1	9
計	15	62	70	35	2	28	32	25	7	10	286

※ ( ) は図版遺物数

Tab. 4 輸入陶磁器出土表

し、小さく外反する。文様をもつものとしては、線描きまたは非常に浅い片切彫りによる連弁文、草花文、そして電文帯が出土している。底部には見込みに浅い印花文が施されるものがみられ、外面施釉で高台内露胎のものと同高台内面まで施釉後、輪状の釉割ぎが行われたものが存在する。盤は内面に丸彫りの菊花文が施され、灰オリーブ色の良好な発色である。白磁は13点と少なく、その大半は内湾する皿であり、体部下半まで施釉されている。底部は2点のみであるが、内1点はアーチ状に削る割高台であり、見込みに重ね焼きの跡がみられる。碗の内1点は玉縁状口縁であり、13～14世紀と他の白磁に比して古い。染付は9点と少ないが、16世紀後半にも扇城跡が機能していたことを示しているものであろう。

国産陶器としては、瀬戸・美濃系、備前、東播系が出土しているが、瀬戸は梅瓶とおろし皿であり、梅瓶は14世紀と古い。備前は搦鉢、大甕、壺であるが、搦鉢は1点のみⅢ期であり、他はⅣ期である。中でも搦目が細く、口縁部も大きく肥厚したものがみられ、やはり16世紀後半代と考えられる。大甕の口縁はすべて玉縁状であり、壺の口縁も小さく玉縁状をなしている。

以上のように出土遺物からみると、玉縁状口縁の白磁碗、瀬戸の梅碗、備前搦鉢Ⅲ期の存在からは13～14世紀の一時期を考えることができ、遺物量は少ないが、14世紀には扇城跡の原形が形造られていたのではないだろうか。次に遺物の大半は15世紀後半から16世紀前半に位置付けられ、この時期が扇城跡の機能した中心的時期である。一条氏の幡多下向を受けて、領国制への再編が行われ、戦国時代へ突入する中で扇城跡もその役割をはたしたものであろう。さらに景的には少ないが染付の出土により16世紀後半にも機能していた時期がみられ、前述のように一条氏と長宗我部氏の合戦のうちに栗本城跡同様に陣として使用されたと考えられる。

また、羽口の存在、3郭のS X 1・2埋土中の炭化物、焼土片からすれば、扇城跡においても一定の生産活動が行われていたものと考えられ、多数の柱穴の存在からみても戦時における砦のようなものではなく、恒常的な活動の拠点として扇城跡が機能していたのではないだろうか。

今回の調査では、開発対象範囲の中で曲輪を中心に堀切、斜面部の発掘を行い、出土遺物はやや少なかったが、城跡としての遺構をほぼ確認することができ、遺物の時期、組成から扇城跡の機能した時期についても一定の結果を得ることができた。その反面、栗本城跡からナリカ

ド城跡へと続く連立式の城跡であることを考えれば、その全体像を知るには不十分である。また、県内外における他の城跡の比較、検討も十分とはいえず、中世、戦国時代という時代背景を基に、扇城跡の歴史的な位置付けを進めることを今後の課題とするとともに、本報告が城跡研究の資料となれば幸いである。

- 註1. 木村剛朗他『栗本城跡』中村市教育委員会 1985
- 註2. 松田直規他『芳原城跡現地説明会資料』春野町教育委員会 1991
- 註3. 宅間一之他『吉良城跡Ⅰ』春野町教育委員会 1985
- 註4. 松田直則『和田城跡』椿原町教育委員会 1990
- 註5. 松田直則他『中村城跡』中村市教育委員会 1985
- 註6. 岡本健児『波川城跡の発掘』『土佐史談』137号 土佐史談会 1974
- 註7. 宅間一之他『久礼城跡』中土佐町教育委員会 1984年
- 註8. 森田尚宏・松田直則・岡本桂典『岡豊城跡』高知県教育委員会 1989
- 註9. 註5に同じ
- 註10. 1991年に確認調査が行われ、瓦類とともに鍔片が出土している。
- 註11. 松田直則他『田村遺跡群』第10分冊 高知県教育委員会 1986

Tab. 5 出土土器法量表1 (( )は復元及び残存値)

挿図 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	外 面 内面(断面)	出土地点 層 位
			口径	器高	底径	高台高			
1	土師質土器	小皿	(6.6)	1.3	(4.0)	—	橙色 5YR 7/6	3郭西斜面	
							〃	2層	
2	〃	〃	(6.8)	1.7	(4.2)	---	橙色 5YR 6/6	6郭F15	
							〃	3層	
3	〃	杯	—	(1.7)	(5.6)	---	にぶい橙色 5YR 7/4	3郭SX2	
							にぶい橙色 5YR 6/4	4層	
4	〃	〃	—	(1.9)	5.4	---	浅黄橙色 10YR 8/4	3郭D・E9	
							にぶい黄橙色 10YR 7/4	1層	
5	〃	〃	(9.4)	3.9	(4.4)	---	橙色 5YR 7/6	3郭E2	
							〃	1層	
6	〃	〃	—	(2.5)	(6.2)	---	黄橙色 10YR 8/6	6郭F14	
							〃	1層	
7	青磁	皿	(9.6)	(2.2)	---	---	明緑灰色 7.5Y 7/1	6郭D5	
							(灰白色 7.5Y 7/1)	柱穴埋土	
8	〃	〃	(12.4)	(2.3)	—	---	緑灰色 7.5GY 6/1	3郭SX2	
							(灰白色 2.5GY 8/1)	2層	
9	〃	〃	(13.6)	(2.0)	---	---	オリーブ灰色 10Y 6/2	3郭西斜面	
							(灰白色 7.5Y 8/1)	2層	
10	〃	〃	(14.4)	(2.6)	---	---	オリーブ灰色 10Y 6/2	3郭C・D・E5	
							(灰白色 〃 7/1)	1層	
11	〃	〃	(13.0)	(3.3)	---	---	灰白色 10Y 7/2	3郭C・D・E5	
							(灰白色 10Y 8/0)	1層	
12	〃	〃	10.0 (10.8)	3.1	5.2	0.7	オリーブ灰色 10Y 5/2	6郭西斜面	
							〃	表採	
13	〃	〃	(12.4)	(3.0)	---	---	緑灰色 7.5GY 6/1	3郭西斜面	
							(灰白色 〃 8/0)	2層	
14	〃	〃	(12.4)	(2.8)	---	---	淡黄色 2.5Y 8/3	2郭SX1	
							(灰白色 2.5Y 8/1)	4層	
15	〃	〃	(11.6)	(2.4)	---	---	オリーブ灰色 10Y 5/2	3郭西斜面	
							(灰白色 5Y 7/1)	2層	
16	〃	〃	(12.6)	(2.8)	---	---	緑灰色 5GY 6/1	2郭SX1	
							(灰白色 〃 8/1)	4層	
17	〃	〃	—	(1.8)	(5.6)	0.5	緑灰色 7.5GY 6/1	1郭SB1	
							(灰白色 〃 7/0)	pit 1埋土	
18	〃	〃	—	(3.2)	(5.4)	0.5	オリーブ色 5Y 5/4	3郭E4	
							(灰白色 〃 8/1)	1層	
19	〃	碗	(13.4)	(4.2)	---	---	オリーブ灰色 10Y 5/2	6郭E3ベルト	
							(灰白色 〃 7/0)	1層	
20	〃	〃	(11.8)	(3.0)	---	---	オリーブ黄色 5Y 6/3	3郭F2	
							(灰白色 5Y 8/2)	1層	

Tab. 5 出土土器法量表 2

〔 ( ) は復元及び残存値〕

挿図 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	外面 内面(断面)	出土地点 層 位
			口径	器高	底径	高台高			
21	青磁	碗	(12.2)	(4.3)	—	—	明オリーブ灰色 5GY 7/1	A区	
							(灰白色 5Y 7/1)		表採
22	〃	〃	(12.8)	(2.6)	—	—	暗オリーブ色 5Y 4/3	2郭SX1	
							(灰白色 K 7/0)		4層
23	〃	〃	(12.6)	(3.3)	—	—	緑灰色 7.5GY 6/1	2郭SX1	
							(灰白色 Y 8/0)		5層
24	〃	〃	(14.0)	(4.2)	—	—	オリーブ灰色 10Y 6/2	2郭SX1	
							(灰白色 10Y 7/1)		4層
25	〃	〃	(14.0)	(5.0)	—	—	オリーブ灰色 10Y 4/2	3郭SX2, 4層	
							(灰白色 Y 7/0)		C・D・E51層
26	〃	〃	(13.7)	(3.3)	—	—	明緑灰色 7.5GY 7/1	2郭F10・E601	
							(灰白色 10Y 8/1)		3層
27	〃	〃	(13.4)	(3.7)	—	—	オリーブ灰色 5GY 6/1	6郭	
							(灰白色 N 7/0)		1層
28	〃	〃	(13.6)	(4.7)	—	—	明緑灰色 7.5GY 7/1	3郭SX2	
							(灰白色 10Y 8/1)		1層
29	〃	〃	(14.4)	(3.2)	—	—	オリーブ灰色 10Y 6/2	3郭	
							(灰白色 Y 7/0)		表採
30	〃	〃	(14.4)	(3.4)	—	—	明緑灰色 10GY 7/1	3郭西斜面	
							(灰白色 7.5GY 8/1)		2層
31	〃	〃	(13.8)	(4.2)	—	—	オリーブ黒色 10Y 3/2	1郭	
							(灰白色 N 7/0)		1層
32	〃	〃	(14.4)	(3.2)	—	—	オリーブ灰色 5GY 6/1	1郭	
							(灰白色 10Y 8/1)		1層
33	〃	〃	(15.0)	(2.2)	—	—	明緑灰色 7.5GY 7/1	2郭F10・E601	
							(灰白色 10Y 8/1)		3層
34	〃	〃	(15.0)	(3.0)	—	—	オリーブ灰色 10Y 5/2	2郭F・G12	
							(灰白色 7.5Y 7/1)		2層
35	〃	〃	(14.8)	(5.3)	—	—	灰オリーブ色 5Y 4/2	3郭SX2	
							( )		4層
36	〃	〃	(16.0)	(4.1)	—	—	オリーブ灰色 10Y 6/2	3郭F10	
							(灰白色 K 8/0)		1層
37	〃	〃	(20.0)	(4.3)	—	—	オリーブ灰色 10Y 6/2	3郭SX2	
							(灰白色 7.5Y 8/1)		2層
38	〃	〃	(12.8)	(3.2)	—	—	灰オリーブ色 7.5Y 4/2	2郭F・G12	
							(灰白色 Y 7/0)		4層
39	〃	〃	(13.2)	(4.2)	—	—	緑灰色 7.5GY 5/1	6郭	
							(灰白色 K 7/0)		1層
40	〃	〃	(13.8)	(5.3)	—	—	明緑灰色 10GY 7/1	3郭SX2	
							(灰白色 N 8/0)		4層

Tab. 5 出土土器法量表 3

〔( ) は復元及び残存値〕

挿図 番号	種 別	器 種	法 景 (cm)				色 調	外 面 内面(断面)	出土地点 層 位
			口径	器高	底径	高台高			
41	古磁	碗	(14.0)	(4.0)	—	—	オリーブ灰色 10Y 5/2 (灰白色 N 8/0)	1 郭 E 17 1 層	
42	〃	〃	(16.4)	(4.1)	—	—	オリーブ灰色 10Y 5/2 (灰白色 N 8/0)	3 郭 C 6 1 層	
43	〃	〃	(16.6)	(3.0)	—	—	オリーブ灰色 10Y 5/2 (灰白色 N 8/0)	6 郭 E 13 4 層	
44	〃	〃	(16.8)	(3.2)	—	—	オリーブ灰色 10Y 4/2 (灰白色 7.5Y 8/1)	3 郭 S X 2 4 層	
45	〃	〃	(17.0)	(3.8)	—	—	明緑灰色 7.5GY 7/1 (灰白色 Y 8/0)	3 郭 E 13 3 層	
46	〃	〃	—	(2.8)	(5.6)	0.8	灰白色 7.5GY 7/2 (灰白色 10Y 8/1)	2 郭 F・G 12 4 層	
47	〃	〃	—	(2.4)	(9.0)	0.6	オリーブ灰色 10Y 5/2 (灰白色 K 8/0)	3 郭 S X 2 2 層	
48	〃	〃	—	(3.8)	(7.0)	1.2	オリーブ灰色 10Y 4/2 (灰色 10Y 6/1)	A 区 表採	
49	〃	〃	—	(4.5)	(7.4)	1.0	オリーブ灰色 10Y 6/2 (灰白色 10Y 8/1)	3 郭西斜面 2 層	
50	〃	〃	—	(1.4)	(4.6)	0.6	緑灰色 5G 6/1 (灰白色 N 8/0)	3 郭 I 3 1 層	
51	〃	〃	—	(2.0)	(5.8)	0.7	明緑灰色 5G 7/1 (灰白色 K 8/0)	3 郭西斜面 2 層	
52	〃	盤	(22.6)	(3.6)	—	—	灰オリーブ色 7.5Y 4/2 (灰白色 K 7/0)	3 郭 S X 2 層 3 郭西斜面 2 層	
53	〃	壺	—	(4.3)	(8.2)	—	明青灰色 5B 7/1 (灰白色 K 8/0)	3 郭西斜面 2 層	
54	白磁	皿	(9.4)	(1.8)	—	—	明青灰色 5B 7/1 (灰白色 10Y 8/1)	2 郭 S X 1 4 層	
55	〃	〃	(9.0)	(1.4)	—	—	淡黄色 2.5Y 8/3 (灰白色 2.5Y 8/2)	3 郭 F 5 1 層	
56	〃	〃	(9.0)	(1.5)	—	—	灰白色 10Y 8/1 (灰白色 2.5GY 8/1)	3 郭 S X 2 4 層	
57	〃	〃	(9.0)	(1.8)	—	—	灰白色 5Y 8/1 (灰白色 2.5GY 8/1)	2 郭 F 14 1 層	
58	〃	〃	(9.4)	2.9	4.0	0.3	灰白色 7.5Y 8/1 ( )	1 郭 F 20 柱穴埋土	
59	〃	〃	—	(1.2)	(3.0)	0.2	灰白色 K 8/0 (灰白色 2.5GY 8/1)	1 郭 1 層	
60	〃	碗	(8.6)	(3.9)	—	—	灰白色 10Y 8/1 ( )	3 郭 S X 2 1 層	

Tab. 5 出土土器法量表4 (( )は復元及び残存値)

挿図 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	外 面	出土地点
			口径	器高	底径	高台高		内面(断面)	
61	白磁	碗	(16.8)	(3.0)	---	---	灰白色 2.5GY 8/1	3郭西斜面	
							(灰白色 Y 8/0)	2層	
62	伊万里	紅皿	(4.6)	(1.4)	(1.2)	(0.2)	明緑灰色 7.5GY 8/1	3郭西斜面	
							(灰白色 10Y 8/1)	1層	
63	染付	皿	(12.0)	(2.1)	---	---	明青灰色 5B 7/1	2郭F16	
							(灰白色 5Y 8/2)	1層	
64	〃	〃	(11.8)	(1.8)	---	---	明緑灰色 10G 7/1	2郭F12-13	
							(灰白色 5GY 8/1)	3層	
65	伊万里	碗	(10.0)	(2.2)	---	---	灰白色 7.5Y 8/1	3郭F-G7-8	
							(灰白色 2.5GY 8/1)	1層	
66	染付	碗	---	(1.7)	---	---	明緑灰色 10G 7/1	3郭D 6	
							(灰白色 10Y 8/1)	1層	
67	瀬戸	梅瓶(口縁)	(3.8)	(3.1)	---	---	灰オリーブ色 7.5Y 5/3	堀切513	
							(灰白色 7.5Y 8/3)	2層	
68	〃	〃(底部)	---	(4.2)	(9.2)	---	浅黄色 7.5Y 7/3	堀切513	
							(灰白色 10Y 8/1)	2層	
69	〃	おろし皿	(12.8)	3.4	(7.0)	---	灰白色 5GY 8/1	2郭E13	
							(灰白色 10Y 8/1)	4層	
70	備前	搦鉢	---	(4.5)	---	---	にぶい赤褐色 5YR 4/3	3郭SX 2	
							灰褐色 7.5YR 4/2	4層	
71	〃	〃	---	(5.1)	---	---	暗青灰色 5PB 4/1	3郭西斜面	
							〃	2層	
72	〃	〃	(25.6)	(6.3)	---	---	暗赤褐色 5YR 3/2	2郭F12-13	
							灰褐色 5YR 4/2	4層	
73	〃	〃	(25.0)	(3.0)	---	---	にぶい褐色 7.5YR 6/3	1郭F18-19	
							褐灰色 7.5YR 5/1	1層	
74	〃	〃	(27.0)	(9.6)	---	---	にぶい褐色 7.5YR 5/4	1郭E 20	
							〃	柱穴埋土	
75	〃	〃	(28.3)	(6.0)	---	---	暗赤褐色 10R 3/2	2郭F12-13	
							灰赤色 10R 4/2	2層	
76	〃	〃	(27.8)	(7.1)	---	---	暗青灰色 5PB 4/1	1郭	
							灰色 5Y 5/1	柱穴埋土	
77	〃	〃	---	(6.4)	(14.8)	---	明赤褐色 2.5YR 5/6	3郭SX 2	
							橙色 5YR 6/6	4層	
78	〃	〃	---	(7.6)	(11.8)	---	灰赤色 2.5YR 4/2	3郭SX 2	
							暗赤灰色 10R 3/1	4層	
79	〃	〃	---	(5.7)	(16.0)	---	橙色 5YR 7/6	3郭西斜面	
							褐灰色 5YR 6/1	2層	
80	〃	壺	---	(4.3)	---	---	極暗褐色 7.5R 2/2	3郭西斜面	
							暗赤灰色 7.5R 4/1	2層	

Tab. 5 出土土器法量表5 (( ) は復元及び残存値)

挿図 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	外面 内面(断面)	出土地点 層 位
			口径	器高	底径	高台高			
81	備前	壺	(13.0)	(2.6)	—	—	にぶい赤褐色 5YR 5/3	6郭E・F3	
							〃	1層	
82	〃	〃	(12.0)	(3.6)	—	—	緑灰色 10GY 5/1	7郭I3	
							明緑灰色 10GY 7/1	1層	
83	〃	〃	(11.4)	(2.5)	—	—	黄灰色 2.5Y 5/1	2郭E13	
							黒褐色 10YR 3/1	3層	
84	〃	〃	—	(6.7)	—	—	オリーブ黄色 5Y 6/4	3郭西斜面	
							灰黄色 2.5Y 6/2	2層	
85	〃	甕	(34.0)	(6.2)	—	—	暗赤褐色 2.5YR 3/3	7郭I2・3・4	
							〃	1層	
86	〃	〃	(33.0)	(6.8)	—	—	にぶい赤褐色 2.5YR 4/0	6郭	
							〃	柱穴埋土	
87	〃	〃	—	(6.6)	—	—	紫黒色 5BP 2/1	1郭	
							暗紫灰色 5RP 3/1	柱穴埋土	
88	〃	〃	—	(5.4)	(19.0)	—	暗紫灰色 5P 4/1	3郭西斜面	
							〃	2層	
89	〃	〃	—	(5.3)	(20.0)	—	暗青灰色 5PB 4/1	3郭西斜面	
							暗紫灰色 5P 4/1	2層	
90	〃	〃	(42.8)	(4.8)	—	—	暗赤褐色 2.5YR 3/4	3郭S X1	
							〃	4層	
91	〃	〃	(43.2)	(7.0)	—	—	暗赤褐色 2.5YR 3/4	6郭F14	
							暗赤褐色 2.5YR 3/3	1層	
92	〃	〃	(37.2)	(12.1)	—	—	暗赤褐色 2.5YR 3/2	6郭E・F12・13・H	
							暗赤褐色 5YR 3/3	2層	
93	〃	〃	(40.0)	(11.5)	—	—	灰オリーブ色 5Y 5/2	3郭西斜面2層	
							〃	2郭F11層	
94	〃	〃	(34.0)	(69.2)	(25.2)	—	にぶい赤褐色 2.5YR 5/4	6郭E2・6・71層	
							(黄灰色 2.5Y 7/2)	6郭F13・152層	
95	東播糸	捏鉢	(27.4)	(4.3)	—	—	灰色 10Y 6/1	6郭E2	
							〃	1層	
96	備前	小物	—	(1.9)	(8.0)	—	暗赤灰色 5R 3/1	3郭C・E7	
							〃	1層	
97	瓦質土器	鍋	(17.6)	(2.8)	—	—	灰色 N 6/0	3郭西斜面	
							(灰白色 2.5GY 8/1)	2層	
98	土師質土器	釜	(11.6)	(3.0)	—	—	浅黄色 2.5Y 7/3	7郭	
							にぶい黄橙色 10YR 7/3	1層	
99	瓦質土器	捏鉢	—	(2.8)	—	—	暗青灰色 5B 3/1	6郭F14	
							灰色 K 4/0	2層	
100	土師質土器	〃	—	(2.3)	—	—	にぶい黄橙色 10YR 7/4	2郭E13・152層	
							〃	3層	

Tab. 5 出土土器法量表6 [( )は復元及び残存値]

挿図 番号	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	外 面 内面/断面	出土地点 層 位
			口径	器高	底径	高台高			
101	土師質土器	鍋	(18.0)	(3.1)	—	—	橙色 7.5YR 6/8 〃	2郭F13バット 3層	
102	〃	〃	(22.2)	(6.8)	—	—	にぶい橙色 7.5YR 7/4 にぶい黄褐色 10YR 7/3	3郭西斜面 2層	
103	羽皿	—	全長 (11.2)	直径 11.6	孔径 3.9	重量(kg) 1.26	にぶい黄褐色 10YR 7/3	6郭F15 4層	
104	土錘	—	〃 2.4	全幅 0.9	孔径 0.3	重量(g) 1.6	にぶい赤褐色 10R 6/4	3郭C5-6-7 1層	
105	〃	—	〃 3.4	〃 1.1	〃 0.3	〃 2.6	にぶい橙色 7.5YR 7/4	3郭C・D・E・3-4 1層	
106	〃	—	〃 (2.5)	〃 1.2	〃 0.4	〃 2.6	橙色 2.5YR 6/6	7郭L2 1層	
107	〃	—	〃 (2.7)	〃 1.1	〃 0.4	〃 2.2	浅黄褐色 10YR 8/4	6郭F14 2層	
108	〃	—	〃 (2.3)	〃 1.2	〃 0.5	〃 2.4	橙色 7.5YR 7/8	6郭F14 2層	
109	〃	—	〃 3.3	〃 1.0	〃 0.4	〃 2.4	橙色 2.5YR 6/6	2郭E13 2層	
110	〃	—	〃 3.3	〃 1.4	〃 0.5	〃 3.6	橙色 2.5YR 7/6	6郭E14-15 2層	
111	〃	—	〃 3.6	〃 1.4	〃 0.5	〃 5.2	にぶい橙色 2.5YR 6/4	2郭 1層	
112	〃	—	〃 3.7	〃 1.2	〃 0.5	〃 4.1	にぶい赤褐色 10R 6/4	7郭L2 1層	
113	〃	—	〃 4.1	〃 1.2	〃 0.4	〃 5.1	明黄褐色 10YR 7/6	6郭F13 2層	
114	〃	—	〃 3.6	〃 1.1	〃 0.4	〃 2.7	橙色 2.5YR 6/6	6郭F14 2層	
115	〃	—	〃 4.1	〃 1.3	〃 0.5	〃 5.9	浅黄褐色 10YR 8/4	6郭F15 2層	
116	〃	—	〃 4.5	〃 1.2	〃 0.4	〃 4.6	橙色 7.5YR 7/6	6郭F14 2層	
117	〃	—	〃 4.3	〃 1.3	〃 0.5	〃 4.8	明黄褐色 10YR 7/6	6郭F14 2層	

Tab. 6 出土金属製品・石製品計測表

挿図 番号	種 別	法 量 (cm)				出土地点	層位	備 考
		全長	全幅	全厚	重量(g)			
118	刀 子	15.0	1.2	0.4	9.0	堀切5	2層	
119	火 箸	21.4	1.6	0.6	27.6	3郭F5	1層	
120	鉄 釘	7.5	0.9	0.7	9.5	3郭C・D・E5	1層	
121	〃	8.0	1.1	0.8	12.9	6郭F14	2層	
122	〃	6.4	1.1	1.0	6.1	6郭E2	1層	
123	〃	4.9	1.1	0.6	6.8	2郭S X1	4層	
124	〃	6.2	1.5	0.7	6.6	6郭F14	2層	
125	〃	5.2	1.7	1.0	11.8	3郭E7柱穴	埋土	
126	〃	5.1	2.0	0.7	8.4	6郭F14	2層	
127	〃	3.5	0.8	0.6	2.9	3郭E7柱穴	埋土	
128	〃	4.8	1.3	0.8	5.1	3郭C・D・E5	1層	
129	呼 子	5.6	1.4	1.1	8.8	2郭F12	2層	
130	飾 金 具	3.9	2.9	0.2	9.2	6郭F14	2層	
131	砥 石	7.9	3.1	2.1	72.3	2郭S X1	4層	
132	〃	10.3	3.1	1.5	66.8	1郭F・G18・19	1層	
133	〃	12.5	3.5	1.6	132.2	6郭SA5・P1	埋土	
134	礎 石	34.7	23.6	10.1	(kg) 16.3	2郭S X1	1 2層	焼けており一部赤化。
135	〃	33.2	20.8	20.4	19.5	2郭E12	6層	〃

Tab. 7 出土渡来銭計測表

挿図 番号	銭種	初 鑄 年 次		銭 径 (mm)		量目 (g)	出土地点	層位	備考
		年 号	西曆	外径	内径				
136	開元通寶	武德4年以後	621~	23.0	21.0	1.8	6郭F14	2層	
137	宋通元寶	建隆元年	960	24.0	20.0	2.2	6郭E13	2層	
138	祥符元寶	大中祥符元年	1008	23.5	18.0	1.9	3郭C・D・E・8	1層	
139	〃	〃	〃	25.0	19.5	2.7	6郭F14	2層	
140	天聖元寶	天聖元年	1023	24.5	20.5	2.2	6郭F14	2層	
141	景祐元寶	景祐元年	1034	24.5	20.0	2.1	2郭E13	3層	
142	皇宋元寶	皇祐元年	1038	24.5	20.5	1.7	2郭F13	2層	
143	〃	〃	〃	24.0	20.5	2.2	6郭F14	2層	
144	〃	〃	〃	24.0	20.0	2.6	6郭柱穴	埋土	
145	嘉祐元寶	嘉祐元年	1056~63	24.5	21.0	2.7	6郭F14	2層	
146	熙寧元寶	熙寧元年	1068	23.5	19.0	2.7	2郭E13	3層	
147	〃	〃	〃	25.0	20.0	2.3	6郭E14	3層	
148	元農元寶	元農元年	1078	24.0	19.0	2.7	2郭E13	3層	
149	紹聖元寶	紹聖元年	1094	24.5	17.5	3.0	6郭F14	2層	
150	洪武通寶	洪武年間	1368~98	23.5	19.5	2.3	6郭柱穴	埋土	
151	不 明	——	---	----	—	0.7	6郭F14	2層	破片
152	寬永通寶	寬永13年以降	1636~	23.5	19.5	2.4	2郭F14	1層	
153	〃	〃	〃	23.0	20.0	2.0	3郭D3	1層	

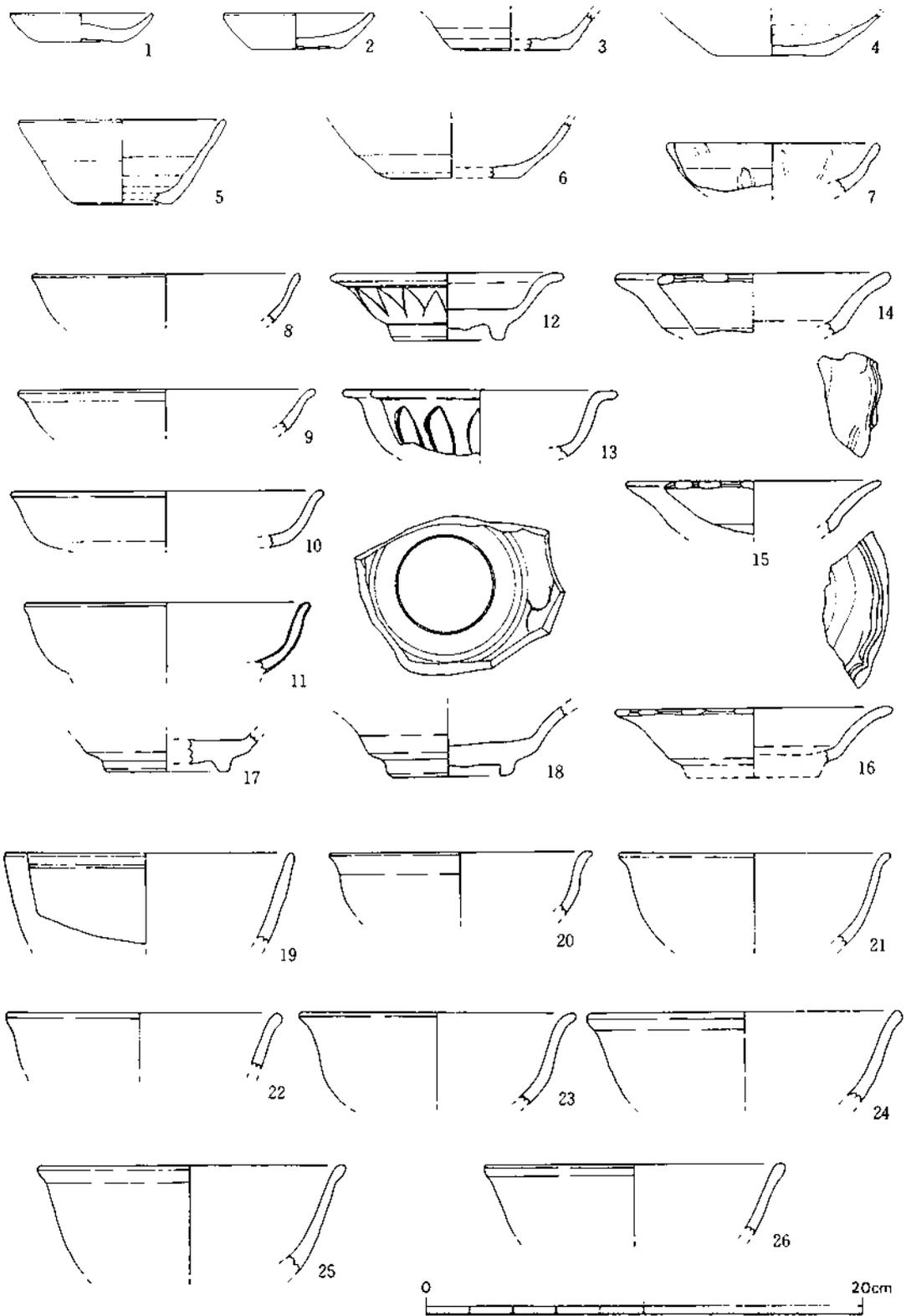


Fig. 30 出土遺物 1 土師質土器・青磁

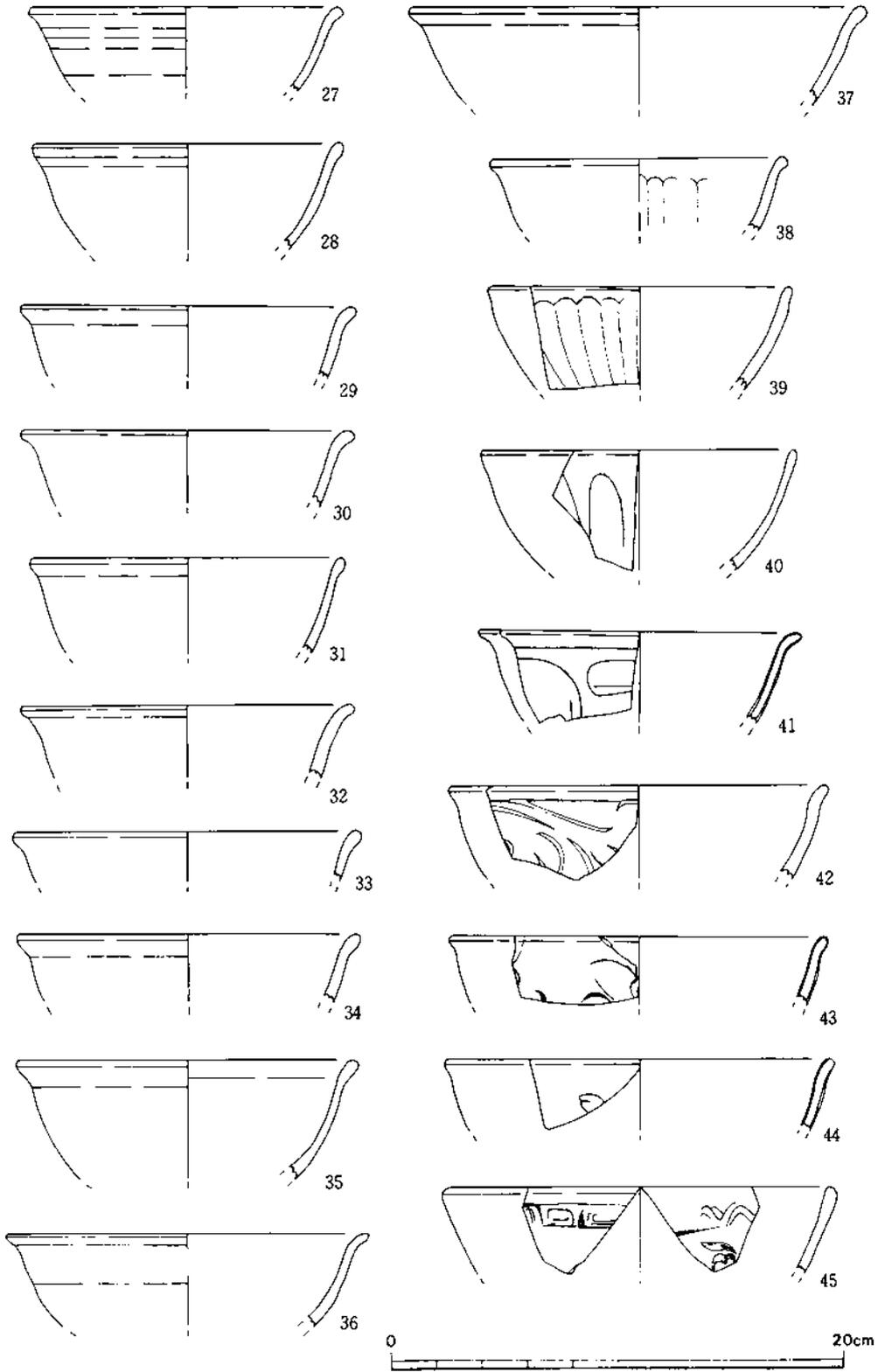


Fig. 31 出土遺物 2 青磁

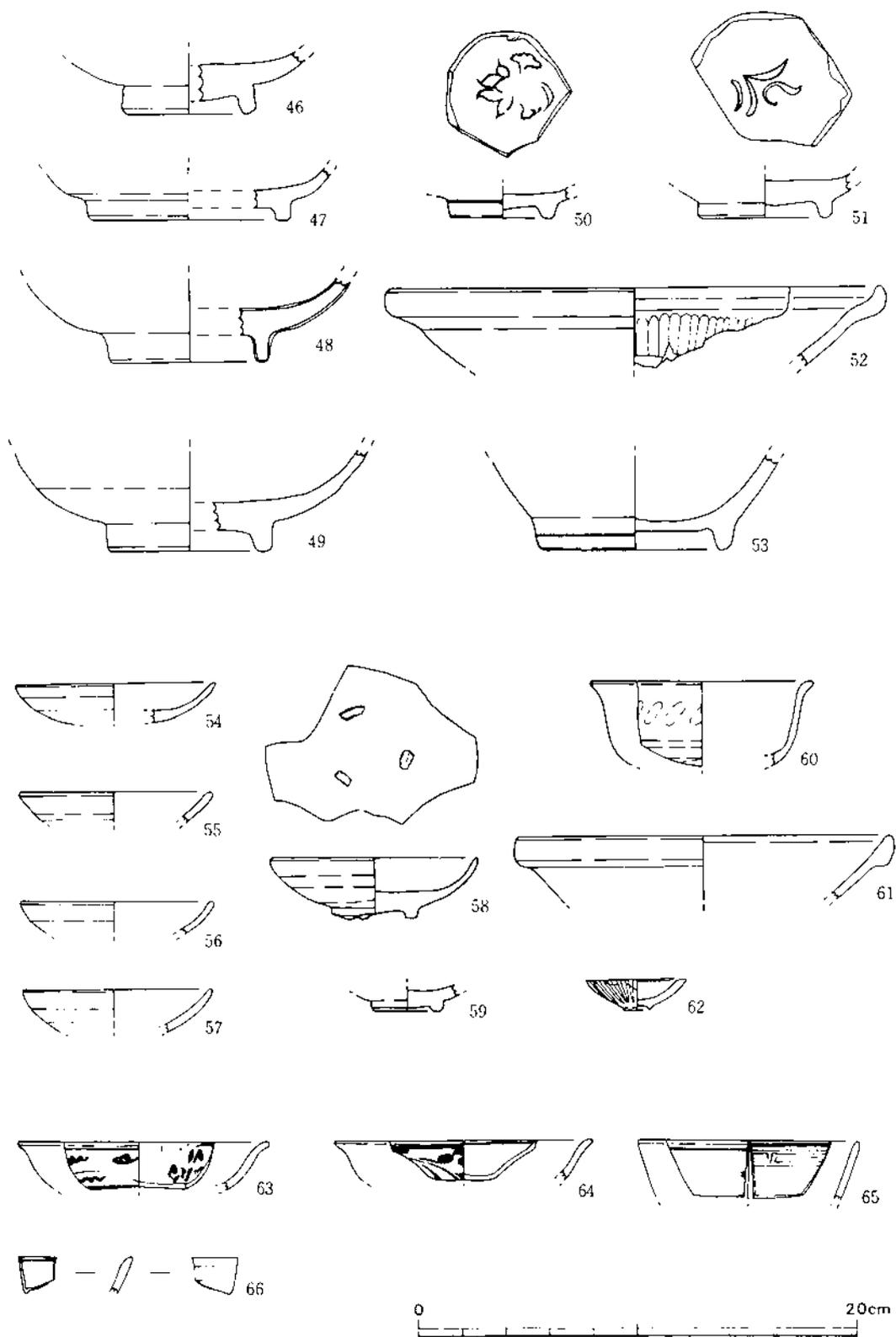


Fig. 32 出土遺物 3 青磁・白磁・染付・伊万里

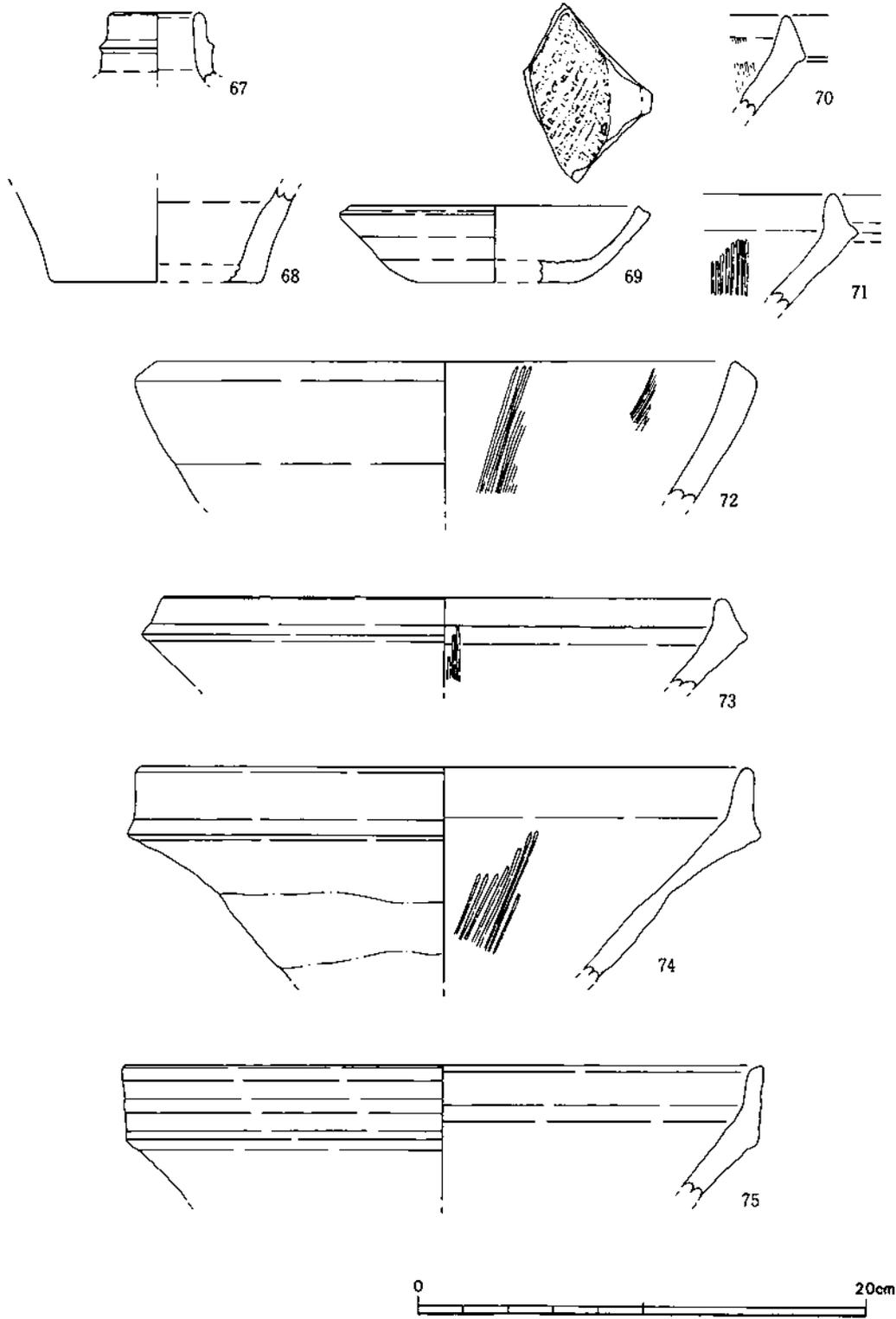


Fig. 33 出土遺物 4 瀬戸・備前

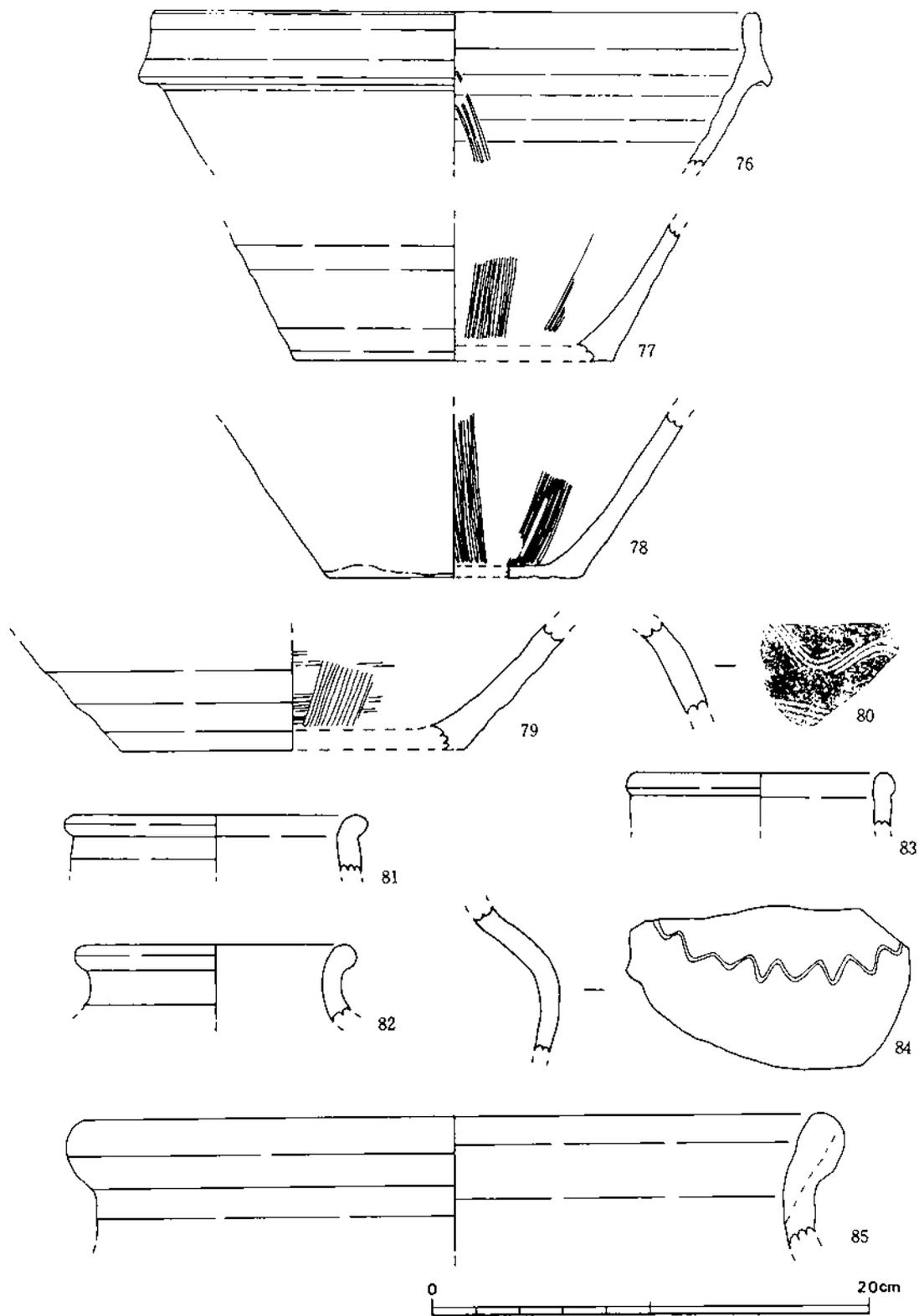


Fig. 34 出土遺物 5 備前

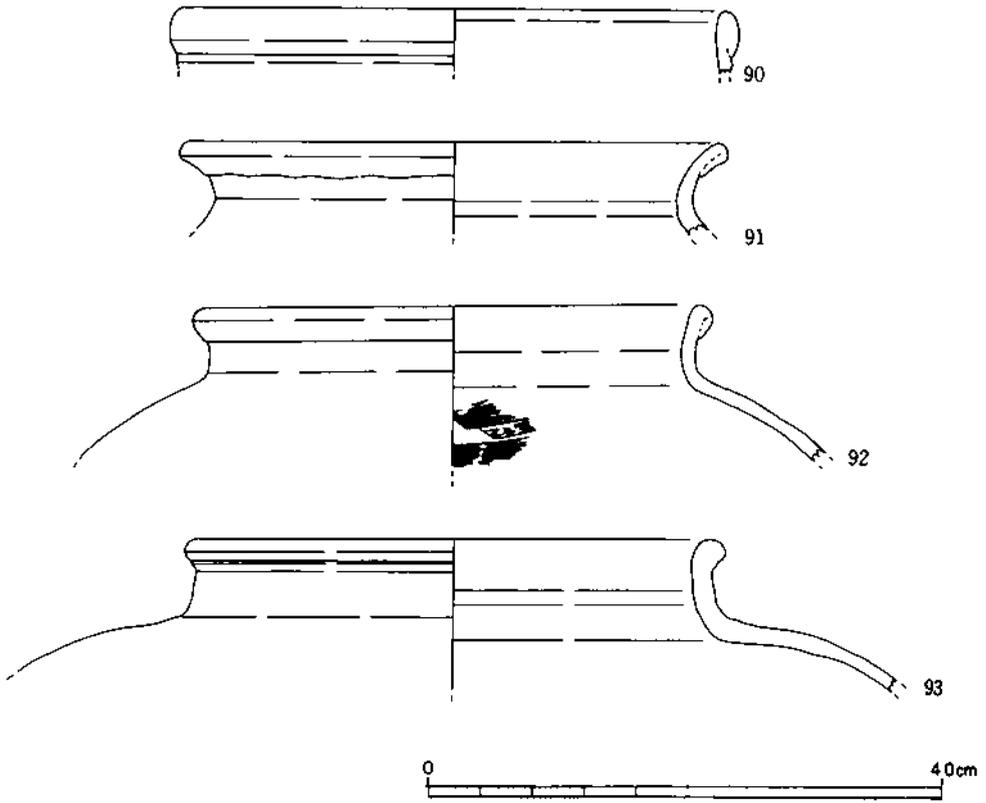
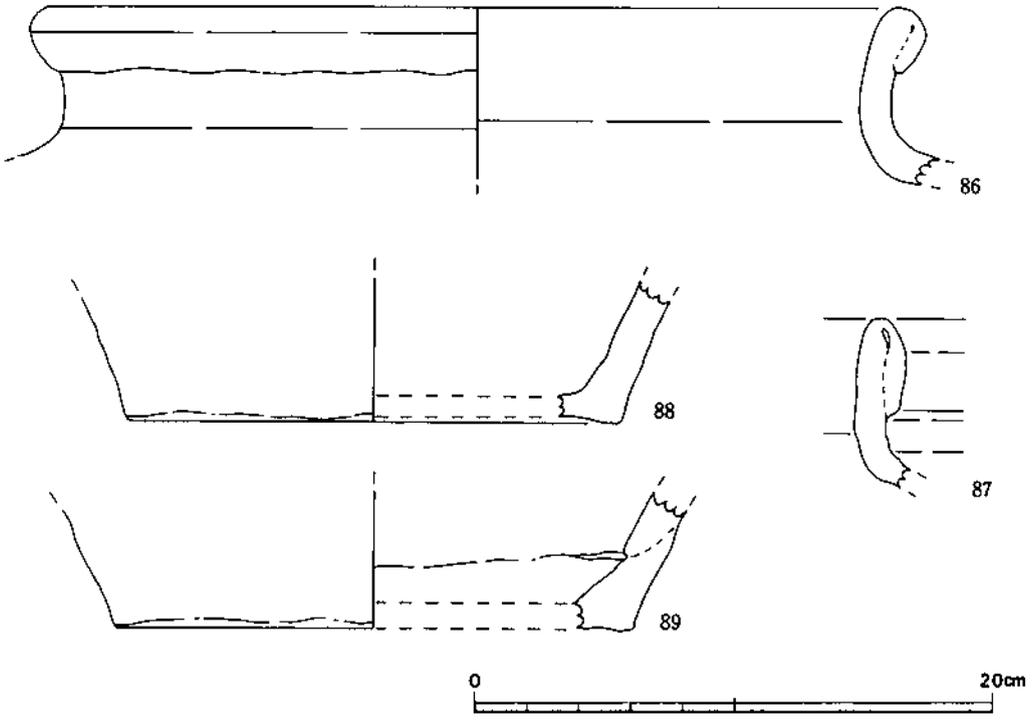


Fig. 35 出土遺物 6 備前

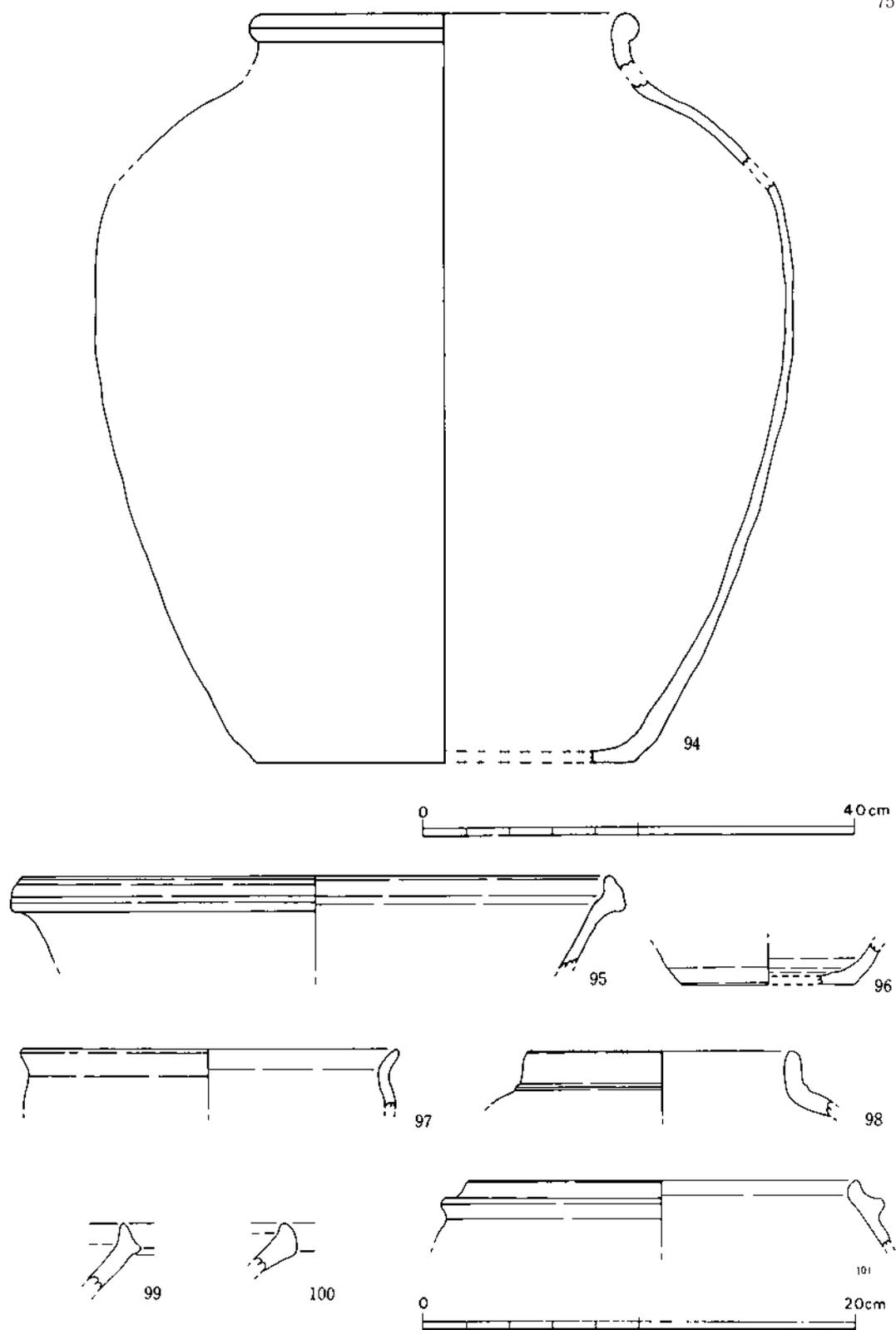


Fig. 36 出土遺物7 備前・東播系・土師質土器・瓦質土器

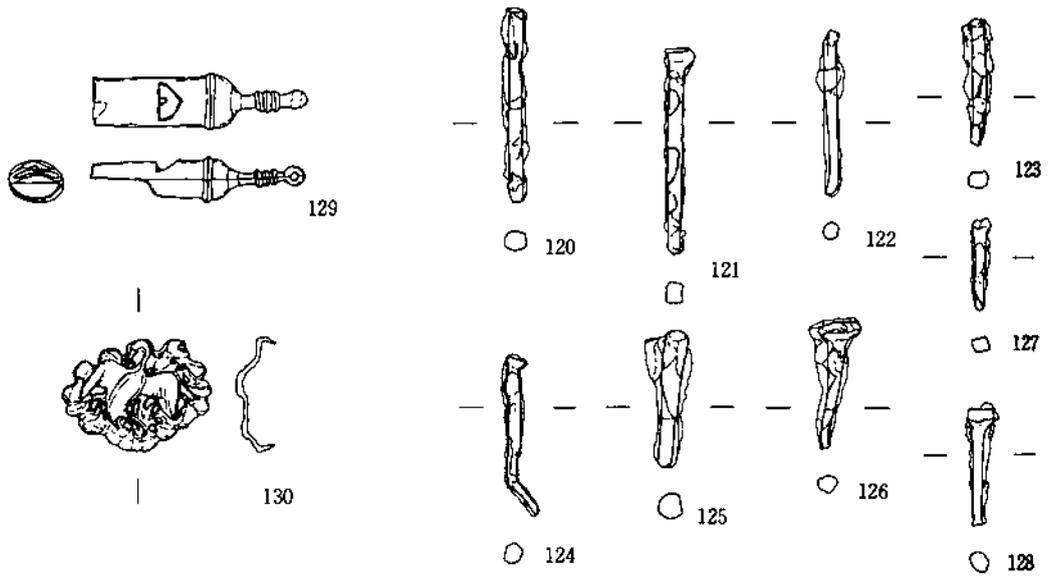
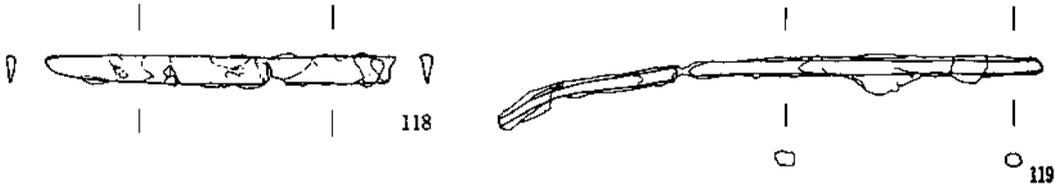
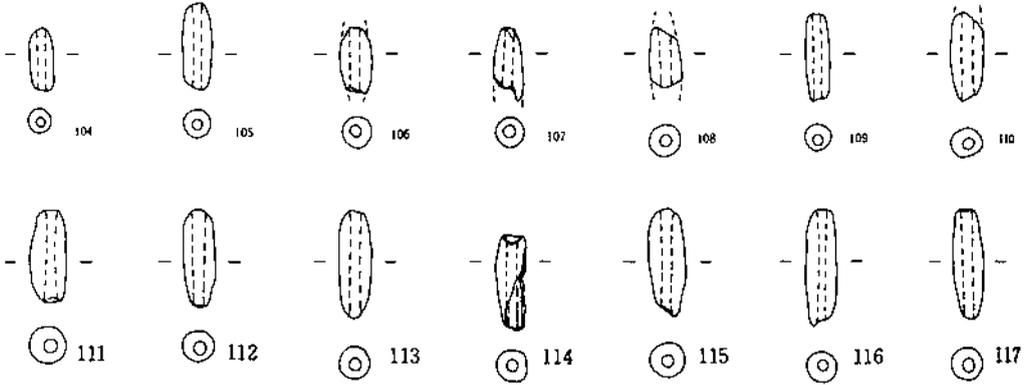
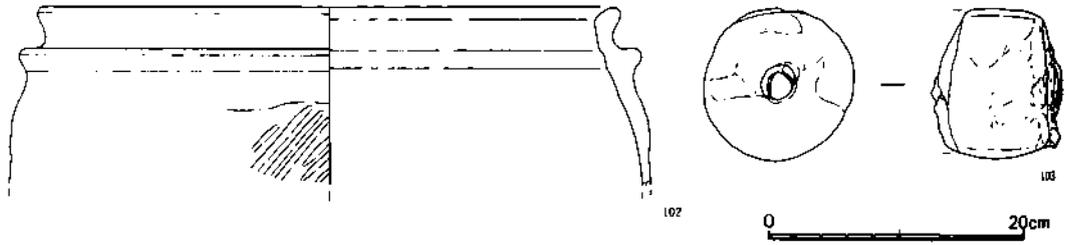


Fig. 37 出土遺物 8 土師質土器・羽口・土鏝・刀子・火箸・鉄釘

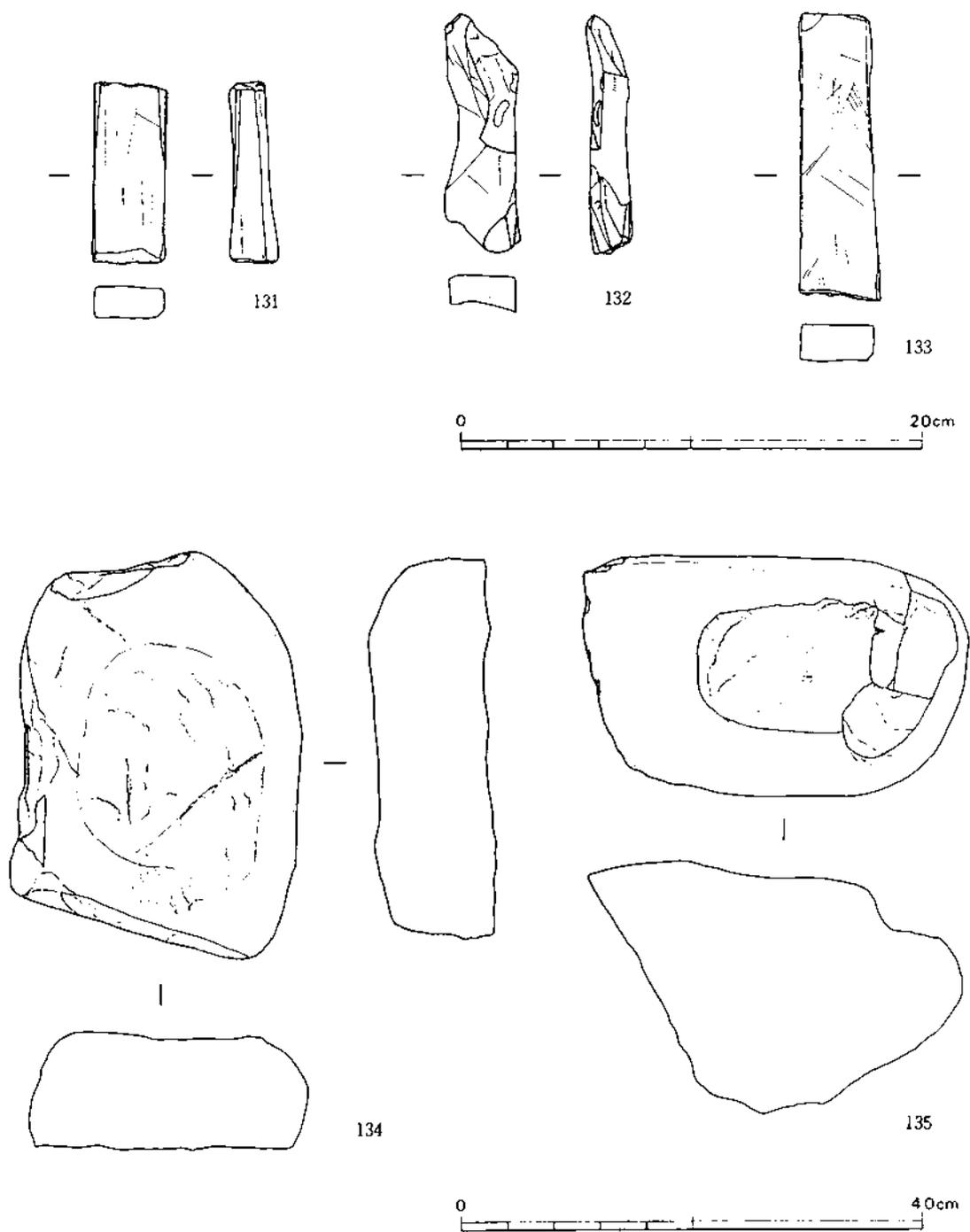


Fig. 38 出土遺物9 石製品・礎石

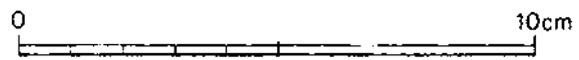
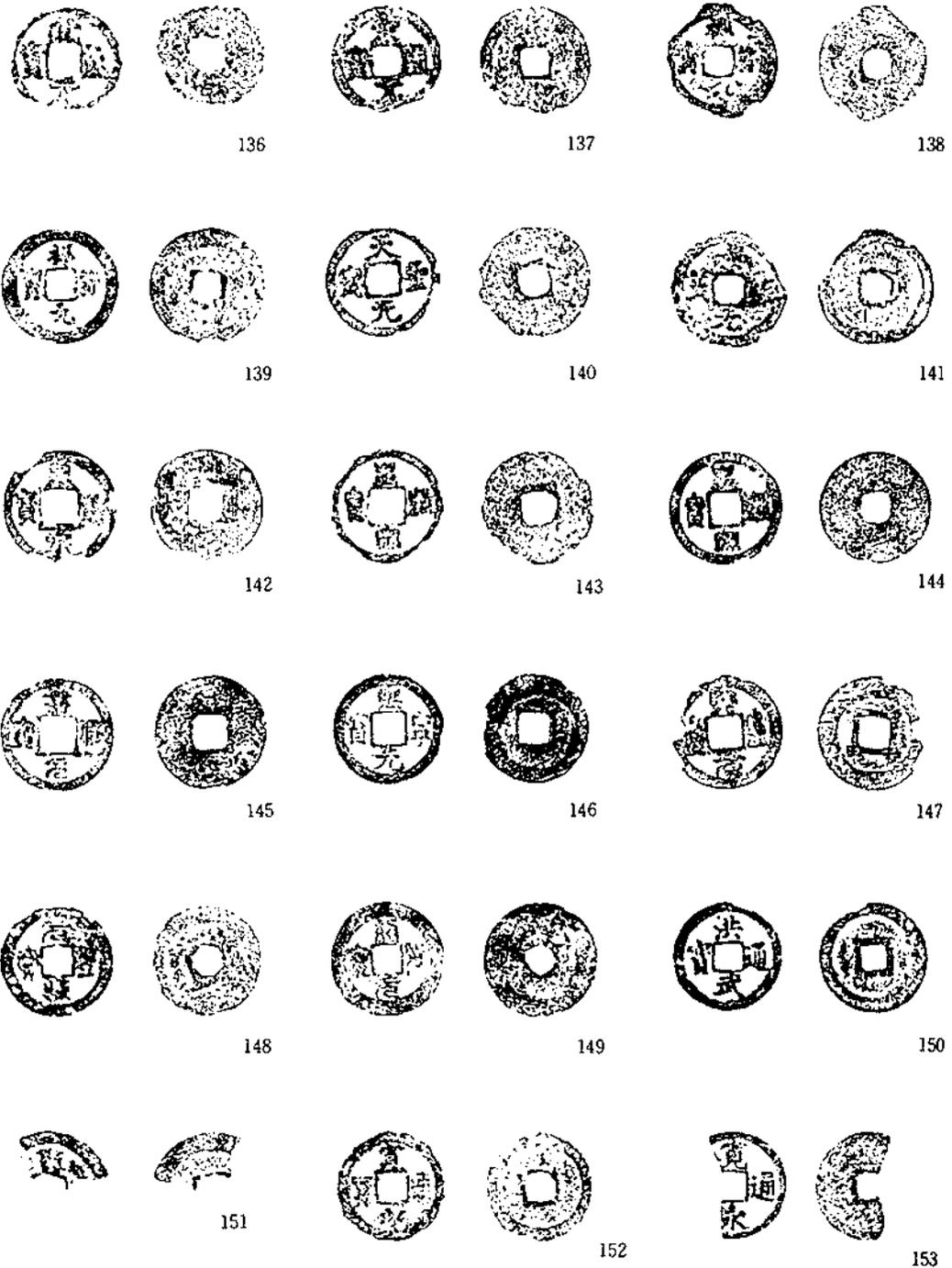


Fig. 39 出土遺物10 渡来銭

# 写真図版





扇城跡航空写真全景

PL. 2



扇城跡航空写真 A 区全景



扇城跡航空写真 B 区全景

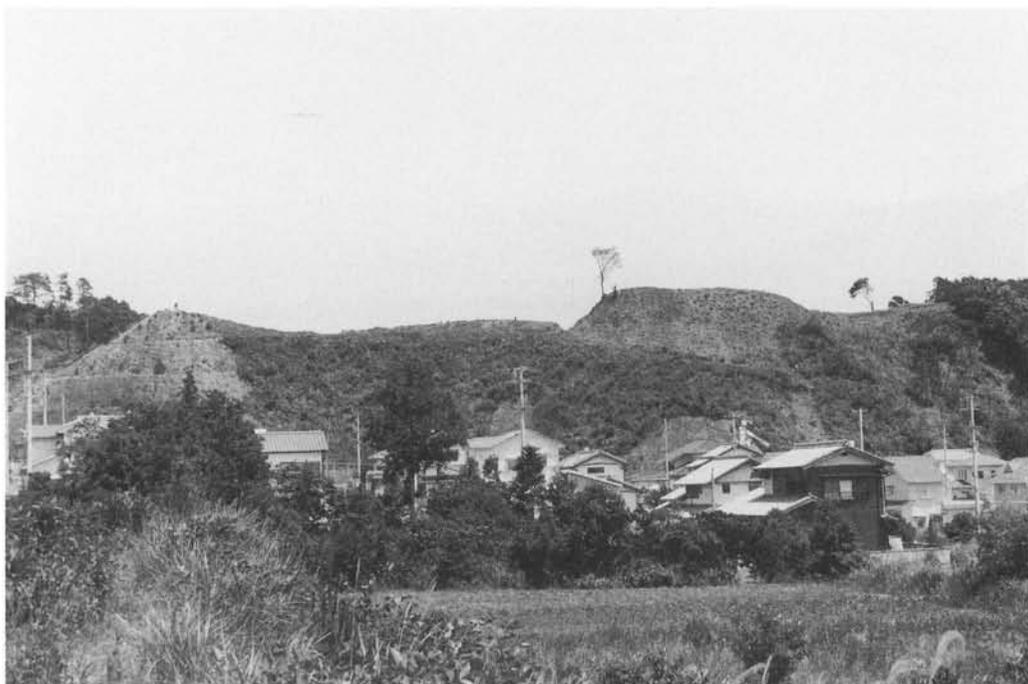


扇城跡遠景（南より）



扇城跡近景（北西より）

PL.4



A区 近景 (西より)



A区 伐開状況



A区 調査前全景（北より）



A区 堀切1（西より）

PL.6



A区 試掘状況



A区 2郭 試掘トレンチ



A区 1郭 南半部



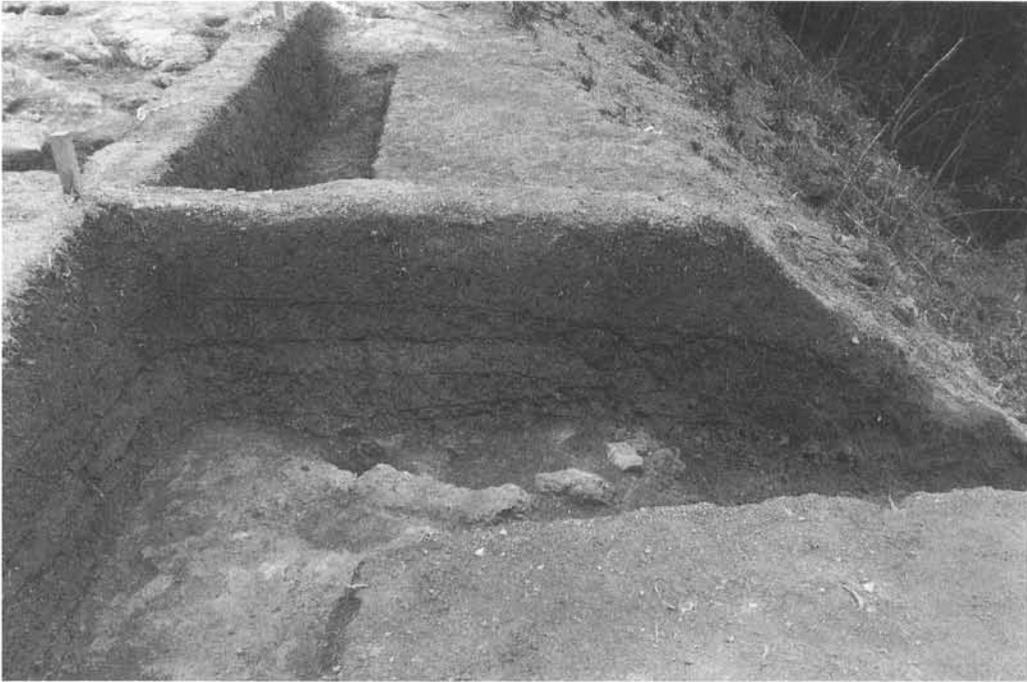
A区 2郭 調査状況



A区 1・2郭 遺構検出状態



A区 2・3郭 遺構検出状態



A区 2郭 東西ベルト西側セクション



A区 2郭 東西ベルト東側セクション

PL. 10



A区 1郭 完掘 (北より)



A区 1~3郭 完掘 (北より)



A区 3郭 遺構検出状態



A区 3郭 東西ベルト西端セクション

PL. 12



A区 完掘全景（南より）



A区 3郭 SB9・10, SK1

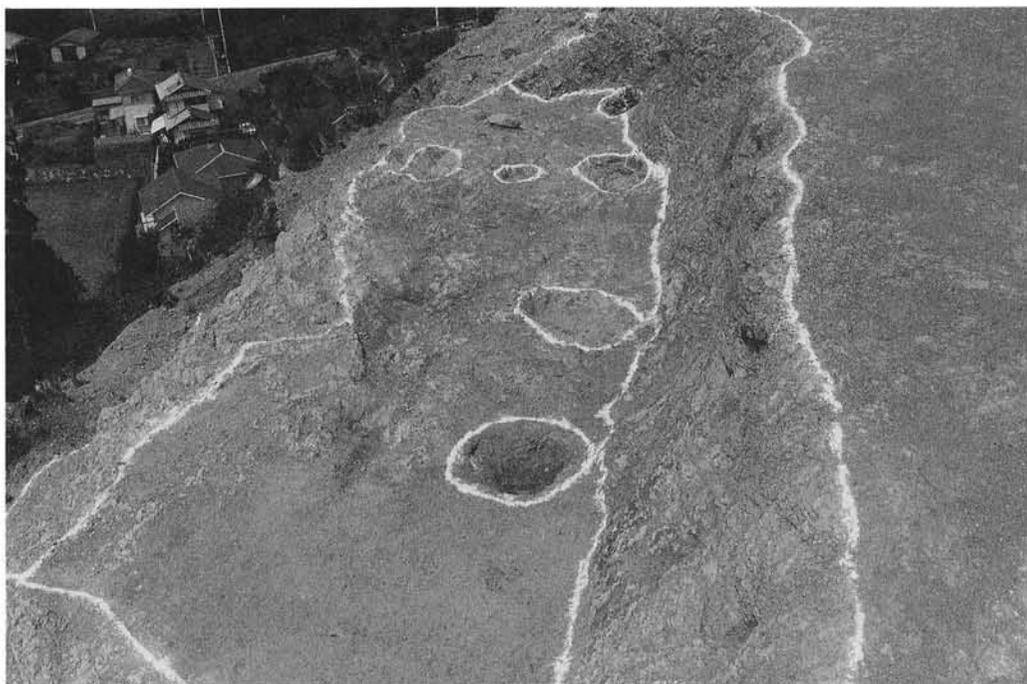


A区 3郭 SB7・8, SX1・2



A区 3郭 SB7, SX1

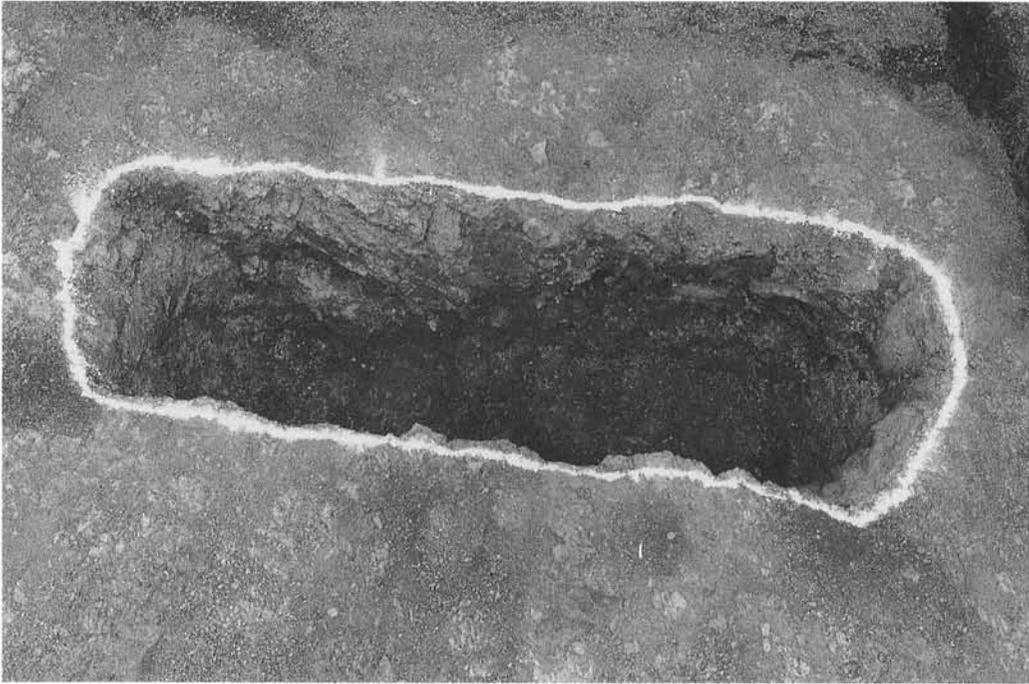
PL. 14



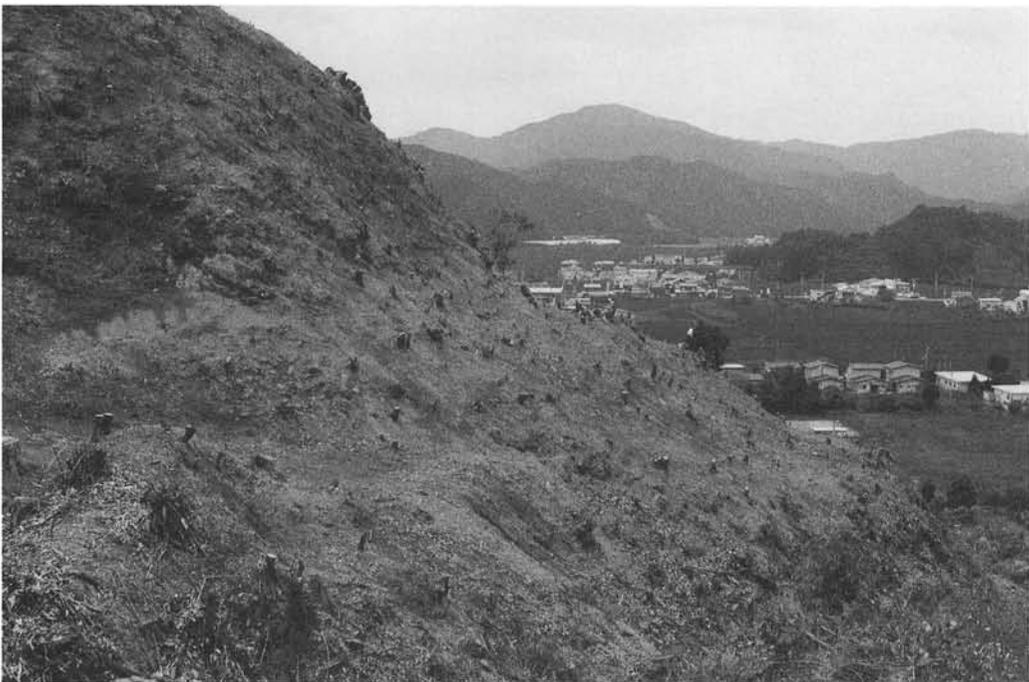
A区 3郭 SB8, SX2



A区 3郭 SX1 (10'ライン) セクション



A区 3郭 SK1



A区 3郭 西斜面調査前（北より）

PL. 16



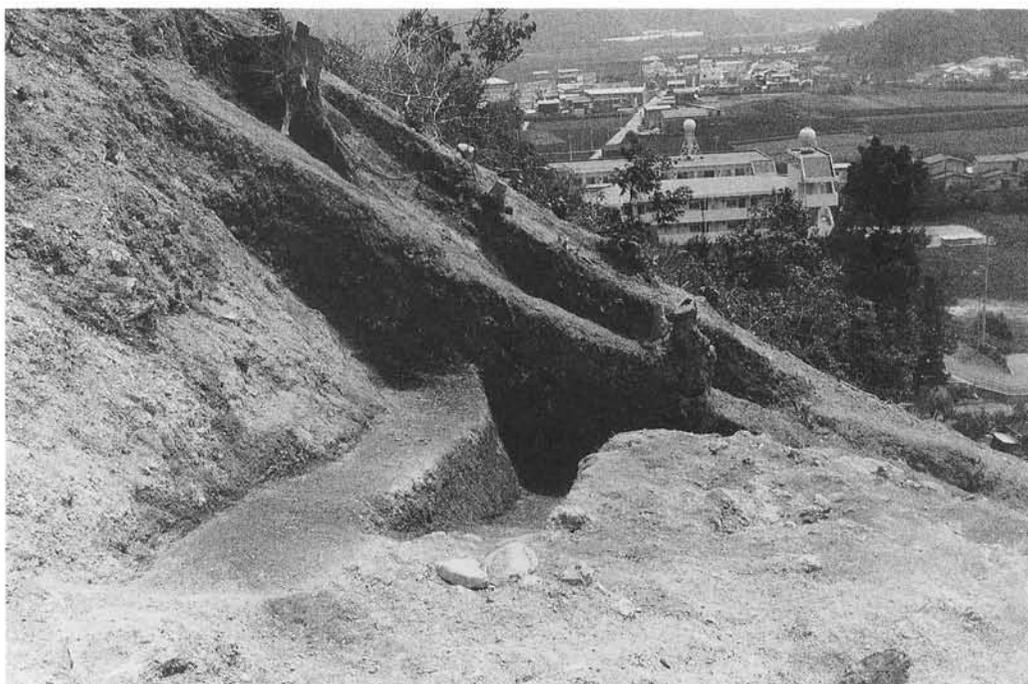
A区 3郭 西斜面調査前（東より）



A区 3郭 西斜面完掘



A区 3郭 西斜面 SX3



A区 3郭 西斜面 SX3 セクション



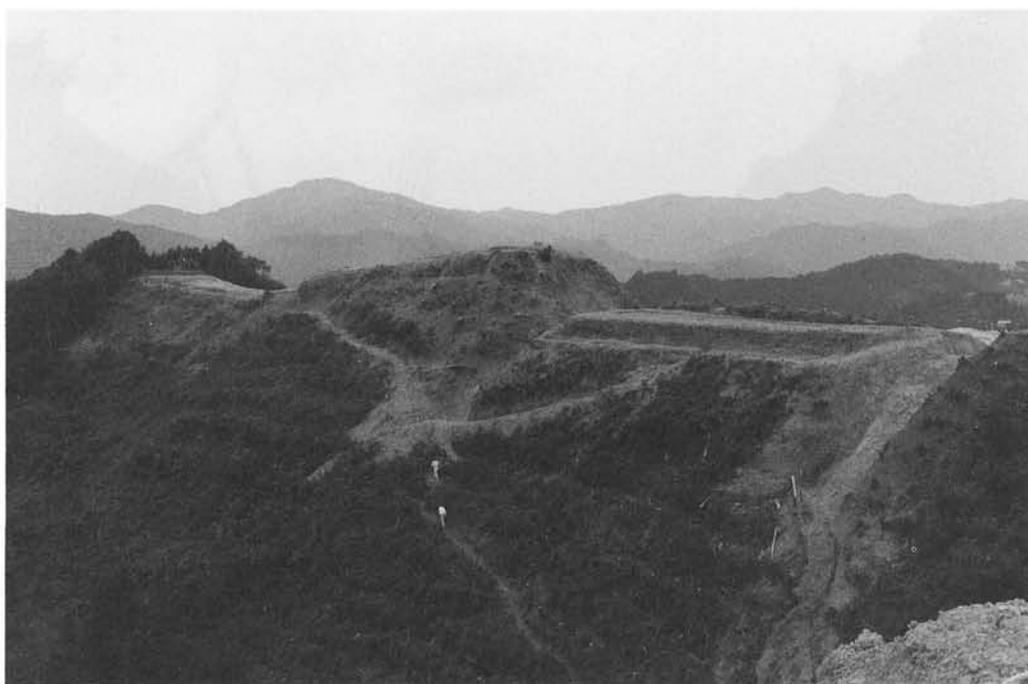
A区 1郭 東斜面 SD1



A区 1郭 東斜面 SD1 セクション



A区 4郭 完掘



A区 完掘 (6郭より)



A区 堀切1 東半部調査前



A区 堀切1 調査前（東より）



A区 堀切1 中央ベルト東面セクション



A区 堀切1 西部完掘



A区 堀切1 中央部完掘



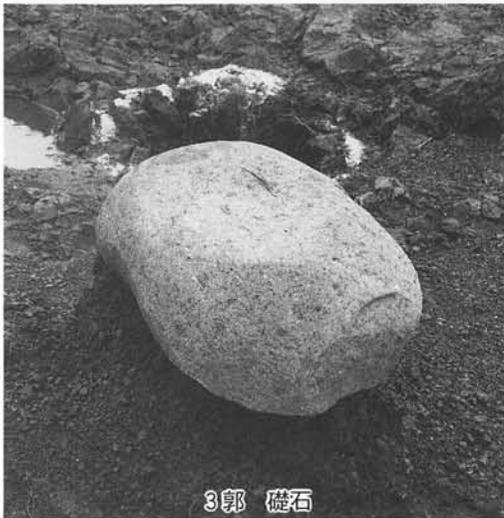
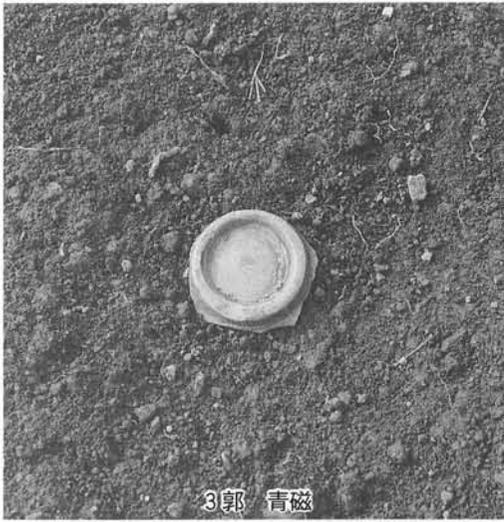
A区 堀切1 東部完掘



A区 堀切2 西半部完掘（下方より）



A区 堀切2 西半部完掘（上方より）



A区 1～3郭 遺物出土状態



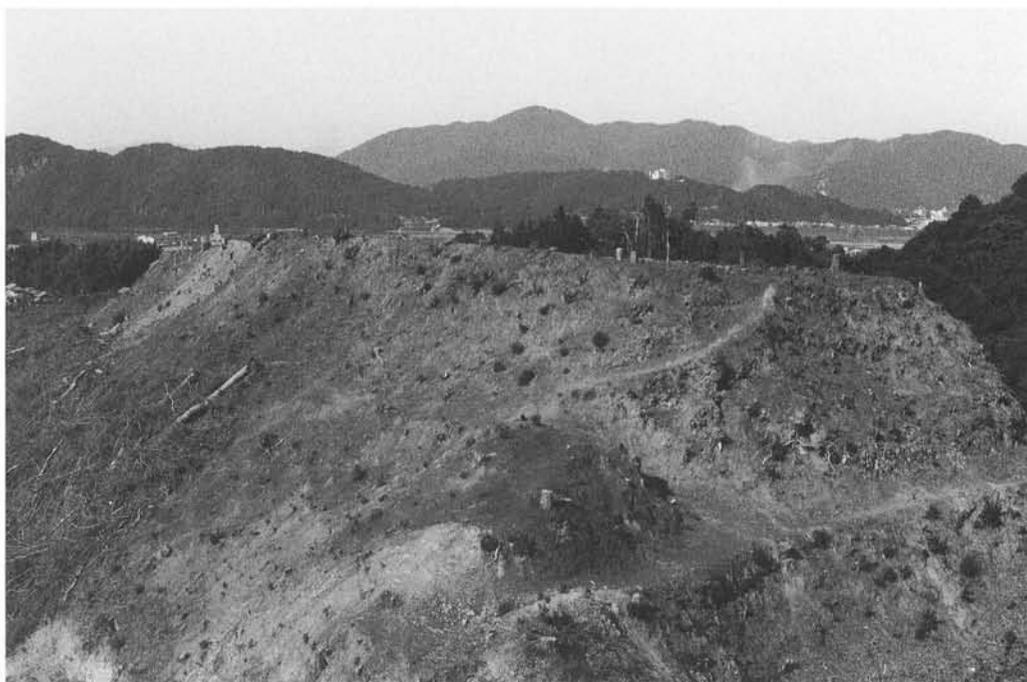
B区 近景（西より）



B区 調査前全景（南より）



B区 伐開状況



B区 調査前全景（南西より）



B区 6郭 調査前（北より）



B区 7郭 調査前（西より）



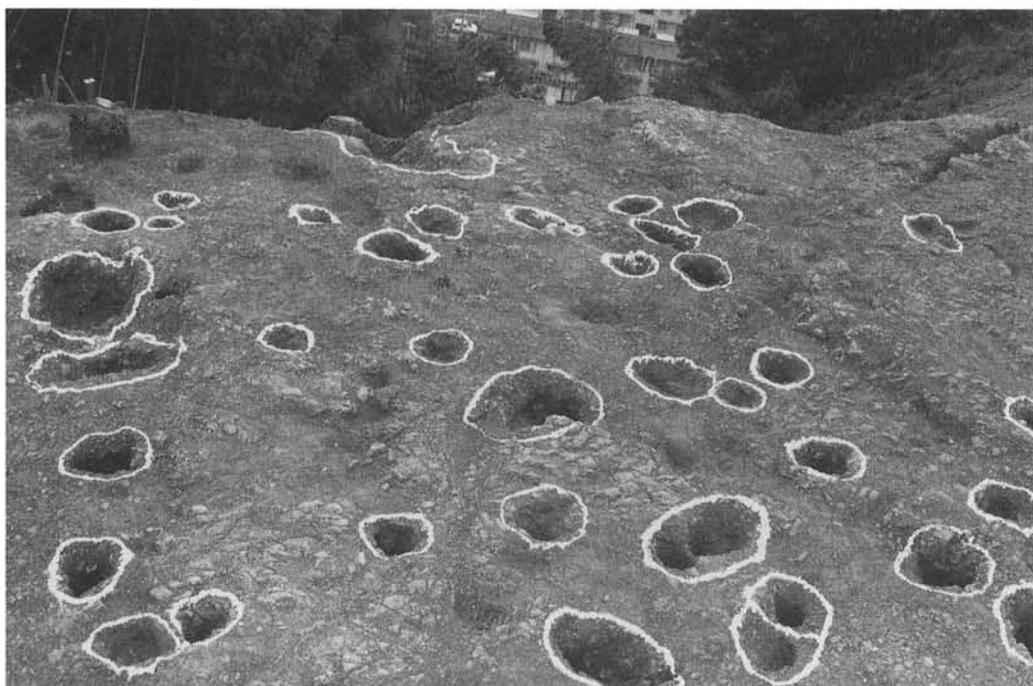
B区 6郭 遺構検出状態



B区 6郭 完掘 (北より)



B区 6郭 完掘 (南より)



B区 6郭 北部ビット集中



B区 6郭 南東部



B区 6郭 南東部 南北ベルトセクション



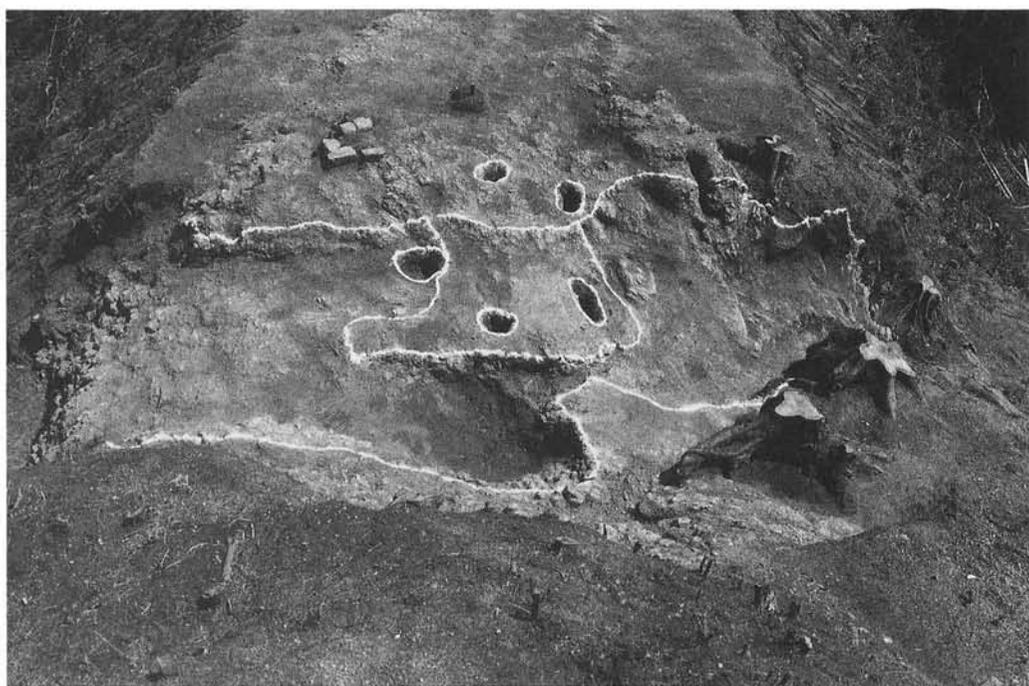
B区 6郭 南東部 羽口出土状況



B区 7郭 伐開後調査前（西より）



B区 7郭 遺構検出状態



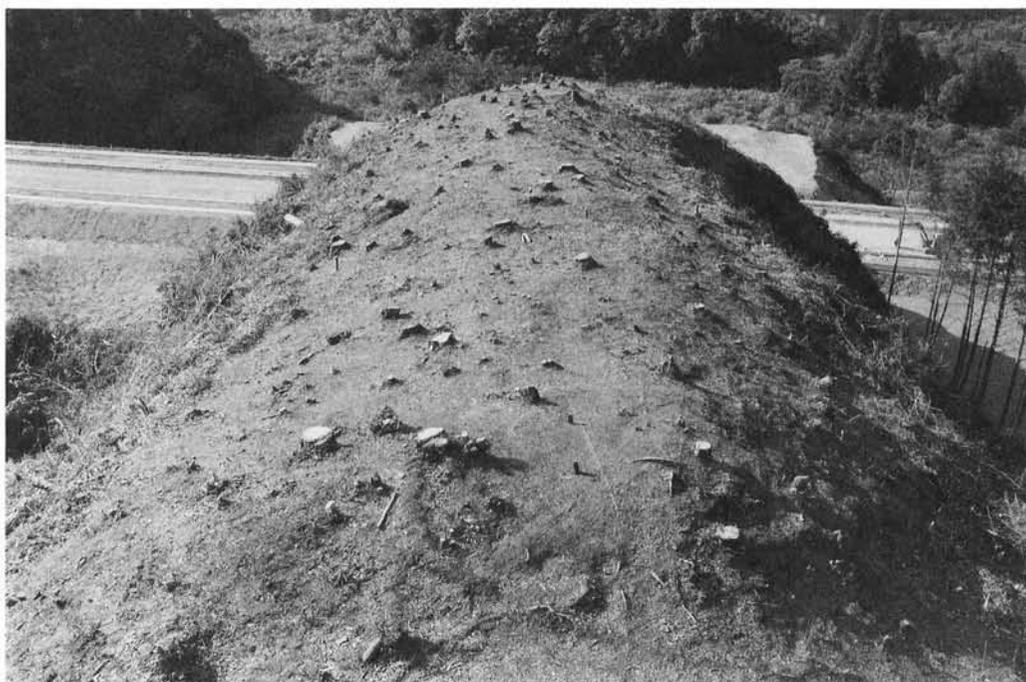
B区 堀切5 完掘 (西より)



B区 堀切3 完掘（南より）



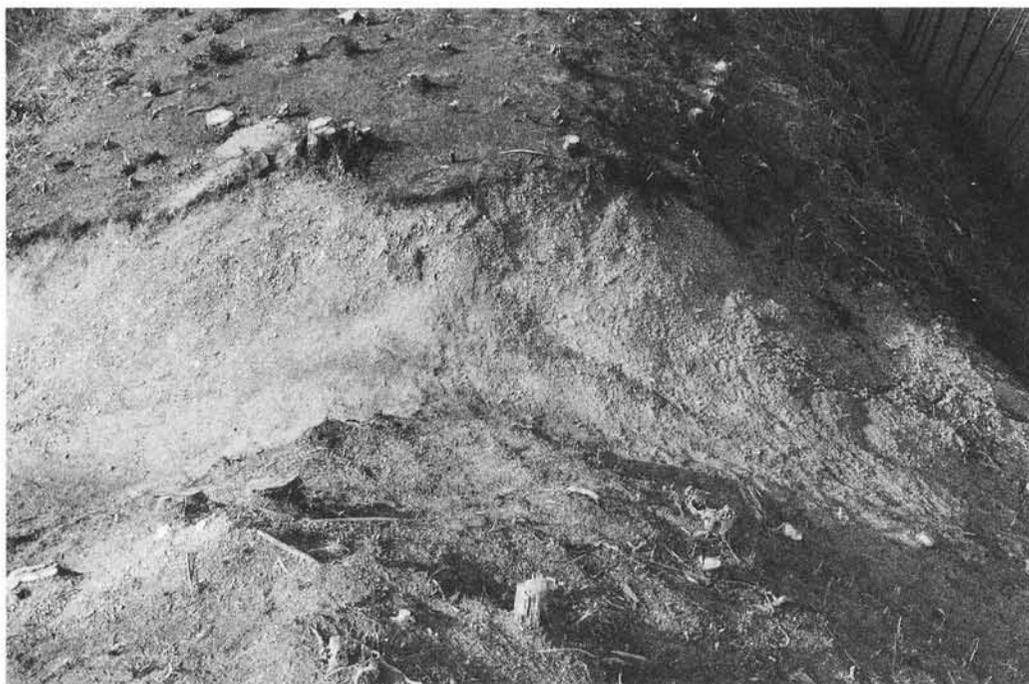
B区 堀切3b 完掘（北より）



B区 堀切4・8郭



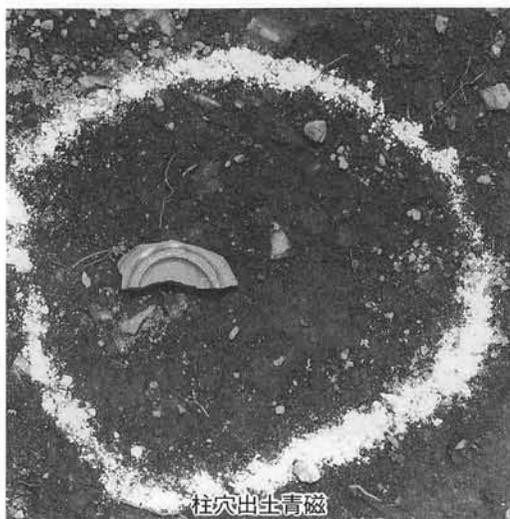
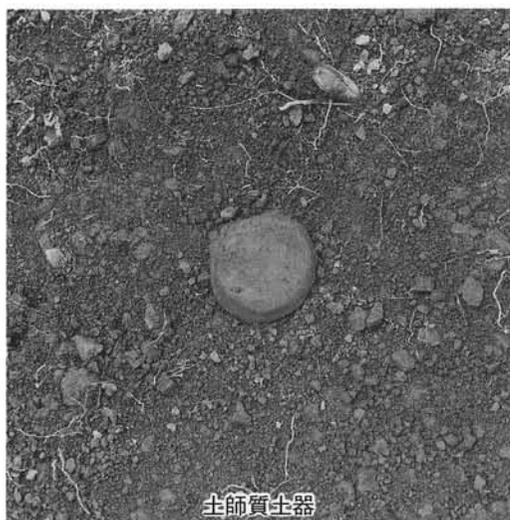
B区 堀切4 調査前

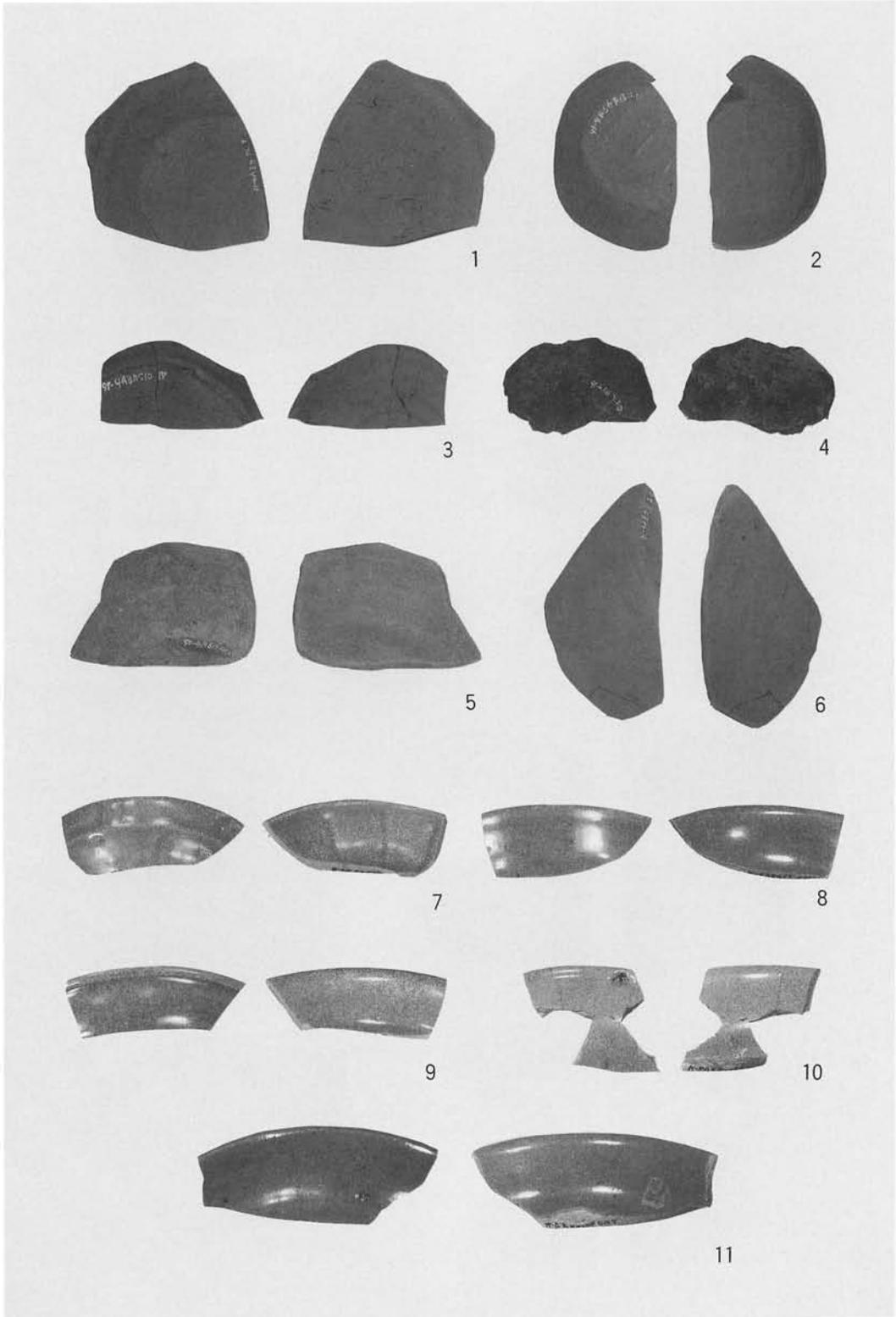


B区 堀切4 完掘 (南より)

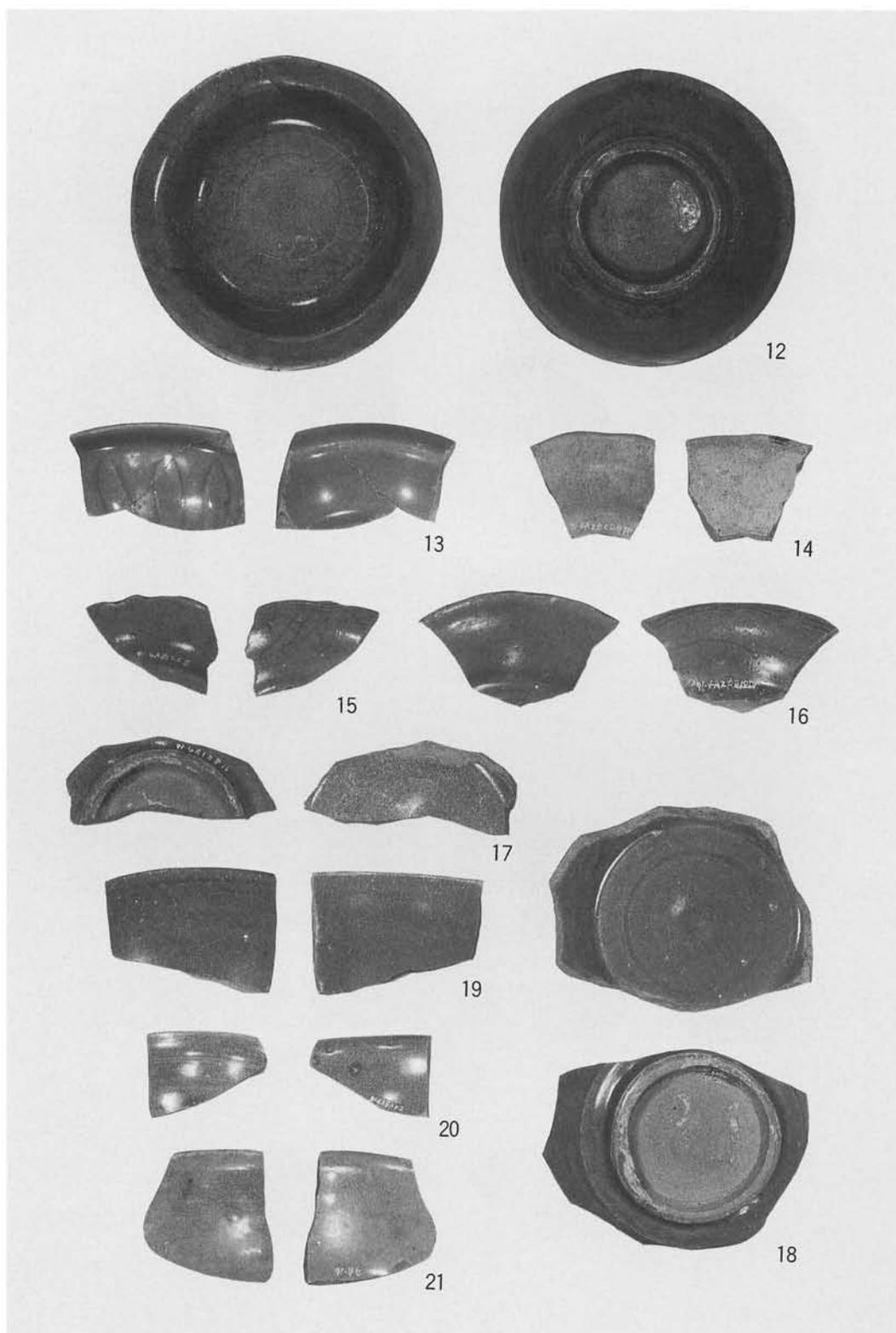


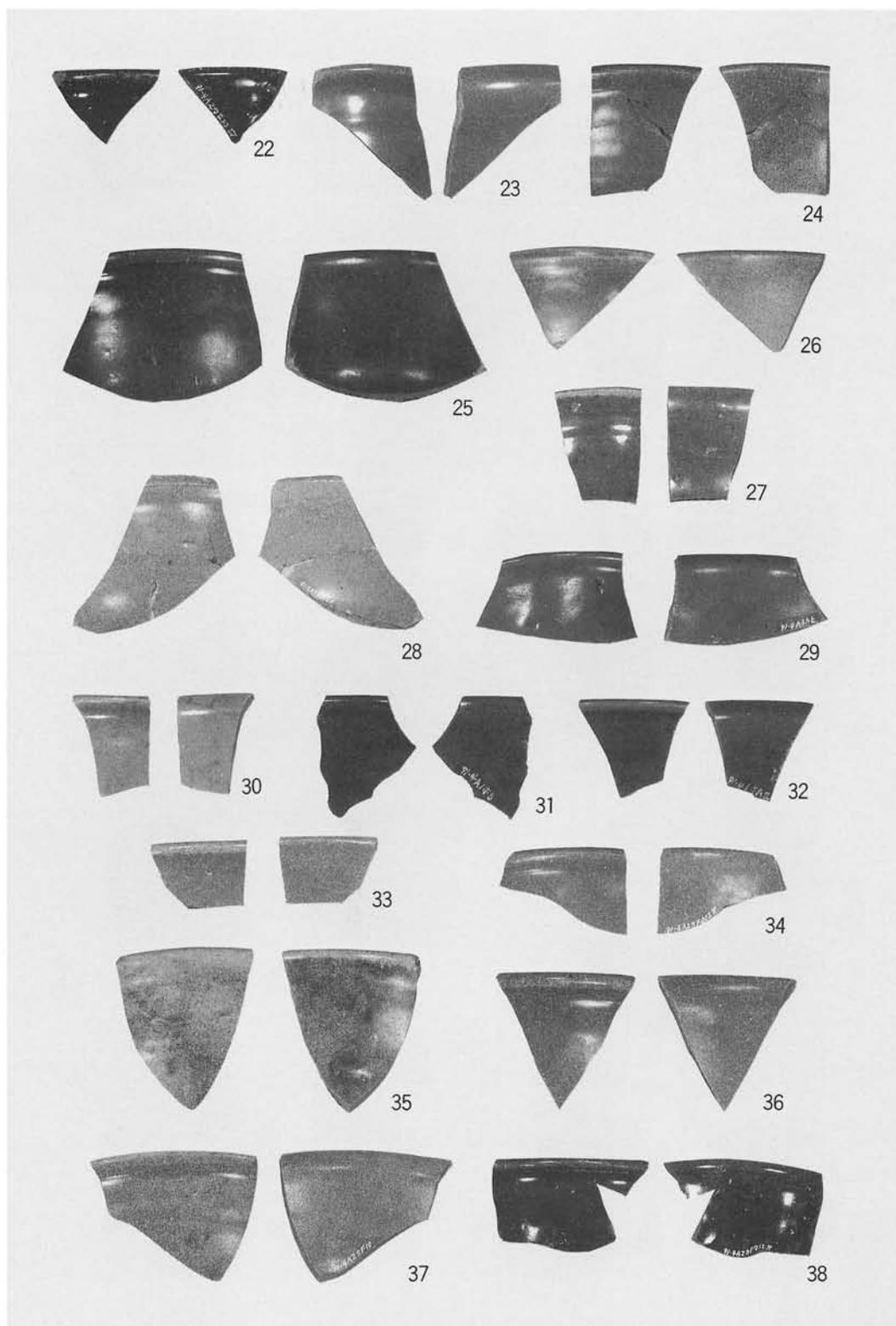
B区 堀切4 完掘 (西より)



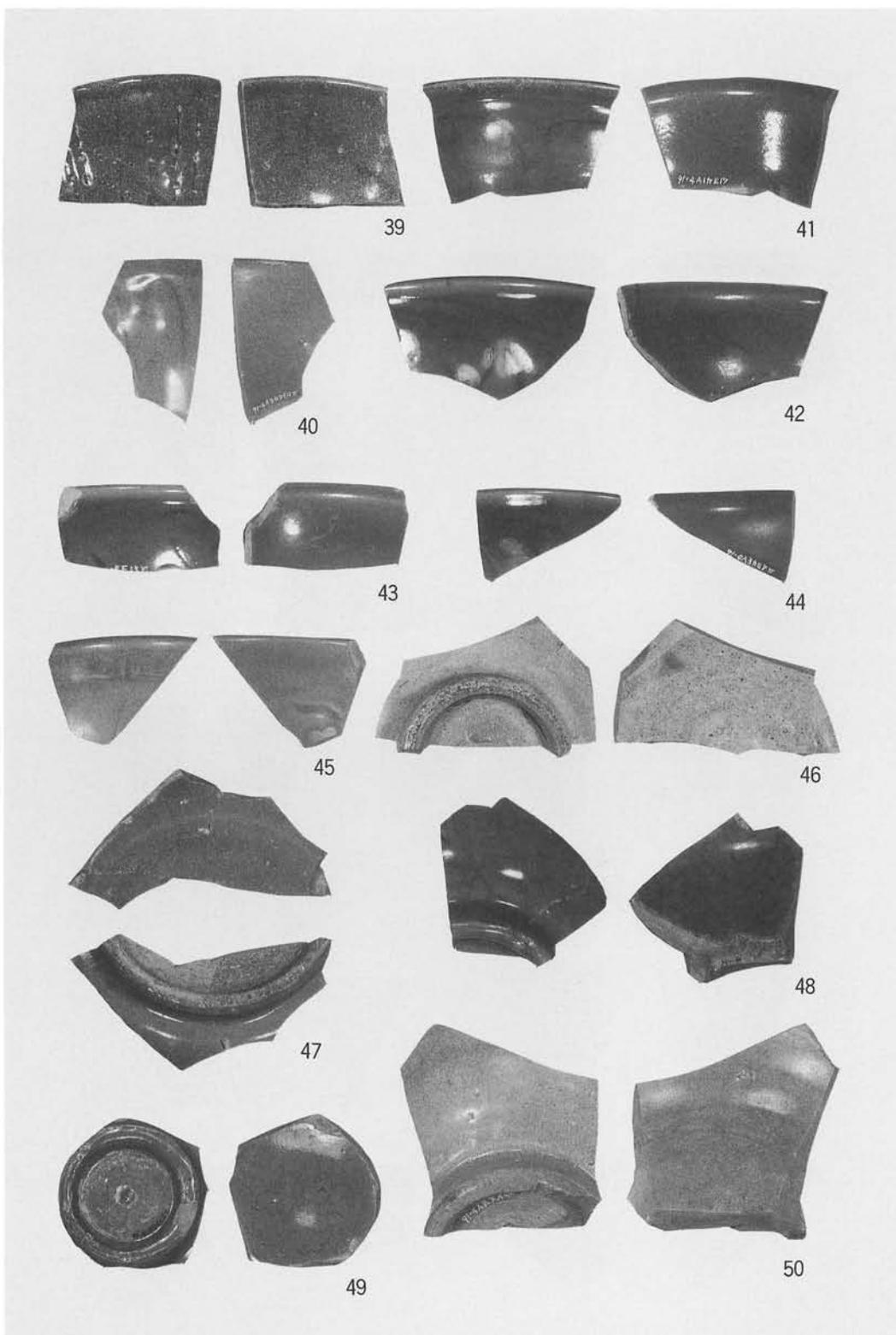


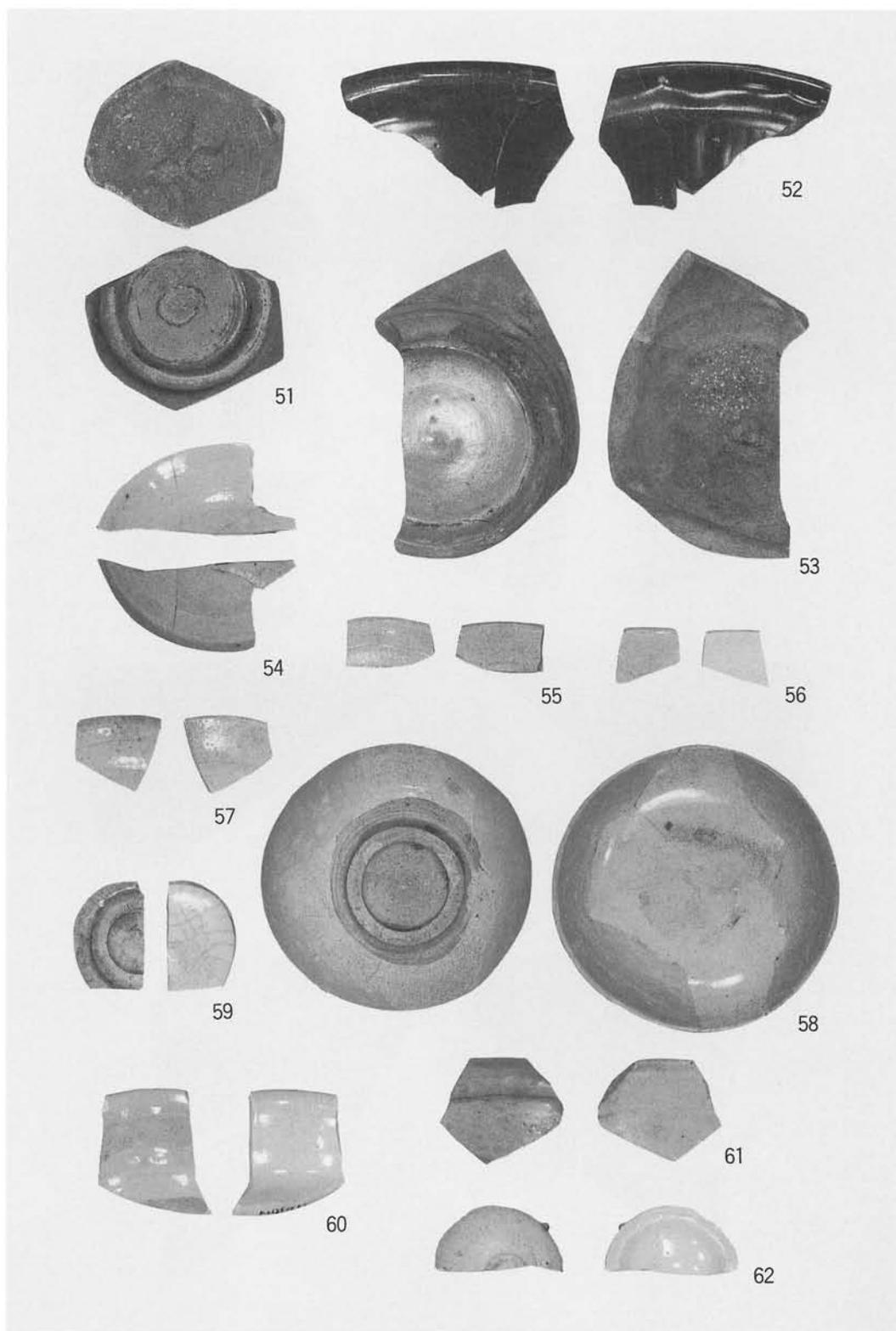
土師質土器・青磁 1



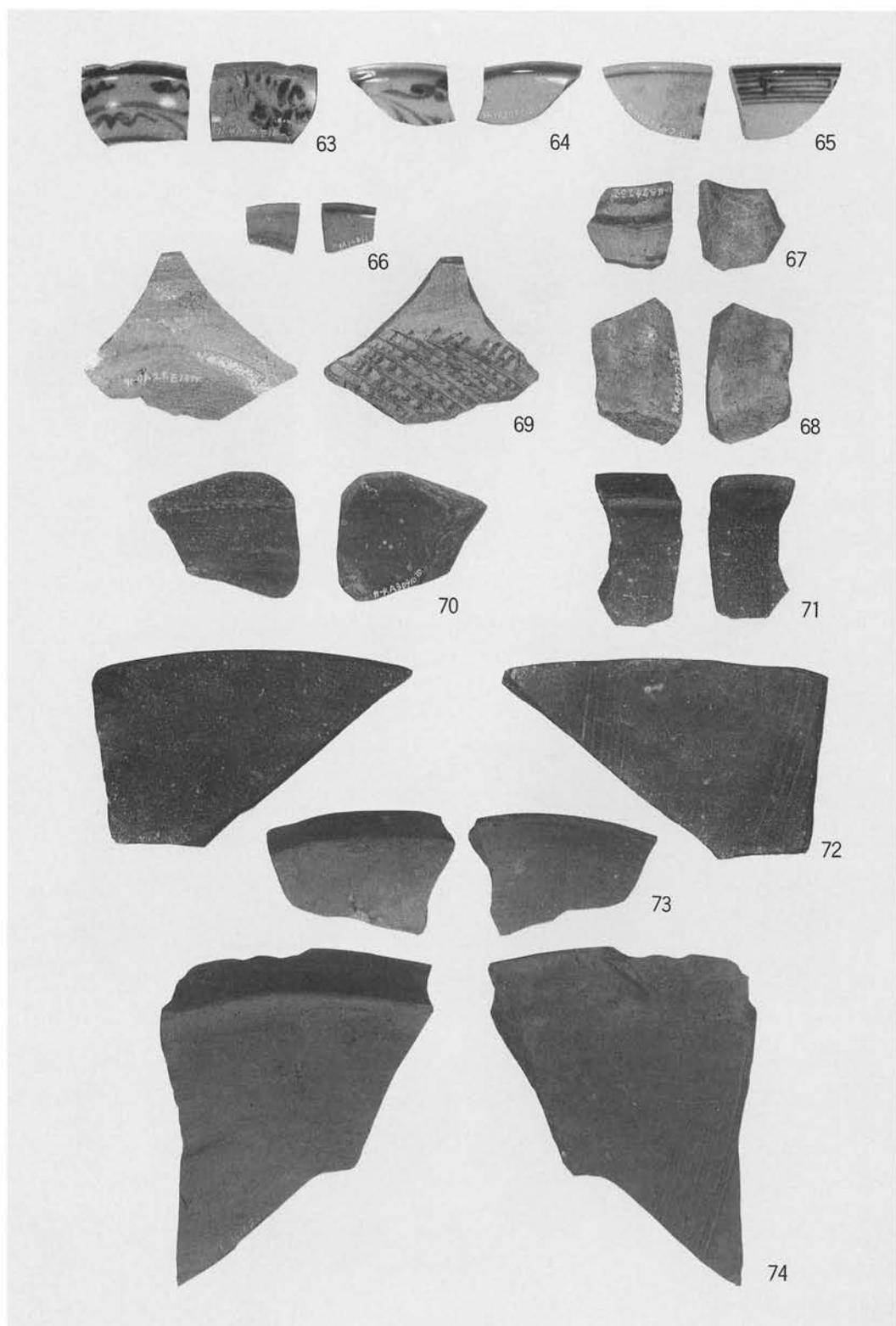


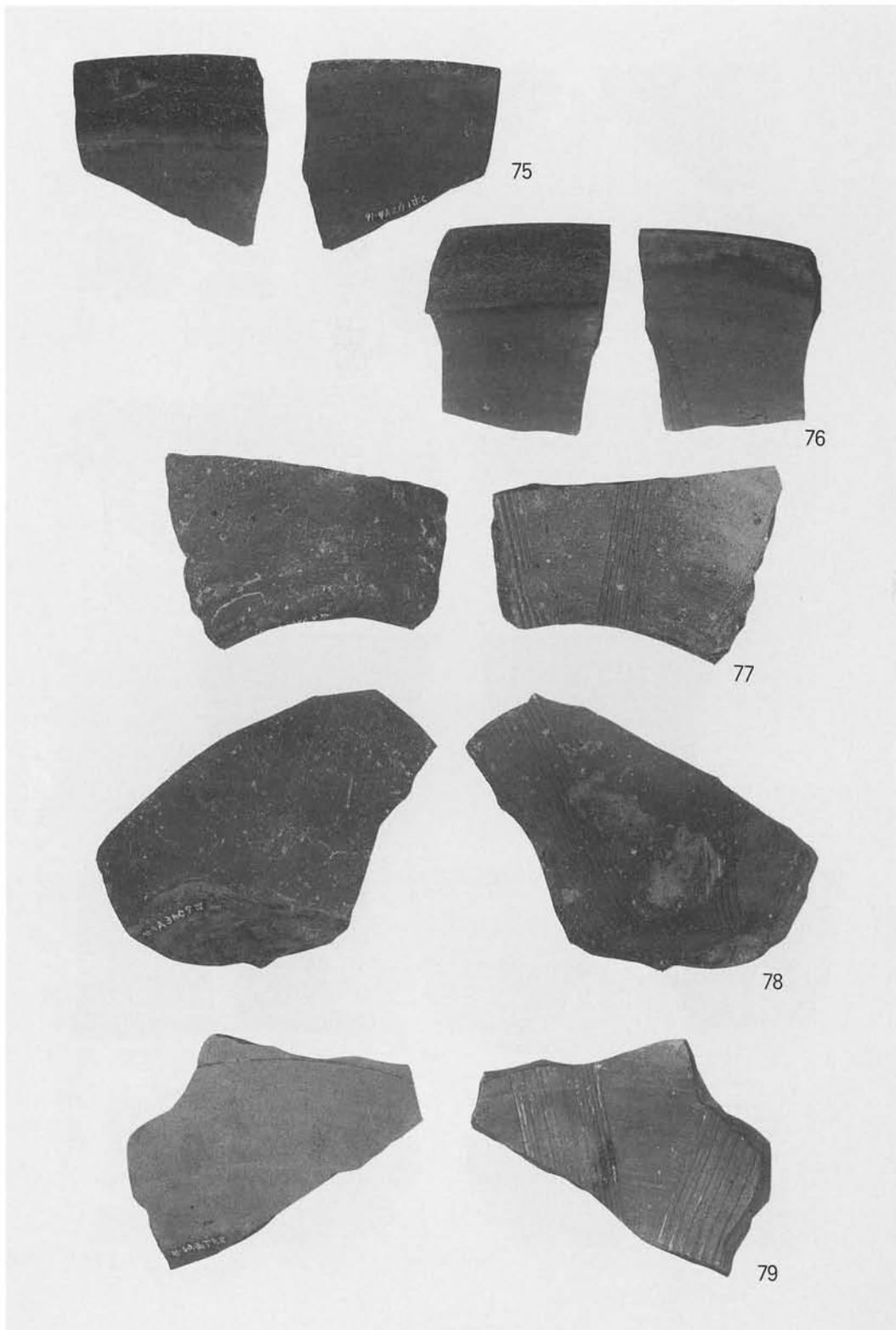
青磁 3

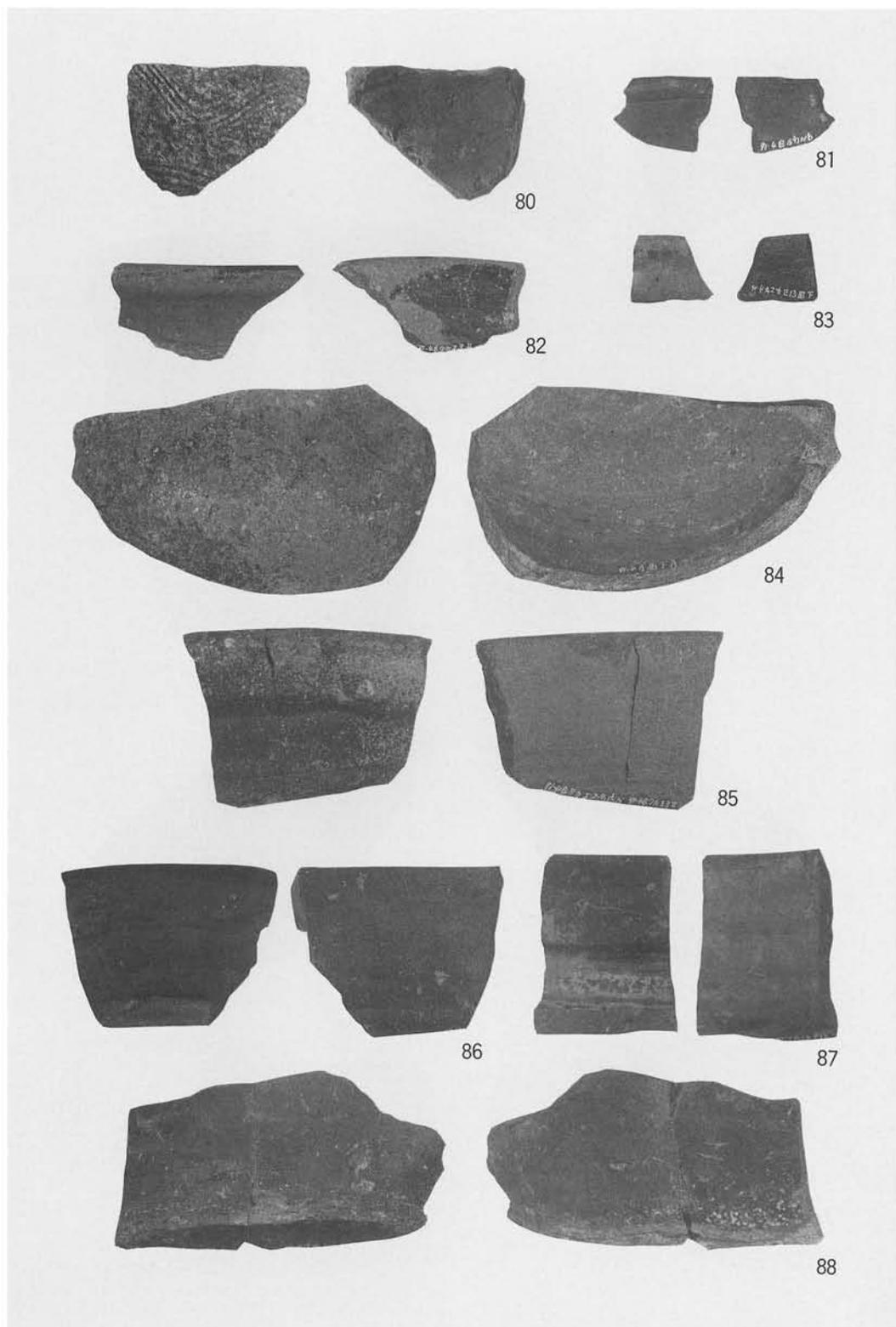


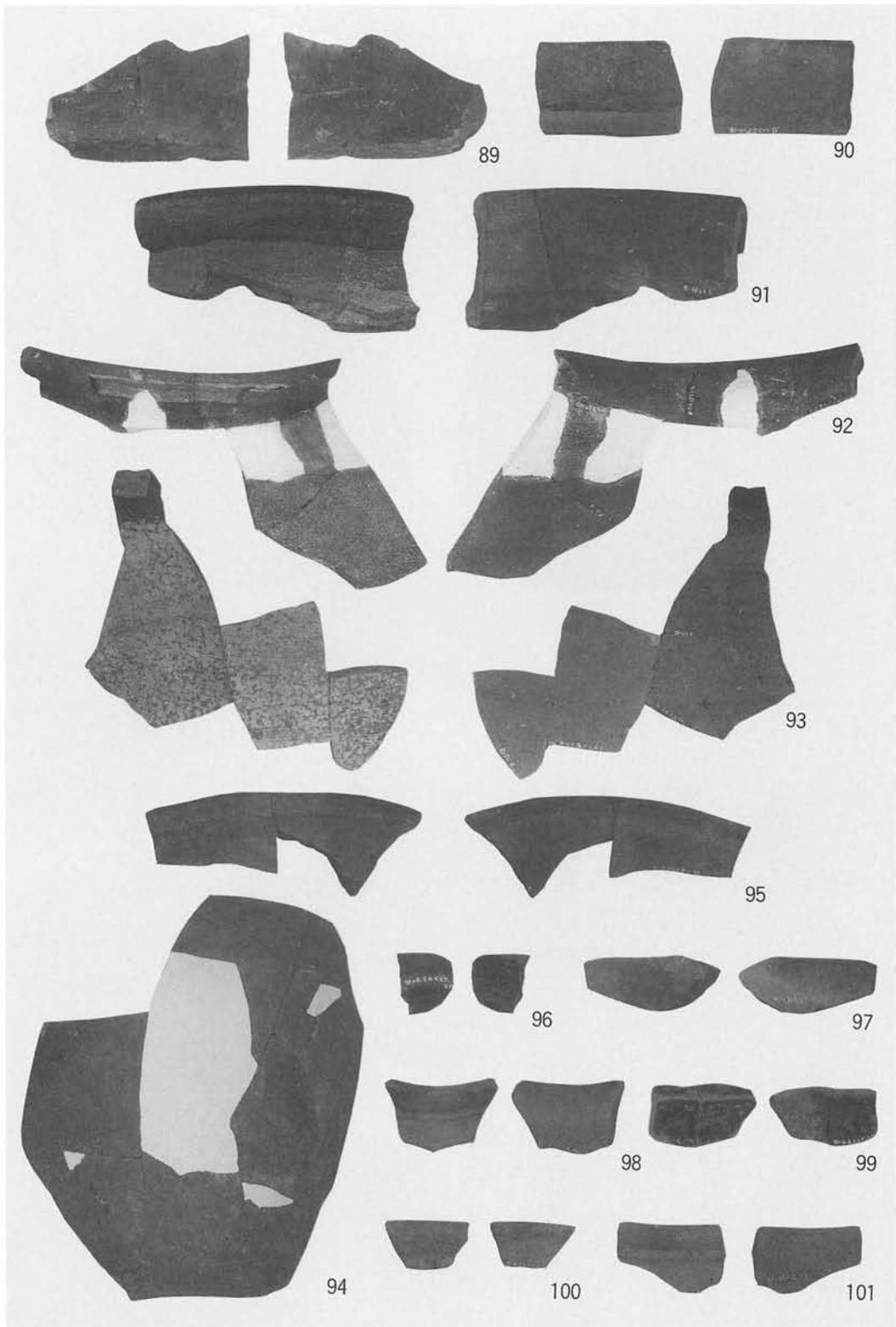


青磁 5 · 白磁 · 伊万里

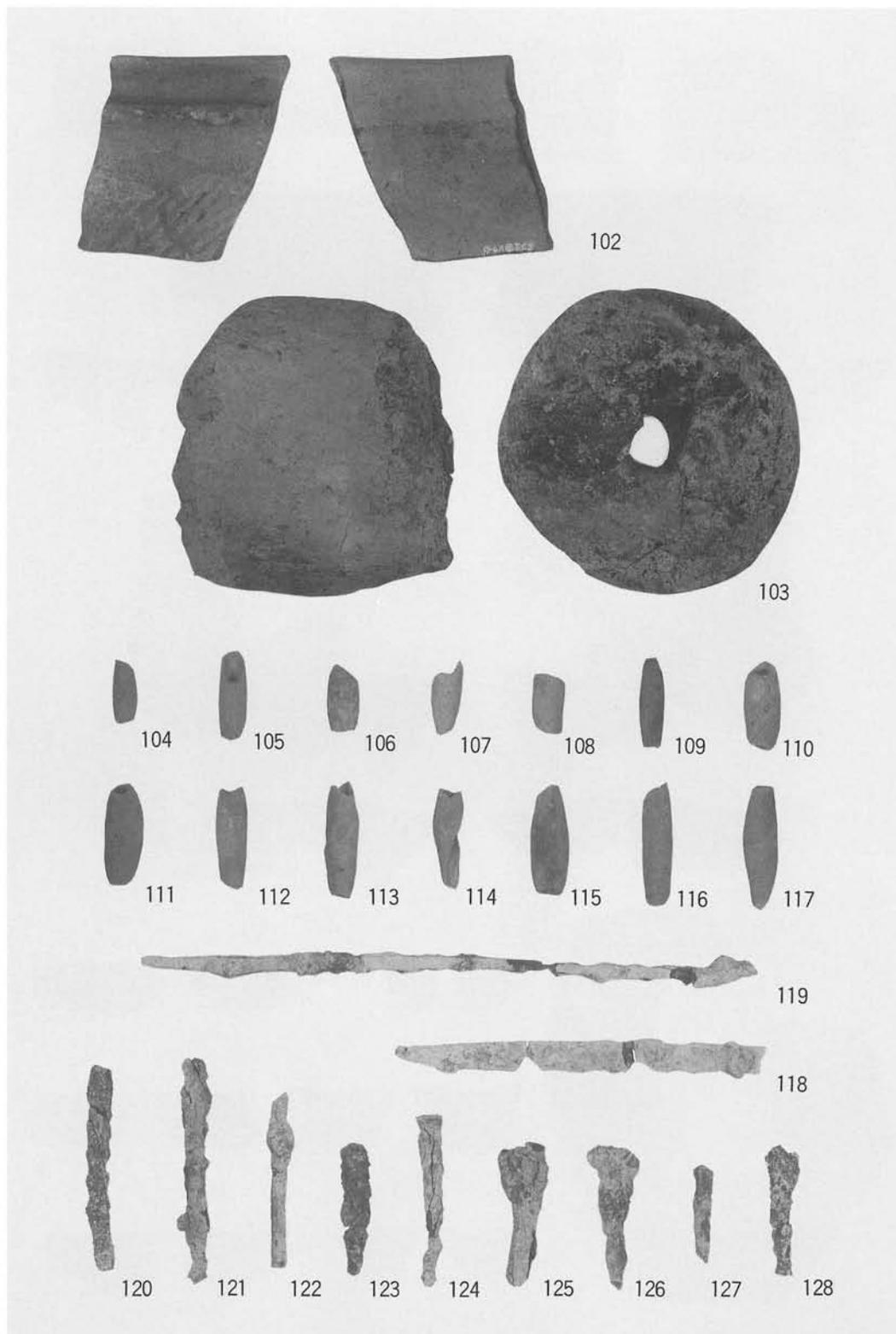




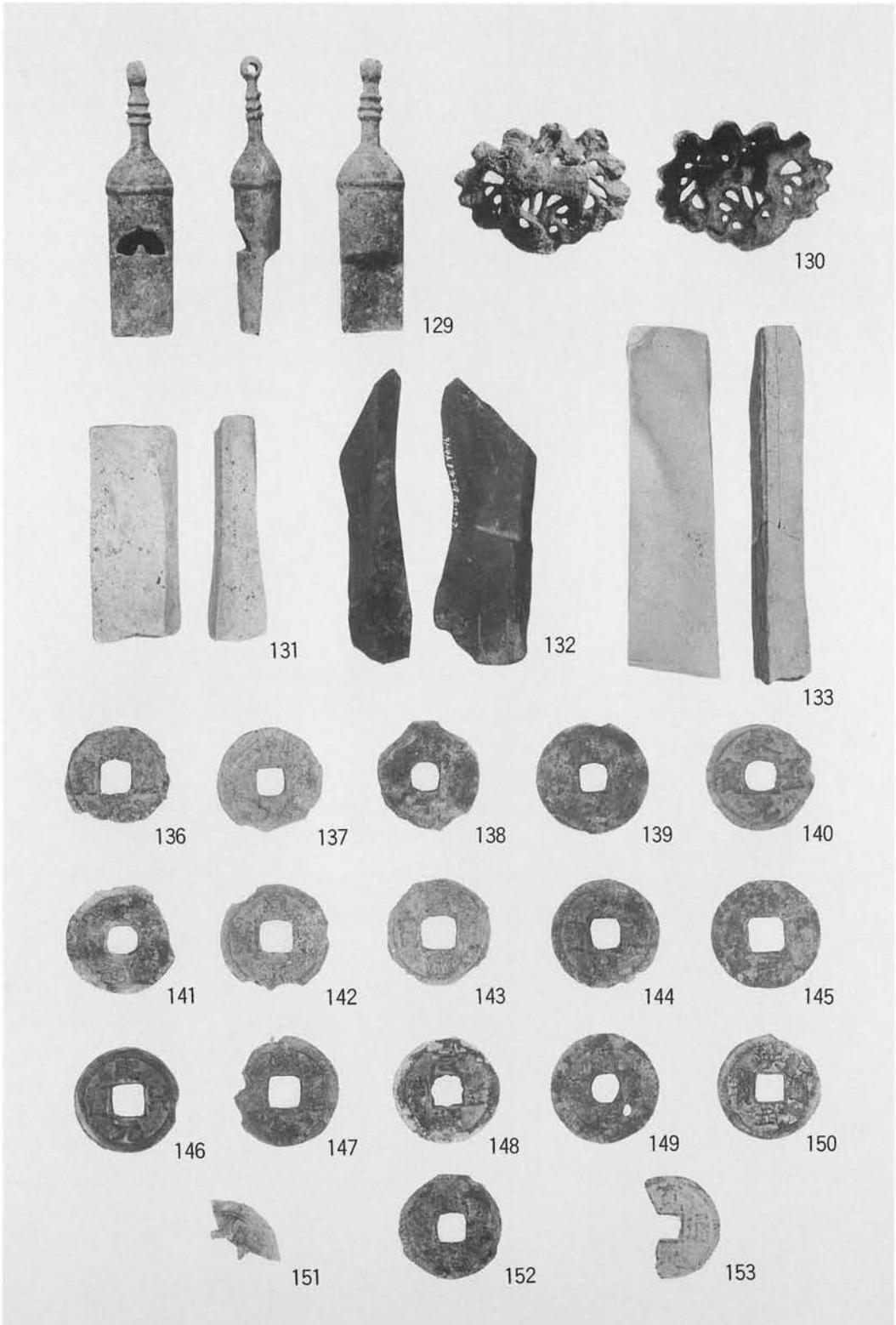




備前4・東播系・土師質土器・瓦質土器

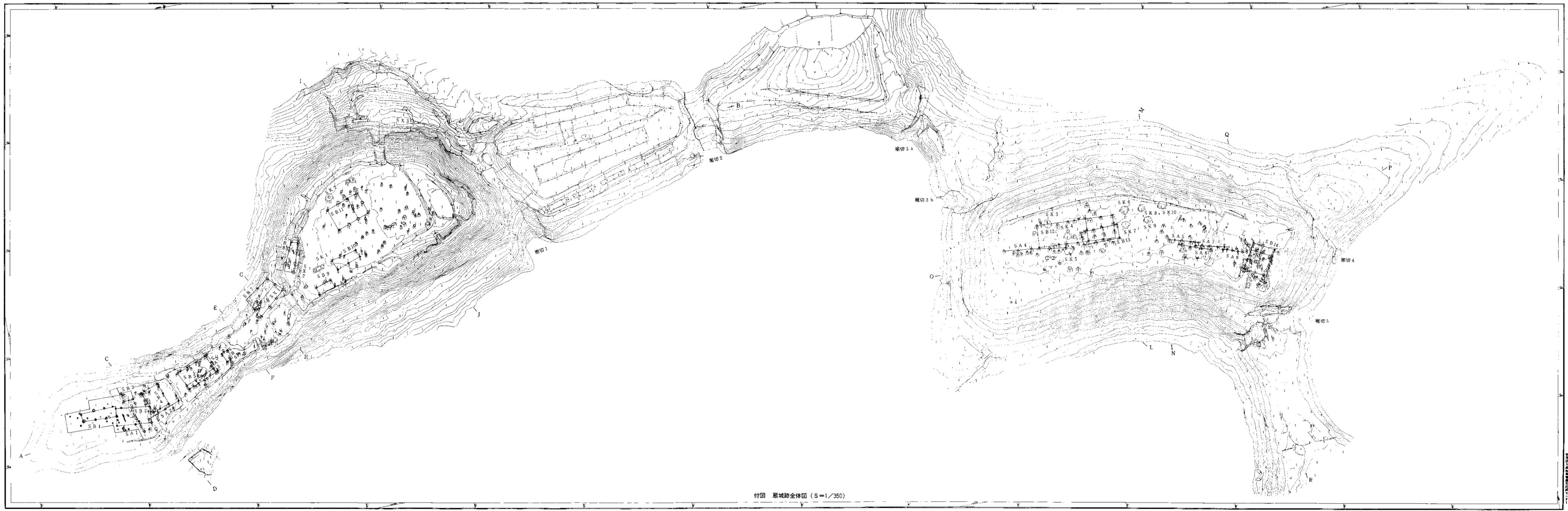


土師質土器・羽口・土錘・刀子・火箸・鉄釘



呼子・飾金具・砥石・渡来銭





付図 扇城跡全体図 (S=1/350)

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第3集

## 扇 城 跡

— 宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1992.3

発 行 財高知県文化財団埋蔵文化財センター  
高知県南国市篠原南泉1437-1  
TEL 0888-64-0671

印 刷 飛鳥出版室  
高知市針木東町21-18  
TEL 0888-44-6022